

ハドソン・テラーの生涯とその秘訣

HUDSON TAYLOR'S
SPIRITUAL SECRET

DR. AND MRS. HOWARD TAYLOR

はしがき

この記録は、ハドソン・テラー氏の生涯について詳細に知らない読者たちのために、特に書かれたものである。本書の共著者による別の詳伝、および、マーシャル・ブルームホール氏のもっと新しい著書を読まれたかたにとつては、特に新しい事実は記録されていない。しかし、欧米にはハドソン・テラーの名前を聞いたこともないような人たちが多い。その人々の中で、二巻もの大冊を続読む時間はないが、ハドソン・テラーの得ていた内的な喜びと力を必要とし、心からそれを願っている人が少なくない。

著者たちの願いは、多忙な人々が父の経験を知りうるようにすることである。その働きの実によつてだけでなく、父の存在そのものを、父が神のうちに見いだしたことによつて著者たちがみずから祝されたことを感謝している。

神の方法は人である。教会はよりよき方法を捜しているが、神はよりよき人を捜しておられる。今日、教会が必要としているのは、より多くの、よりよい機構ではない。新しい組織でも、より多くの珍しい方法でもない。聖霊が用いうる人である。祈りの人、力ある祈りの人である。聖霊は機構の上ではなく、人の上にくだるのである。主は計画をではなく、人―祈りの人―を任命する。

十二弟子の訓練は、キリストの偉大な、困難な、忍耐を要するわざであつた。……

神が必要とされるのは、特別の才能の人でも、大学者でも、大説教家でもない。神が必要とされるのは、聖潔において、信仰において、愛において、忠実さにおいて偉大な人、神のために偉大な人である。説教壇でのきよい話と、その結果としてのきよい生活によつて常に説教する人である。このような人によつて、神のための世代が生まれうるのである。

E・M・バウンズ

ヘンリー・M・フロスト博士にささぐ

四十二年の長きにわたり、チャイナ・インランド・ミッションの北米代表として、父の愛と尊敬を受けられし博士に、父と子の二代の愛をもつて。

目次

一	はしがき	1
二	公然の秘密	2
三	若い魂の成長	4
四	信仰の第一歩	6
五	信仰による前進	9
六	試練に強められた信仰	14
七	友情とそれを越えるもの	21
八	「完全」―神の方法	29
九	収獲の喜び	38
一〇	陰での数年間	46
一一	神に対して沈黙する人	53
一二	神につかわされた人	58
一三	霊的な緊張事態	65
一四	暗黒の日々	66
一五	新たにされた生涯	76
一六	かわくことなく	81
一七	あふれ出る	88
一八	あふれ流れて	108
一九	今も尽きぬ流れ	138
付記	あながき	131
年譜		136

一 公然の秘密

思わずらつてはならない

ただ一つのことだけでも

その一つがあなたにとつて

すでに重荷にすぎるのだ

わざをなすのはわたしの務め

ただわたしの果たすべき分なのだ

あなたの務め

それはわたしのうちにいこうこと

ハドソン・テラーは隠者ではなかった。実務家であり、一つの家族の父であり、大きな責任をかかえた人であった。きわめて实际的で、あらゆる階層、あらゆる環境の人々の間で、落着くひまもなく生きた人であった。特に体力的にすぐれていたわけでもなく、その双肩に地球をになうといったたぐいの人でもなかった。背だけは低くて、とてもじょうぶとは言えない、いつも肉体的な制約に直面しなければならぬ人であった。若いころの彼にとつて最も幸いであつたのは、敬けんな両親に育てられたことを別にすれば、十六歳のころから自活を余儀なくされたことである。彼は努力家となり、有能な医師となつた。彼は大事業を始めたり、世界じゅうの思慮ある人々の霊的指導をすることもできたが、一方また、それに劣らぬくらいよく赤んぼうの世話や料理、経理などもできたし、病める人や悲しむ人の慰めとなることができた。

特筆しなければならないことは、彼が実際に神の約束を信じて生き、最高の水準を保つた霊的生活を、一貫してなしようという事実を証明したことである。過去においてもほんのわずかのしか経験していないような困難を克服して、彼は一つの事実を残したが、それは彼の死後二十七年を経た今もますます発展している。中国の内陸地方が福音に対して門を開いたのは、主としてこの人の働きを通してであつた。それまでは福音の伝えられていなかった地域で、何万という魂がキリストにかちとられた。給料の約束もなく、すべての必要が満たされるために、ただ主に信頼して働く千二百人の宣教師がおこされた。経済的な援助を求めて訴えることを一度もしないのに、負債の経験もなく、だれに参加を願つたわけでもないのに最近も二百人の新しい奉仕者を、祈りに答えられて送り出している。こうしたことからわたしたちは、ハドソン・テラーの信仰と献身にならえという呼びかけが心に迫るのを覚える。

このような生涯を送る秘訣はなんだろうか。常に神とともに進む彼には、こうした秘訣も多かつた。しかも結局それは、ただ一つのことであつた。すなわちその秘訣とは、物質的にも、霊的にも、すべての必要を、「キリストの測り知れぬ富」から得るという、単純で、深淵な事柄であつた。彼がどのようにしてそれをしたかを知つて、わたしたちも霊的な問題に対して、彼と同じように实际的な態度をとり、それによって問題を解決していただき、重荷を軽くしていただき、神の期待どおりの器になることができるであらう。

ハドソン・テラーの聖書はわたしたちの聖書であり、彼の神はわたしたちの神である。それゆえわたしたちも、ハドソン・

ティーラーの秘訣を悟って、彼のような成功を得たいし、またそうする必要がある。

∴指導者たちのことを、いつも思い起こしなさい。彼らの生活の最後を見て、その信仰にならないさい。

イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変わることがない。

二 若い魂の成長

あなたの目をイエスに向け

すばらしいみ顔をはつきり仰ぎなさい

この世に属するものは

栄えと恵みの光の中に

不思議に薄れて行くでしょう

エ・レムメル

若いハドソン・テラーが、父親の書架をあさっていたある静かな時に、すべては始まる。彼はおもしろい本はないかと思つて捜していたのである。母親がするすの家の中は、まるであき屋のようで、少年は寂しかった。彼は飽きるまで読むつもりで、見つけた本を持って、古い物置きの中のいつもの場所へ行った。

その土曜日の同じころ、八十キロも離れた所にいた母親は、むすこのために何か特別の重荷を感じていた。母親は友だちから離れて、ひとり主の前に何時間もひざまずき、むすこの救いのために熱心に祈り求めた。やがて祈りが聞かれて答えられたという確信に満たされるようになった。

一方、少年は捜してきた小さな本を読んでいたが、話が核心に触れて行くところで、「キリストの完成されたわざ」という表現に捕えられていた。聖霊の働きの不思議を、いつたい、だれが説明できようか。少年は正確に考えつきはしなかったが、と

にかく長い間よく知っていた真理が思い出され、心によみがえつてきたのである。

「このような表現をしているのは、どういう理由からだろう。あがないとか、和解のわざと言わないのはなぜだろう」と考えた。するとすぐに「すべてが終わった」という文字が、光で書かれているかのように輝くのを覚えた。「何が完成されたのだろう」。

「罪の十分で完全なあがない」。彼の心は答える。「身代わりとなられたすばらしいおかたが、負債を払って下さった」。

「キリストはわたしたちの罪のために、否、わたしたちのみでなく、全世界の罪のために死んで下さった」。

その時、次のような考えが非常にはつきりと心に迫ってきた。

「すべてが完了し、借りになっていた分が、みな支払い済みになつてしまったのなら、自分のすべきこととしては、何が残っているのだろうか」。

彼の心には、ただ一つの解答があつた。「ひざまずいて救い主と、その救いを受け入れ、いつまでも主を賛美すること以外に、この世になすべきことは何も残っていない」。

長い間の疑いや恐れは消えた。あのすばらしい経験のゆえに、彼は平安と喜びでいっぱいであつた。彼はキリストをすなおに受け入れ、新しい生命を得たのである。「彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えた」からである。この新しい生命によつて生まれた変化は、まことに大きかつた。

二週間ほどして母親が帰宅した時、まず迎えたのは彼であつた。彼はこの新しい経験をいっしよに喜んでもらおうと、その帰りを待っていた。

「おかあさんは知っていますよ」、彼をかかえるようにして優しく母親は言った。「あなたが話そうとしていることが何かは、もう二週間も前から知っていました。わたしはこのうれしい知らせを喜んでいました」。

それからほどないある日、彼は自分のものだと思つて取り出したノートを見た時、またまた驚いてしまった。そこには妹の字で、「神が祈りに答えて下さつて、ただひとりの兄が救われるまで、いつしようにけんめいに祈ります」という意味のことが書かれてあつた。この決意は、ちょうど一か月前にノートに書かれたものであつた。彼は言う。

このような人たちの間で青ち、このような環境で救われたので、信仰生活の初めから聖書の約束が真実そのものであると感じ、祈りは、それが自分のためのものでも、他の人々のために祝福を求めるものでも、現実に神との取り引きであると感じるようになっていたのは、おそらく当然のことだろう。

兄と妹とは、今は新しい意味で一体であつた。兄の彼がわずかに十七歳にすぎなかつたのだから、ふたりは確かに若かつた。しかも彼らは全力を尽くして、人をキリストに導く努力を始めた。彼らがこの時から急速に霊的成長をした秘密は、実にここにあつた。ふたりは、失われ滅びてゆく人々に対する主ご自身の熱い思いを、最初からよく知る者となつた。

彼らが導かれて行つた方向は、「社会奉仕」ではなく、何よりも魂の救いを重荷として人々のために生きることであつた。そ

れは絶対に優越感などによるものではなく、ただ主イエス・キリストへの深い愛から出たものであつた。

日がたつにつれて、昔の道に陥つたり、主の臨在の喜びを失つたりする時、非常に彼を苦しめたのはこの愛であつた。若いキリスト者に見られるように、調子に波があつたり、祈りやみことばの学びを怠つたりすると、心が冷たくなるのが常であつたからである。それでもハドソン・テラーの若いころの経験で目だつていたことは、神の最善以外の何物によつても満足することができなかつたということである。それは神の臨在を、いつも現実に楽しむことであつた。これなしに過ごすことは、日光なしに生き、力もないのに働くということにほかならなかつた。彼が若い時から主の喜びを知つていたということは、次に引用する回想からも明らかである。特に用事もなかつたある午後、彼は祈りの機会を得て、深いかわきを覚えつつ、ひとりで神と交わるために自室へ行つた。

喜んで神の前に魂を差し出したことを、よく思い出すことができる。わたしのためにすべてを成し遂げて下さつたかた、救いの望みまでも含めてすべての希望を捨ててしまつた時に、わたしを救つて下さつたかた、このかたの愛を、感謝とともに何度も告白した。わたしの愛と感謝の現われとして、何かなすべき仕事を与えて下さることを神に求めた。

わたしが、自分自身も、自分の生命も、友人も、わたしのすべてを祭壇に置いた時、わたしのささげ物が受け入れられたという確信が与えられ、同時に深い厳粛な思いに迫られたことをよく思い出すことができる。

神の臨在は、ことばでは表わせないほど生き生きとして祝されたものであった。地面に身を伏せ、言いたい恐れと喜びをもつて、主の前にひれ伏したことを覚えている。どういう奉仕のために受け入れられたのかは知らなかったが、わたしがわたし自身のものではないという強い自覚を与えられた。この自覚は、今日までもずっと続いている。

このような霊の経験をするには、十代の少年少女では若すぎる、という考えは確かにまちがいである。もし心の底にあるものが、キリストの愛に向かって開かれているなら、人の一生を通してこの時期ほど献身にふさわしい時期はない。

三 信仰の第一歩

彼の行くところ

目に見えないキリストが

いつもかたわらにいて

感動を与えられる

彼がみ腕によりかかつて

尋ねることができるよう

「これは許されることでしょうか」と

エ・M・ロングフェロー

この意味での召命を受けた時、彼は決して完全な人間ではなかった。忙しい毎日を送っている普通の少年であつた。銀行員として勤めたり、父の店の手伝いとして働いたりするうちに、誘惑は多かつた。元気のよいところが同じへやに住むようになると、第一のことを第一にしたり、祈りの時間を見いだしたりすることさえも容易ではなくなつた。しかしこれをなくしては、ただ失敗と不安だけが残る。飢えた魂は主を喜ぶことができない。ハドソン・テラーは霊の真の祝福を得るために、ほかには道のないことを学ばなければならなかつた。神に対して深い知識を持つてゐる人は「わたしは主を見て、主を尋ねた。主を得て、主を求めた」と語つてゐる。このバーンズリーの若者は、まだ霊的な歩みを始めたばかりであつたのに、これと同じ幸いな飢えとかわきを感じていたのである。それは、主が喜んで満たして下さる飢えでありかわきであつ

た。「わが魂はあなたをかわき望む」。これはダビデの熱望したところであつた。「わたしの魂は……飽き足り」るが、そこにはすぐ「わたしの魂はあなたにすがりつき」ということばが続いてゐる。

ハドソン・テラーが新しい意味で神の取り扱いを受けたのは、敗北、かわき、より豊かな祝福というようない連の経験においてであつた。だれのことばも聞かずに彼は、一瞬のうちに理解したのである。彼はぎりぎりのところまで来た。彼のみが救われるところであり、神の救いとその救いの力を得なければならぬところである。もし神が彼のために働こうとされ、罪の力を破つて、キリストにあるうちなる勝利を与えて下さりさえすれば、彼は地上のすべての望みを捨て、どこへでも行き、なんでもして、主のために必要な何事にも耐え、全く主のみ手に自分自身をゆだねるのであつた。もし神が彼を聖別し、つまずかないようにして下さりさえしたなら——というのが彼の心の叫びであつた。ずつとあとになつてから、彼は次のようにしている。

決してその時の気持ちを忘れないであらう。ことばでは言い表わすことができない。神の臨在の中にあつて、全能者との契約関係にはいつてゐるという感じだつた。わたしは自分の約束を撤回したいと感じたが、それができなかった。「あなたの祈りは聞かれた。あなたの条件は受け入れられた」と何かが言つてゐるようだつた。その時以来、中国への召命の自覚を失つたことはない。

中国―彼は、父親の祈りの中に、幼い時からこの大国の名を聞きなれていた。彼が誕生する以前からそのためにささげられていた中国。その必要と暗黒が、遠くから彼を幾度となく招いている中国。彼の生涯についての神の目的は、ほんとうにそこにあつたのであろうか。彼は、だれかの語りかけを聞いているかと思うほどはつきりと、声なきことばを聞いたのであつた。

「それでは、わたしのために中国へ行きなさい」。

この瞬間から彼のすべては、唯一の大きな目的と祈りに集中された。ハドソン・テラーは「天よりの啓示にそむか」なかつた。彼にとつて神の御旨への服従は、きわめて実務的な事柄であつた。彼は肉体の耐久力を要求される生活のために、ただちにできるだけの準備を開始した。屋外での運動量をふやし、羽毛のベッドを堅いマットレスに替え、食事のえり好みをしないように注意を払つた。日曜日には二回、朝と晩に教会へ行つていたが、晩の集會に出席することをやめて、貧民街へ出かけて行き、トラクトを配布したり、家庭集會をすることにした。まもなく彼は満員の安宿にも好意をもつて迎えられるほどになつた。明るく、親切に語る彼は、競馬場でさえも、みことばをそのままに幾度も語ることができた。こうしたすべてのことによつて彼は、さらに多くの聖書研究と祈りに努めるようになった。彼はまもなく、わたしたちを「人間をとる漁師」とすることができるのは、主だけであることに気づいたからである。

中国語の勉強も熱心に始めた。この容易ならぬ言語の文法書は、二十ドル以上もし、辞書にいたつては少なくとも七十五ドルはした。彼にとつては、いずれも高嶺の花であつた。彼は中国語のルカによる福音書一冊を用いて、忍耐強く、何節づつか

を対照するという方法で、六百以上の漢字の意味を学んでしまつた。この方法と他の方法を併用して学びを進めた彼は、ついに自製の聖書をまとめあげるまでに至つた。彼は、学校にいた妹にあてて書いている。

五時起きを始めたので、早く寢床につかねばなりません。中国へ行くつもりなら勉強が必要です。わたしは行く決意を固め、できるだけの準備をしています。ラテン語の復習をし、ギリシア語とさらにヘブル語の基本をも学び、できるだけ広く知識を得たいと願っています。お祈り下さい。

薬剤師として父親とともに数年間を過ごした彼は、その間に医学研修をいよいよ強く願うようになった。ハルの有力な医師の助手になる機会があつた時、彼はちゅうちょせずそれを捕えた。これは彼が肉親のもとを離れることを意味していたが、彼はそれをもいとわなかつた。家を離れた彼は、最初はその医師の家に住み、次に母かたのお婆の家に住むようになったが、この若い助手の置かれた環境は、それまで過ごした自分の家庭での生活と同じように、上品で豊かなものであつた。

このことも、新しい生活において彼が真剣に考えさせられるようになったことの一つである。ハーデイ博士からは十分な生活費が支給されたが、ハドソン・テラーは与えられるすべてのものの十分の一を神のわざのためにささげていた。それは彼の責任であり、特権であつた。聖日には、物質的にはもちろんのこと、霊的にもきわめて貧しい人々の住んでいるその町の中の一地域へ行つて、伝道に専心していた。このことから彼は、自分

のための消費をもつと切りつめ、より多くを他人に与える喜びにあずからなくてはならないと考えるようになった。

この町の郊外にある空地の向こうに運河があった。運河に沿って小屋の群れが二列に並んでいたが、この運河のためにこの地域は、ドレイン・サイド（どぶ町）と好ましくない名前と呼ばれていた。この運河はただの深い溝で、人々は習慣的にここにごみを投げ捨て、満潮の時に水がそのごみのいくぶんかでも運び去るのを待つのであった。

ハルは港町であつた。さやの中の豆のように、曲がりくねつた運河沿いに、ドアが一つ、窓が二つという構造の小屋の群れが一キロ近くも続いていた。

ハドソン・テラーは、シャルロット通りの快適なお婆の家を離れて、小屋の一室を借りて住むことにした。その家の主婦のフィンチ夫人は真のクリスチャンであつたので、若い医師に同居してもらうのを喜んだ。おそらく彼は、へやをきれいに住みよくするために、窓の反対側にある暖炉をみがいしたり、できるだけ入り口から離れた所にベッドを置いたりしたに違いない。

安い簡単な木製のテーブルと、一、二脚のいすのほかには、別に置くものもなかった。へやは三メートル半四方ほどであつたから、たいして家具も必要ではなかった。へやの床は地面と同じ高さで、台所からは直通であつた。窓からは道を隔てて居酒屋の、[、]ブアウンダース・アームズが見えたが、その照明が溝のどろ水を照らしてくれるので暗い夜には便利だった。

夏の間はとにかくとして、ハドソン・テラーが住みつくようになった十一月末のドレイン・サイドは相当わびしいものだったに違いない。彼は環境が変わっただけでなく、自炊もするよ

うになつていた。病院からわずかの食物を持ち帰って食べ、まともな食事をすることはまれであつた。歩く時も、くつろぐ時も、彼はひとりであつた。日曜日には近所で、またハムバー波止場に出入りする人たちの間で、長い時間働いた。彼は回想している。

困難に耐えることに慣れようとするのと、わたしが福音を伝えて奉仕する相手の人々の何人かを助けるために節約するという二重の目標を得て、以前考えていたよりもはるかに経済的な生き方ができるのに気づいた。、バターやミルクなどのぜいたく品の使用はやめ、時には変化をもたせたがオートミールと米を主食とした。その結果、自分の生活費はごく僅少ですみ、収入の三分の二以上を、他の目的にふり向けることができた。自分のための費用を節約すればするほど、他に与えれば与えるほど、さらに豊かな喜びと祝福を得るというのがわたしの経験であつた。

神はだれに対しても、債務を負わせるようなかたではない。孤独の中でハドソン・テラーは、いっしょうけんめいに従う者にとつて、主がどのようなおかたでありうるかということを学んでいた。犠牲を喜ばぬ現代のキリスト教の中で、神の用いられる器になるには、現実には、現実に価を払わねばならぬという事を思い起こすのは尊いことである。何もしないでキリストに似た者となることはできない。大きな価を払うことをしないで、キリストのようなわざをなすことはできない。「わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることができるか」。

當時は長髪賊の乱が異常な方向に展開していたため、多くの人の注意が中国に向けられていた。祈る人も多く、多少なりとも中国伝道に心を動かされた人は無数にいた。しかし、将来性を約束されていた計画が失敗に終わると、大多数の人々は祈りもせず、気にもかけなくなってしまうという失望すべき結果が明らかになされた。祈り会は衰えてついに消滅し、宣教師になりたがつていた人々も他の仕事につくようになり、献金の額も急激に低下して、このために現実に存続できなくなった団体も一つにはとどまらなかつた。しかし、主に認められる人々は、そこ、ここにいた―おそらく彼らは貧しく、弱く、人に知られず、重要な人物ではなかつたであろうが、主のご計画実現のためには、どこへでも行こうとしていた人たちである。

ドレイン・サイドの静かな下宿に、この種の人物がいた。いろいろな意味での自分の限界を知らながらハドソン・テラーは、何よりもキリストのような品性と生活を願っていた。避けられたかもしれない試みが、次から次へとやってきた時、彼はおのれをむなしくする道、十字架の道を選んだ。それは彼自身が認められるためではなく、ただ聖霊に導かれたゆえである。このような態度は、与えられるべき祝福をのがさぬ態度であつた。

「見よ、わたしは、あなたの前に、だれも閉じることのできない門を開いておいた。なぜなら、あなたには少ししか力がなかつたにもかかわらず、わたしの言葉を守り、わたしの名を否まなかつたからである」。

「有力な働きの門がわたしのために大きく開かれているし、また敵対する者も多いからである」。

この時、ハドソン・テラーの前進をはばもうとする敵は確かにいた。その時は、彼にとつても、また他にとつても、きわめて豊かな時であり、生涯の最も実り多い時期にさしかかつていた。そこに誘惑者が待ち構えていたとしても、不思議ではなかつた。若い者にとつて、決して容易ではない自己否定の生活をしていた彼は、孤独であり、愛と同情とに飢えていた。それはまさにサタンのチャンスであつた。事実、しばらくの間最悪のわざをなすことがサタンに許されたが、それも結局はただ最善に変えられるためのものにすぎなかつた。

彼がドレイン・サイドに来てから二、三週間しかたたないころ、このことに關して彼はたいへんなショックを経験した。彼は非常に愛していた人を、永遠に失つたように思われた。二年という長い期間、彼は希望をもつて待ち続けていた。彼は将来の見通しがはつきりしないために、何が変わっても彼女だけがともにいてくれることを、いよいよあこがれ、いよいよ願うようになった。がしかし、夢はもう終わった。この美人であり美しい声を持つている若い音楽教師は、その友に海外宣教の計画をやめさせることは全く不可能であると知つて、ついに自分には中国へ行く用意のないことをはつきりとさせたのであつた。彼女の父親も相手にしてくれそうもないし、彼女自身さえも、自分がそうした生活に適しているとは思つていなかった。彼女を最も愛していた彼女にとっては全く耐えられぬほどの苦しみであつたが、このことが意味しているものは、ただ一つしかなかつた。誘惑者は「どれだけの価値があるのか」と訴える「要するに、なぜ中国へ行こうと言うのか。なぜ責任感とやらのために苦勞したり悩んだりするのか。まだ彼女をかちとることが

できる。他の人のように普通の生活をして、国内で主に仕えなさい。まだ彼女を得ることができたのだから」。

愛ゆえの苦痛は激しかった。それはよろめきの瞬間であつた。敵は洪水のように押し寄せ、この青年は悲しみに打ちひしがれてしまった。彼は主に慰めを求めず、自分だけで苦しみ悲しんでいた。しかし、彼が見捨てられることはなかった。翌日、彼は次のように書いている。

手術室でただひとり、感動的な時間を過ごした。全く碎かれ、へりくだらせられ、神のすばらしい愛を示された。「碎けた、悔いた心」を神は軽しめられず、祝福を求めるわたしの叫びに、わざと真理をもつて答えられた。しかし、神はご自身を、ともにいますかた、悩みの時のいと近き助けとして現わされた。わたしをへりくだらせ、わたしがなんであるかを示されたのだ。試みの時わたしが全く苦しみを感じないようにはなさらないが、苦しみのうちにも神は歌わせて下さるのだ。「しかしわたしは主によつて楽しみ、わが救の神によつて喜ぶ……」。(ハバクク3・18)

今、救い主の愛の中でわたしは幸いである。すべてについて、過去の最も苦しかった経験についてさえ主に感謝し、きたらんとするすべてについて恐れなく主に信頼できる。

四 信仰による前進

変わることをない神の愛に信頼する者は、動かされることをない岩を礎とする。

ニューマーク

「わたしは犠牲を払うというようなことはしたことがない」。ハドソン・テラーは、明らかに犠牲的であった生涯を回想してこう言っている。彼のこのことは別に誤りではなかった。それは彼が神のお取り扱いを真心から受ける時、そこですでに報いを受けたという実感があまりにも生き生きとしていたためであり、放棄することがそのまま受け取ることとなっていたからである。その冬、ドレイン・サイドにおいて、特にこのことの真実さが経験された。彼の生命の一部になっていた愛、彼の最善であり最高であるものを、キリストに従うことの妨げにならないようにあきらめ、外的にも内的にも神の御旨を受け入れたのであった。犠牲は大きかったが、報いはそれよりもはるかに大きかった。彼は語っている。

一日じゅう、そして毎日、言い尽くせぬ喜びが、わたしのうれしい経験となった。神は、実にわたしの神は、生きて輝く実在であった。わたしがしなければならぬすべては、喜びの奉仕であった。

彼の手紙には新しい調子を感じられた。その時から内省的な要素は少なくなり、宣教師としての目的に貫かれたものとなって

いった。ふたたび中国は彼の思いを支配するものとなった。キリストの救いを知らない人たちの霊的な状態について、さらに心を砕く人の姿がそこにあった。

彼はそのころ、母親にあてた手紙の中で述べている。

母上様、何物によっても心を乱されなざることがありませんように。宣教のわざは、有限の人間が従事しうる最も崇高なわざなのです。もちろん、血族の結びつきについて無感覚でいることはできません。しかし、救い主のために何かを捨てるのを喜ぶべきではないでしょうか。続けてわたしのためにお祈り下さい。物質的な必要は満たされ、幸いな、感謝の日々ですが、なお祈っていたく必要を感じています。母上様、自分が宣教師になり、気の毒な滅びゆく魂によきおとずれを伝えること、わたしのために死んで下さったおかたのためにみずからを用い、また用いられ尽くすことを、どれだけ待ちこがれているか、十分に語ることも書くこともできません。母上様、神なく、永遠への望みもなく、毎年死んでゆく千二百万の中国の魂のことを考えて下さい。そうです。千二百万とはあまりに大きな数字でちよつとピンときませんね。この人たちのことをあわれみをもつて考えましょう。神はわたしたちに対してあわれみ深くあられました。わたしたちも神にならうものとなりましょう……。

ここで筆をおかなければなりません。あなたのために死なれたイエスのために、すべてを捨てて下さい。母上様、あなたがそうなさって下さることはよくわかっております。神がともにあつてあなたを慰めて下さいますように。旅費さえ備えられれば、すぐにも出帆しなければならぬでしょう。わた

しは中国のために何かがなされなければ、生きられないように感じています。

行くこと、それもすぐに行くことを、彼が心から願っていたにもかかわらず、彼の出発を遅らせた問題があった。ドレイン・サイドの小べやで彼は、神のみが知っておられる多くの戦いと勝利とを経験していた。この冬のことを彼は次のようにしている。

人間的なすべての助けを離れ、守られること、必要を与えられること、その他すべての助けを与えられることについて、ただ生ける神にのみより頼んで行くことは、わたしにとつて非常に重大なことであつた。こうした仕事をするために、人は靈的に強められる必要があると感じた。信仰さえ失わなければ、神には失敗がないということは疑いえなかつた。しかし、もし信仰が不十分であるということになれば、どうであろう。この時わたしは「わたしたちは不真実であつても、彼は常に真実である。彼は自分を偽ることが、できないのである」ということを学んではいなかつた。したがつてこれは、わたしにとつて重大な問題であつた。神が忠実であられるかどうかではなくて、前に置かれた事業への船出を正当化するだけの強い信仰が、わたしにあるか、ないか、ということである。

わたしは考えた「中国へ出かけて行けば、何についても、だれにも依存することはできない。わたしはただ神にのみ求めることができる。そうなると英国を離れる前に、神を通し、祈りのみによつて人を動かすことが、いかにたいせつなこと

であろうか」と。

このことのために彼は、どんな価を払うことも惜しまなかつた。判断に欠けたり、行き過ぎたりしたこともあつたであろうが、神はまた、なんとすばらしく彼を理解し、彼に臨在を示されたことであろう。「神を通し、祈りによつてのみ人を動かすこと」、それは、あの寂しい冬にドレイン・サイドで、栄光の輝きのうちに悟ることのできた大きな願いであつた。彼はさらに続けて言っている。

ハルの町の親切な雇主は、彼がわたしの給料日を忘れていたら知らせしてくれるようにと言つていた。わたしはこのことを自分でしないで、神が彼に事実を思い起こさせ、祈りに答えてわたしを励まして下さるように祈る決意をした。給料は年四度であつたが、ある時の給料日が近づいたころ、わたしはこれについて例のように熱心に祈つていた。やがてその日が来た。しかし、ハーデイ先生はこのことには全く触れなかつた。わたしは祈り続けた。何日か経過したが彼は思い出さなかつた。とうとう土曜の夜になつた。わたしは、自分の手もとには銀貨がたった一枚、約一ドルほどしかないことに気がついたが、それでもほかには欠けたものもなかつた。わたしはただ祈り続けた。

まことに幸いな聖日のことであつた。この日も心には祝福が満ちあふれていた。朝の礼拝を守り、午後から夕刻にかけてはいつものように貧民街を訪れ、何軒かの安宿で伝道に時を過ごした。わたしにとつてこのような時は、地上に下つて来た天国のように思われ、そのうえ望みうるのは、与えられて

いるものにまさる満たしではなく、喜びを味わう能力が拡大されることだと思われた。

その晩十時ごろ、最後の集会が終わってからある貧しい人が、自分といつしよに行つて妻とともに祈つてほしいと言う。彼女は、重病で床についているということだった。わたしはすぐに承知したが、彼のことはなまりから、彼がアイルラ

ン

ド人であることがわかつていたので、どうしてカトリックの司祭に助けを求めないのかと尋ねた。彼は、カトリックの司祭に頼みはしたが、十八ペンス支払わなければと言つて断わられたと言う。飢餓にひんしているこの家庭に、そんな金はなかった。その時、わたしの有り金のすべてはクラウン銀貨一枚だということが、すぐに頭に浮かんできた。さらに夕食のための水がゆと、翌朝のための食物は十分にあるが、昼食のためには確かに何も無いことを思い出した。

どういふことか、絶えることのなかった心の喜びがすぐ止まつてしまつた。しかし、わたしは、自分を責めず、かえつてこの貧しい人を叱責して、こうなるまで事態をほうつておくべきではなかつた、民生委員に助力を求めるべきであつた、と言つた。すると彼は、そうしたけれども、翌朝十一時に来るようにと言われたので、妻が翌朝まで生きていられるかどうか心配だつたと答えた。

「半クラウン銀貨（ニシリング六ペンス）ではなくて、同じ額でも一シリング貨が二枚と六ペンス貨が一枚あればよいのに。そうすれば一シリングは喜んでこの気の毒な人たちにあげるのに」とわたしは考えたが、この半クラウン銀貨を放棄

する気持ちは少しもなかつた。問題はわたしだが、神プラス一シリング六ペンスを信じることはできたが、一文なしで神のみに信頼する備えがなかつたことだという事実には、考え及ばなかつた。

路地を案内されながら、わたしはいささか神経質になつていた。以前ここに來たことがあるが、その時には手荒い応待を受けたのだつた。はじめな気持ちで階段を上がり、荒れ果てた一室に導かれた。そこにはなんとも言えない情景が展開されてゐた。四、五人の子供が立つてゐたが、そのほおとこめかみは落ちくぼみ、栄養失調がしだいに迫つてきている様子がはつきりとしてゐた。はじめならぶとんの上に、疲れきつた哀れな母親が横たわり、そのかたわらには、泣くといふよりはむしろうめいてゐる、生後わずか三十六時間ほどの嬰兒が置かれてゐた。

なんといふことだろう。半クラウン貨でなく、ニシリングと六ペンスを持つていれば、喜んで一シリング六ペンスをあげるだろう、とわたしは考えたが、ぶざまな不信仰によつて、持つてゐるすべてを与えてこの人たちを助けてやれ、といううちからのさきやきに従うことができなかった。

わたしがこの気の毒な人たちを慰めようとしても、多くを語れなかつたことに不思議はない。わたし自身が慰めを必要としてゐたのだ。それでもわたしは彼らに、失望してはならないこと、非常にみじめな状態ではあるが、天には親切なあわれみ深い父がおいでになることを話しはじめた。しかし何もかがわたしの心に叫びかける声を聞いた、「偽善者よ、まだ救われていない人に向かつて、優しく愛すべき天の父のことを語りながら、神に信頼して半クラウンも放棄できないの

か」。

わたしは今にも窒息しそうだった。もし二シリング貨と六ペンス貨があれば、わたしは喜んで自分の良心と妥協したことであろう。二シリング貨を彼らに与え、残りだけを手もとに取っておいただろう。それでも、六ペンスもなしに主にのみたよる備えはわたしになかった。

こうした状態のもとで語ることは不可能であつたが、それでも奇妙なことに、祈ることには困難はないはずだと考えていた。そのころのわたしにとって、祈りはまことに楽しみであつた。

祈りにもものうさを感じたり、何を祈つてよいかわからぬということもなかった。わたしがしなければならぬことは、ただひざまずいて祈ること、そうすれば彼らもわたしもともに助けられると思つていた。

「奥さんといつしよに祈るために来てくれと言われましたね。では祈りましょう」とわたしは言つて、ひざまずいた。

しかし「天のおとうさま」と祈りはじめるやいなや、良心の声が聞こえてきた。「おまえは神を侮ろうというのか。その半クラウン貨をポケットに入れたままひざまずいて、神をおとうさまと呼ぶのか」。

それから、それまで経験したことのないほどの心の戦いがあつた。どのようにして祈つたのか知らない。そのことばが意味をなしていたかどうか知らない。とにかくなんとも言えない苦しい気持ちで頭を上げた。

気の毒な父親がわたしのほうを向いて言つた。「先生、わたしたちがどれほどみじめな状態だかわかつていただけたと思

います。お助け願えるのでしたら、なんとか、ぜひお願いします」。

この瞬間、みことばがひらめいた。「あなたに求めるものには与えてやり：」。それは王であるかたのみことばであり、そこには力があつた。

「わたしが比較的豊かに見え、あなたがたを助けることは、わたしにとってなんでもないとお考えになるかもしれませんが、実はこの銀貨がわたしの有り金の全部です」と言いながら、わたしはポケットに手を入れて、半クラウン貨を静かに取り出してこの人に渡した。わたしが彼らに語つたことは確かに真実であつた。神は確かに父であり、信頼しうるかたであつた。わたしの心には満潮の時の海水のように喜びがもどつてきたのだつた。それからわたしはなんでも話すことができ、また感じる事ができた。祝福を妨げるものは去つた。永遠に去つたとわたしは信じる。

気の毒な婦人の生命が救われただけでなく、わたし自身も救われたことがよくわかつた。その時、神の恵みの支配と、聖霊の働きへの服従がなかつたなら、キリスト者としてのわたしの生活は破船していたかもしれない―実際そうなつてしまつたことであろう。

その晩、下宿へ帰る時、わたしの心がポケットと同様にどんなに軽々としていたかをはつきりと覚えている。暗く、人通りの絶えた道が、押えきれずに歌う賛美に共鳴するかのようであつた。床につく前に水がゆをすすつた時の喜びもまた、王侯の宴席にも代えがたいほどだった。ベッドのかたわらにひざまずきながら、主に向かつてご自身のみことばについて

念を押したものである。「貧しい者をあわれむ者は主に貸すのだ」。わたしは翌日の昼食にことかくようにならないために、この貸しがあまり長びかぬように願った。このようにして内的にも外的にも安らかに、幸いなこいの一夜を過ごしたのである。

翌朝、朝食のオートミールがまだ残っていたが、それをまだ食べ終わらないうちに、戸口に郵便配達夫のノックの音が聞こえた。両親も友人も土曜日には手紙を書かないようにしていたので、月曜日に手紙を受け取ることは珍しく、下宿のおばさんがぬれた手をエプロンでふきながら、手紙か小包を持っではいつて来た時は、ちよつと驚いた。手紙を見たがその字からはだれのものかわからなかった。それは知らない人の字のようでもあり、わざと字体を変えたようでもあった。消印もはつきりしていなかったのどこから来たのかもわからなかった。開封しても書いたものは何も出てこず、白紙に包まれたキッドの手袋があり、それを開くと驚いたことに半ポンド貨がころがり落ちてきた。

「主はほむべきかな。投資をした金を十二時間のうちに四倍にして下さった。こんな割りで金を貸せたら、ハルの商人たちはどんなに喜ぶことであろう」。そこでわたしは、絶対に破産しない銀行にこのお金を預けておこうと決意した。こう決めたことをわたしは、今日まで悔いたことはない。

このできごとをわたしは幾度も思い出した。そしてあとになつてから困難な環境の中で、どんなにすばらしい助けとなつたかということを言い尽くすことはできない。小さなことにおいて神に忠実であるならば、そこから生涯のもつと深刻な試みの時の助けとなる尊い経験や強さを得るだろう。

けれども話はこれで終わりではなかった。また、これがこの時のハドソン・テラーの信仰を確かめるはずの祈りの、唯一の答えでもなかった。

このすばらしい恵みの救いは、それによつて信仰をはつきりと確認させられたばかりでなく、わたし自身にも大きな喜びをもたらしした。もちろん十シリングの金は、どんなに節約してみても、そんなに長く使えるわけではない。わたしはすでに受け取っているはずのもつと多額の金のことをハーディ博士が思い出して、支払ってくれるようにと願い、祈り続けなければならなかった。だがいくら祈つても答えられないようだった。二週間もたたないうちに、あの忘れがたい日曜日と同じような状態になつてしまつていた。神がご自分でハーディ博士に、わたしの給料が未払いであることに気づかせて下さるようと、熱心に、熱心に祈つた。わたしが苦しんだのは、金がないためではなかったことはいうまでもない。金は願えばいつでも与えられ得るものだった。わたしにとつて最も重要な問題は、「中国へ行けるだろうか。あるいは信仰も神による力もわたしにはあまりに欠けているので、この幸いな奉仕の生涯にはいることは許されないのだろうか」ということだった。

週末に近づくにつれて、わたしはいよいよ困惑しきつてしまった。考えなくてはならないのは、自分のことだけではない。土曜の夜までに、信者である下宿のおばさんに下宿代を払わなければならぬ。金がいってこなければおばさんが困ることくらいは、わたしも知っていた。おばさんのために

もハーデイ博士に給料のことを言うべきではないだろうか。しかしそうすることは、この宣教事業に不適合であること

を、みずから認めるようなものである。木曜日と金曜日は終日仕事にも出ないで、熱心に祈りつつ、神に向かつていた。

土曜日の朝になつても事情は変わらなかつた。わたしはなお天の父の時を待ち続けるべきかどうか、導きを求めて神に叫びかけた。わたしの判断しうるかぎりでは、主の時を待つのが最善であり、神がわたしのためになんらかの方法で干渉して下さるという確信が与えられた。それでわたしは、心の重荷もなく、安らかな気持ちで待つていた。

土曜日の午後五時ごろ、その日の往診を終わり、処方箋も作り終わったハーデイ博士は安楽いすに寄りかかり、いつものように神のことを話しはじめた。彼は真のクリスチャンであり、わたしたちはよく幸いな交わりをともにしていた。その時わたしは、慎重な取り扱いを要するある葉草をなべに入れて、注意しながら煮出していた。博士は突然、それまでのことは全く関係なしにこう言つた。

「ところでテラー君。君に給料をあげなければならないころではないかね」。

わたしの感動を想像していただきたい。答えができるまでに二、三度息を吸い込まなければならなかつた。なべを見つめながら、博士に背を向けてできるだけ静かに、給料日から何日かたつてゐる旨を答えた。わたしはどれほど主に感謝したことであろう。神は確かに祈りを聞いて下さり、非常な必要に迫られてゐるこの時、わたしが何も言わないのに、博士に給料のことを思い出させて下さつた。

「それならば、教えてくれればよかつた。わたしの忙しい生活

を君は知つてゐるだろうに。もう少し早く気がつけばよかつたのだが：午後手もとの現金をみんな銀行に預けてしまったのだ。そうでなければすぐ払えたのに」。予期に反したこのことばがひき起こした感情の激動は、なんともいえぬものだった。わたしはどうしてよいかわからなかつた。幸いなことになべの中のせんじ薬が煮えたぎつてきたので、それをよい理由にしてわたしはなべをもつてへやを飛び出してしまつた。それでハーデイ博士と顔を合わせなくてもよくなり、博士はそのまま帰宅した。彼がわたしの激情に気づかなかつたことは、まことに幸いであつた。

彼が去るとすぐわたしは、密室を求め、主の前に心を注ぎ出さなければならなかつた。落ち着きを取りもどすまで、落ち着きというよりも感謝と喜びがもどつて来るまで、わたしは祈らなければならなかつた。神には神ご自身の方法があり、わたしを見放されることはないと深く感じさせられた。その日の朝、主の御旨を求めた時、判断を与えられたかぎりでは、忍耐して待つべきだという導きを受けていた。今、神は何か別の方法で、わたしのために何事かをなさうとしておられるのだ。

その日の晩は、いつもの土曜日のように、みことばを読み、翌日いろいろな安宿で話すつもりのものである。何事もなかつたので十時ごろオーバーを着て、帰宅の準備をしていた。下宿のおばさんは早く寝てしまふのでかぎがなければ表戸からはいれないことを知つていたのも、むしろ感謝であつた。その晩は確にもう助けはなかつた。しかし神は、月曜

日にはなんとかして下さり、期日の過ぎた金を来週早々にもおばさんに手渡すことができるだろう。

まさにガスを消そうとしていた時、家と病院との間にある庭を歩いて来る博士の足音が聞こえた。博士は何か非常におもしろいことでもあったかのように、ひとりで大笑いをしていった。はいつて来た彼は、不思議にも、ちようど金持ちの患者がひとり診療費を払いに来たのだと言って、元帳を出させた。変わったことをする人もいるものだと思つたが、これがわたしの問題と関係しているかもしれないとは、全然気がつかなかつた。もし気がついていたら、わたしはあわててしまつたであらう。特に興味もない第三者の立場から見えて、いつでも小切手を書いて簡単に始末できるような診療費を、わざわざ十時過ぎになつて持つて来たことを、わたしも大いにおもしろがつていた。どういうことか、この人はこれが氣になつて落ち着けず、借金をなくすために、このような異常な時間に出かけて来ないではいられなかつたようである。

入金を記帳してからハーディ博士は去ろうとしていたが、突然ふり向いて受け取つたばかりの札をわたしに渡し、驚いたことに、また感謝なことに、こう言つた。

「時にテラー君、この金は君が取つておけばよいだろう。細かいのがないが、来週精算しよう」。

わたしの感動に氣づかぬまま彼は去つて行つた。わたしは小さな密室にもどり、結局は中国へ行けるのだといううれしきでいっぱいになり、主を賛美した。

五 試練に強められた信仰

父なる神が知っておられる

これで十分だー

この信仰を曇らせうるものは何もない

選択をみ手にゆだねる者に

主は最善を与えられる

「結局は中国へ行ける」。しかしそれまでにはなお多くの試練が待ち構えていた。特に豊かな実を結ぶ生涯は、特別の意味で神に根ざし、神の中に建てられなければならないかった。

ハルに続く舞台は、ロンドンである。そこでハドソン・テラーは、医学生としてある大病院にはいった。依然として彼は、すべての必要についても主以外にはたよらなかつた。結局

彼を中国へ派遣することになる宣教協会とともに、父親も費用の分担を申し出てくれたが、彼は神の約束をさらにためす機会を失うべきでないと感じた。父親の惜しみない援助の申し出を彼が拒否した時、近親者たちは、協会が彼の費用を引き受けているのだろうと考えた。協会ではロンドンの病院での費用を負担し、ソホのおじが二、三週間の宿を提供してくれたが、この大都市での必要を満たすものは、それ以上にはただ神のご忠実さだけであつた。彼はハルを離れる前に、母親にあてて書いている。

「あなたは全き平安をもつてこころざしの堅固なものを守られる。彼はあなたを信頼しているからである」というみこと

ばの真実を確認させられています。ポケットに百ポンドも持っているような気持ち、いやそれ以上に平安です。いつもこのようにただ主のみに信頼して、霊的にも物質的にも祝福を与えていただくことができますように。

彼は、妹のアメリアにあてても書いている。

ロンドンでの情勢は、わたしの条件にかなうようにはなっていない。しかしそれを気にしてはいません。主は、きのうも、きょうも、永遠までも変わらぬかたですから。主の愛は完全であり、そのみことばは変わりなく、その力は常に同じです。だから主にたよる心は、全き平安によつて守られます。わたしへの試みは、信仰を増し加えられるためであり、すべては愛のゆえです。主があがめられれば、わたしは満足です。

ハドソン・テラーは将来のことについては、一つの確信を持っていたが、それは遠い将来であつても、近い将来であつても、すべてにあてはめられるはずであつた。もしそれがあてはまらないようなことがあるとすれば、遠い中国で知るよりも、ロンドンにいるうちに知っているほうがよい。慎重でなおかつ自由な決断をもつて、彼は物質的な必要について考えられる供給源を、みずから断わってしまった。彼が要していたのは、生ける神であり、そのご忠実さをよく理解できる強い信仰と、どんな場合にも神を相手としていく実際の経験を積むことであつた。すべてのことの基であるおかたについての深い知識に比較すれば、ロンドンでの愉快なこと、不快なこと、便利な

こと、不便なことなどは、全くささいなことに思われた。いよいよ知識を実行に移す時がくれば、多くの試験がありうることを知りながらも、彼はちゅうちよしなかった。

結果として、この若い医学生の決意は、主の導きであったことが明らかになった。ロンドンで与えられた祈りの答えは、多く、かつ実にはつきりとしたものであつて、彼はそれによつて信仰を強められたのであつた。それは一年もたたないうちに彼が中国へ出発しなければならなくなるという、事態の測り知れない発展に備えるためには、まさに必要なことであつた。自著「回想」(注1)の中で、彼はこの間の経験を語っている。

ここでは、なお若年にすぎない彼を信仰の人とするのに大いに役だったこととして、ただ二、三のことをあげておこう。それは、あえて避けようとしなかった孤独と欠乏であり、何か月も黒パンとりんごだけを食料とし、往復十二、三キロもある病院への道を歩いた耐久の訓練であり、大学教育を受けていない彼を中国へ送る準備のある唯一の団体との間に、どうしてもはつきりしない経験をしたことであつた。

ハドソン・テラーがわずか二十一歳の時、突然道が開かれて、中国伝道協会が、船便のあり次第、上海へ向けて出帆するようにと求めた。長髪賊の乱は、反徒にとつて絶好調の時期にあつた。彼らは首都を南京に決定し、北部および中部の諸州は、この名目上のクリスチャン兵力に征服されていた。北京さえも落城しかかつていた。「教師を送つて下さい。多くの教師を送つて真理を教えるのを手伝つて下さい」。反徒の指導者は、信頼していたアメリカ人宣教師(注2)にこう書いている。「この事業が成功を収めて終わつたなら、国じゅうに神の教えを伝えたい。だれもが唯一の主に立ち帰り、真の神のみを

礼拝できるようにするためです。これがわたしのせつなる願いです」。

簡単に言つて中国は、すぐにも福音宣教のための門を大きく開くように思われたのである。クリスチャンたちは、どこでも大いに心を動かされていた。この重大な時期を失わないようにするためには、すぐ何か手を打たねばならない。しばらくの間は、まるで流れ込むかのような調子で献金が集まつた。機会を生かすための計画の一つとして、英国外国聖書協会は、創立五十周年記念に、百万部の中国語の新約聖書を印刷した。ハドソン・テラーが手紙で連絡をしていた伝道協会は、二名の人を上海に送つて、中国内陸部で働かせることを決定した。その一名はスコットランド人の医者で、彼はすぐに出発するというわけにはいかなかったが、他の若い一名は、そのために学んでいた内科と外科の学位とを放棄しなければならなかったにしても、とにかく短時日の準備で出発できるものとされていた。このことは重大な問題であつたので、ハドソン・テラーは当然のことながら、両親と相談し、ともに祈つた。中国伝道協会の書記のひとりと会見してから、彼は母親にあてて書いている。

バード氏は、わたしの持っていた問題のほとんどを取り除いてくれました。わたしは彼の勧めに従つて、ただちに委員会に申し出るのがよいと思います。でもお返事をお待ちします。そちらのお祈りにたよつています。もし受け入れられ、ただちに出発するようになりましたら、出帆の前に一度帰るのを望みでしょうか。わたしももう一度ごいっしょに過ごしたいと考えておりますし、母上様もきつとわたしに会いたいとお

思いのことでしょう。けれども永遠にお別れするためでしたら、お目にかかるよりか、お会いしないほうが、もつと容易であるようにも思つてしまいます。もつともこれは永遠のお別れではありませんが…。

しばしだけ やがて過ぎてしまうのだ

約束の十字架をどうして避けるのか

主のためにほかのすべてを損と思ひ

み足の跡を踏みながら急ごう

そうすればこのしばしの苦しみに

主はほおえんで豊かに報いて下さるのだ

これ以上書けませんが、どうかできるだけ早くお返事を下さい。わたしのためにせつにお祈り下さい。キリストのためにすべてを捨てることを語るのは容易ですが、実際のこととなると、「主において完全なもの」として立つのでなければ、とてもそこを通り抜けることはできません。主がともにあつてわたしの愛する母上様を祝して下さいますように。母上様にイエスの尊さを悟らせて下さり、たとえ苦難の交わりの中にあつたとしても、主を知ることのほかには、母上様が何も望まないでおいでになれますように。

また、妹に対しても彼は書いています。

「愛するアメリカ、長いこと予期していたこととはいふものの、やはり苦しい経験です。すべての必要を満たす約束をして下さった主が、わたしとともにおられるように祈つて下さ

い。

自分たちのこと―愛に欠け、奉仕は実らず、完成への歩みがあまりにも遅々としていることを思う時、目を主に転じるのは、全く生き返るような思いです。「罪と汚れのために開かれた泉」の中にもう一度浸り、「わたしたちの知恵となり、義と聖とあがないとになられた」「愛する御子の中に受け入れられた」ことを思うのは、全くすばらしいことです。

ハドソン・テラーは、一八五四年に、五か月にわたるたいへんな航海ののちに、中国へたどり着いた。そのころの中国は、伝道者にとつて今よりもむずかしい所であつた。外国人の居留が認められていたのは、上海をはじめとする五つの開港場だけであつた。海岸から奥へはいった内陸部には、ただひとりの宣教師もいなかった。内乱はいよいよ激しくなり、長髪賊も初めのころのような宣伝をしなくなつており、すでに腐敗した政治運動に墮落しつつあつた。反乱の続いた残りの十一年間は国じゅうが言うに言われぬ流血と苦難に満たされた期間となつた。彼は南京へ行つて、そこからさらに奥地に向かうどころか、上海に拠点を得ることさえきわめて困難で、非常な危険を冒さなければ、地方への巡回もできなかった。

この初期の試練のすべてが必要なものであつたことが、容易に認められるようになったのは、何年ものちに、彼自身が多くの宣教師を導く責任を持つようになってからである。彼自身にも、また他のだれにもほとんど想像できなかったであろうが、彼はあとに続く何百という働き人のために、道を切り開いていたのである。彼はすべての重荷をにない、経験を通してのみ知りうるすべての試みの本来の姿に触れたのであつた。鉄が

鍛えられて鋼鉄となるように、彼の心は、より多く愛し、より多く苦しむことによつて、より強く、より忍耐深くならなければならなかった。無数の人々に向かつて、子供のような信頼の生活にはいることを勧める人として、彼はみ父の愛のお取り扱ひについて、自分でもつと深く学ばなければならなかった。彼が困難に取り囲まれるようになったのもこのためであつた。まだ印象を受けやすく、それが長く心に刻まれる初期には特別にそうだった。多くの困難がやつて来たが、同時にまた助けも備えられ、それが一生涯の祝福となつたのであつた。

まず、上海は戦争状態に置かれていた。外人居留地の近くの上海旧市街は、「赤ターバン」として知られていた反徒の手中にあり、それを四、五万の政府軍が包囲していた。戦いはほとんど絶え間なく行なわれ、居留地の守備のために、外人の民兵が招集されることもしばしばだった。物価はききんの時と同様で、市街も居留地も人であふれ、高い金を払つてもほとんど宿は見つけられなかった。ロンドン・ミッシェンのロッカート博士が引き取つてくれなかったなら、新参のハドソン・テラーは、非常な困難に巻き込まれたであろう。博士のところに着いてからでさえ、激しい戦いの状況は自室の窓から見え、どちらの方向へ歩いてても、今まで夢にも見たことがないような悲惨な光景を目撃せざるを得なかった。

ハドソン・テラーが上海に着いた時は、ちょうど酷寒で、石炭が一トン五十ドルもしていて、ろくに暖房もできなかった。彼はぜいたくには慣れていなかったし、陸上に宿があるだけでも感謝したのだが、膚を刺す冷気と、湿気とは少なからず苦しめられた。到着してからまもないころに、彼は書いている。

わたしは非常にむずかしい立場に置かれています。ロッカート博士が一時わたしを引き取つて下さいました。愛も金も、家を得る役にはたちません：だれも市中に住むことはできません。これを書いている今も戦いが続いています。大砲の音でこの建物が震えています。寒くて、考えることも、筆をとることも、ろくにできないほどです。わたしがどんなに困惑したか、パース氏（注3）への手紙によつてもわかつて下さると思います。お返事をいただくのに四か月ばかりです。両手を広げてわたしを迎えて下さった宣教師の親切を思うにつけても、彼らに迷惑をかけることを恐れます。

中国での最初の聖日について、彼は書いています。

ロンドン・ミッシェンでの二つの集会に出席し、午後はワイリ氏と町へ出かけました。包囲下の町の様子をごらんになったことはないでしょう。そんな必要がありませんように：城に沿つて少し歩いてみました。積み重なつて倒れている家が並んでいるのは、悲しい光景でした。そこにあるのは、焼けくずれ、吹き飛ばされてつぶれ、ばらばらになつてしまつた、程度の違いこそあれ破損した廃虚の見本でした。かつてそこに住んでいた人々は、今このきびしい季節に住む家を失つてしまつたのです。気の毒な彼らのことを考えるだけでも恐ろしいことです。北大門に到着した時、すでに外には激しい戦いが行なわれていました。ひとりが死んで運び去られ、もうひとりが胸を撃ち抜かれました。わたしが診察したもうひとりの人は、腕を撃ち抜かれ、骨も碎かれていかにも苦しそうでした。少し行くと、大破した戦利品をひっぱつて

行く者や、哀れな捕虜の弁髪をつかんでひっぱって行く者などが続いていました。せきたてられながら引きずられて行くこの気の毒な人々は、わたしたちに向かって「助けてくれ」と叫ぶのですが、なんということでしょう、わたしたちにはどうすることもできないのです。彼らはすぐに首を落とされてしまふのでしょうか。これらのことは全く考えるだけでさえ身の毛のよだつできごとです。

周囲の苦しみを見ながら、人々のためにほとんどというよりも、全く完全に何事もできなかったという事実は、耐えがたいことであつた。だれよりも苦しまれたかたが強めて下さらなければ、とても彼は耐えられなかつたであろう。彼はさらに書いています。

遠く故国を離れて、戦争に巻き込まれながら、人々を理解することも、また理解されることもできないということが、何を意味しているのかよくわかりました。なんとも哀れでみじめな人々を見ながら、彼らを助けることもできず、イエスを彼らに示すことさえできない無力さに、わたしは打ちのめされるような思いでした。サタンは洪水のような勢いで襲つて来ましたが、そこにはサタンに対抗して戦いの旗を上げるおかたがおいでになりました。イエスはまさしくここに臨在しておられます。ほとんどの人々は主を知りませんし、主を知っているかと思われる人々も無関心でありますが、なお、ご自身に属する者には主の尊い臨在がわかります。

ハドソン・テラーには、個人的な面での試練もあつた。彼は生まれてから初めて、自分の経済的な必要も満たせないような立場に立たされた。故国にいた時には、許された範囲で生きるために無一物に近い生活をも喜んでしたが、彼は今、自分の収入をはるかに越えて支出しなければならなかつた。彼は自分の三、四倍の給料を得ている人々と同居したために、彼らと同じようにして暮らさなければならなくなり、わずかばかりの資金は目に見えて減つていった。本国で外国伝道資金を集めて来た彼は、貧しい人たちの激しい働きの実である献金を受けることが何を意味するかよく知つていた。彼にとつて宣教資金は、神聖な預金であり、この時のような使い方をしなければならなかつたことを、非常に苦しんだ。さらに彼が協会にあてた手紙に対しては、まともな返事が来なかつた。最も緊急な問題について指示を求めた質問に対してさえ、返答をもらえない状態だつた。ロンドンの委員会はあまりにも遠く離れており、彼の置かれていた環境をよく理解できなかった。委員たちはほとんどが多忙な人々であり、自分たちのことで手いっぱいであつた。彼らのひとりびとりはこの上なく善意に満ちた人々であつて、神のみわざの前進を真剣に願つてはいたが、自分たちの全く知らない環境を想像することができなかったのである。ハドソン・テラーは、彼らに問題をはつきりさせようとして最善を尽くしたが、指示を与えられないまま何か月も過ぎてしまい、経済的にも苦境が続いた。

上海ドルは以前には五十セントに相当したのだが、だんだんと価値は半減し、さらに低落が続けていた。生活費が収入を超過するようになったので、彼はしかたなく緊急の事態のために用意してあつた信用状を用いなければならなかつた。しかしこれ

も受け入れられるものかどうか、確認は得られなかった。金銭問題についてあれほど良心的であつた彼にとつて、これは実に苦しい状態であつた。このために彼は、眠られない夜が多かつた。

夏を迎えるとともに耐えられないほどの酷暑が襲つてきたが、それよりもさらに困つたことが起きた。彼は本国の委員会からではなく、間接に、彼の同労者となるスコットランド人のパーカー医師が、妻子を伴つてすでに英国を出発したことを聞いた。彼のもとには、この家族の宿舍の準備についてなんの指示もこなかつた。しかし、何週間かたつうちに彼は、自分が行動しなければこの家族が雨露をしのぐ場所がないだろうと考えた。こういうことのための出費については委任されていなかったが、それでも五人のために適当なへやを捜さなければならなかつた。これは簡単なことではなかつた。かごに乗るのが普通なのだが、彼は目もくらむような暑熱の中をてくてくと歩いて、居留地や市中の空家を捜して回つた。けれども家を見つけることもできずに、疲れ果ててしまふばかりだつた。上海の友人たちは、土地を買つて建築する以外には打つ手がないことを教えてくれたが、どうして彼らにほんとうのこと、つまり金のないことが言えたであろう。それでなくてさえ彼が所属している中国伝道協会のやり方については、人々の間に相当な批判が広まつていたのである。したがつて彼は、この心労をできるかぎり人に知らせないようにして、ただ主にのみ重荷をゆだねるようになければならなかつた。こうした状態の中から彼は書いている。

愛する主に真により頼んでいる者は、いつでも「わざわいを

恐れません。あなたがわたしと共におられるからです」と言うことができます。でもわたしはペテロのように信ずべきおから目を離して、すぐ風や波を見てしまうのです。ああもつと着実でありたいと思います。みことばを読むことと、お約束について考えることを、最近いよいよすばらしく感じるようになりました。初め中国語を早く習得しようとしてあまり比重をかけすぎてしまいましたので、霊的な生命を失う結果を招いてしまいました。しかし、今、主は測り知れぬ恵みによつて、もうひとたびみ顛の光を仰がせて下さいました。

妹に対しても書いています。

家のことなどでまた頭を痛めていますが、別によい結果は出ていません。ですからこれを祈りの問題として全部主のみ手にゆだねてしまいました。今はこれについても平安を与えられています。主は備え、このことについても、その他の一つ一つの困難についても、わたしの導き手となつて下さるでしょう。

この手紙を書いてからわずか二日のうちに、貸家があるということを知った時、ハドソン・テラーは夢のような心持ちであつたに相違ない。その月のうちに彼は、同労者のために、二階に五室、階下に七室という広々とした住宅を準備することができた。木造でがたがたの貧しい建物ではあつたが、町の中にあり、北大門にも近かつた。彼は中国上陸後六か月目にここに落ち着くことができた。危険な情勢下であつたので、彼の中

国語の教師は同行しようとしなかったが、彼は上海のクリスマスチャンで教育のある人を新しく教師に得て、土地のことばの勉強を助けてもらうことができた。中国人ばかりの中にある自分の家で、他の外人たちとひとり離れて、新しい教師の助けを得ながら毎日集会を開き、自由に診療活動ができるのは、実に大きな喜びであった。しかし、まもなく、その場所が想像以上に危険であることがわかった。居留地の守備もそこまでは及ばなかった。しかもそこは、いつも北大門を警戒している政府軍の砲兵隊の射程圏内にあった。その家があき家になった理由も、自然に明らかになった。この若い宣教師は、情勢が好転するのを期待して、三か月ぐらい様子を見ていたが、事態はついに破局を迎えるに至った。彼は毎日毎日残虐な光景をまのあたりに行っていなければならなかったし、また幾度も危険にさらされなければならなかった。そしてついに隣家が放火されるに至った。これは彼を早く追い出そうとするいやがらせであった。それで彼はしかたなくまたロンドン・ミッシンにもどらなければならなかった。ちょうどパーカー一家が到着する時に、ひとりの難民がそこにいたというわけである。ロンドン・ミッシンの構内に住んでいるロッカー博士宅の近くに、若い英国人宣教師バードン夫妻（注4）の小さな家があった。夫妻は中国に来てからのハドソン・テラーの親友であつて、幸いな交わりを楽しみながら、三人で暖炉を囲むこともしばしばであった。しかし、夫妻に最初の子供が生まれた時、バードン夫人は死去してしまつた。まだ若い父親は、生まれたばかりの母親のない子供を同労者の世話にゆだねなければならなかった。ハドソン・テラーは、この親しい友人の不幸を心から悲しんだが、楽しく幸いな思い出に満ちたこの空家と、彼の置かれた

立場とが特に関係があるとは露ほども知らなかった。しかし彼が、北大門のそばの危険な場所を離れる前にバードン家は貸家になつていた。パーカー一家の到着はきょうあすに迫つてゐた。ハドソン・テラーの手もとにはわずかに三ドルしか残つていなかったが、航海中に生まれた子供も加わつた同労者の家族を迎えるのにまにあうように、自分の責任でこの家を確保した。

彼はその家の半分を、同じように困難に直面していた別の家族に喜んで提供した。ところがそのために、パーカー一家と彼自身とは三室だけで満足しなければならないことになった。そんな狭い所でも置くものといつてはろくになかった。彼の持つてゐる家財は、六人の家族を迎えるためには、あまりにも少なかった。しかし問題は、まだそれからであつた。長い航海のあとでパーカー博士の手にはわずかに二、三ドルしかなく、協会の信用状をあてにしていたのに、それもどういふ手違いからか到着してはいなかった。パーカー博士が英国を出発する前に送られたことになつてはいたが、それについては何か月たつても知らせがなく、未着の照会をしてもなんのさたもなかった。彼らは、酷寒のことも知らなかったのも、何も準備がなく、どうしても暖かい衣類や寝具が必要であつた。試みの多かつた何か月かを、彼らがどのようにして暮らしたかを知ることがむずかしい。居留地の人々のうわさも容易に想像することができるとパーカー博士夫妻は、静かに踏みとどまつてゐた。医師を待つてゐる上海で、よい地位に招かれるという誘惑を受けても、宣教師の任務を離れるようなことはなかった。若い同労者といつしよに市中や近郊の村々を規則的に訪れて伝道し、狭い家にいる時には、たゆみない学びを続けていた。

ハドソン・テラーの心は、これらすべてのことから忘れえぬ教訓を与えられていた。それは人間的な意味で自分にたよっている人々に対して示してはならぬ態度であつた。ロンドンの委員たちは、宣教師の親しい友人であつた。トッテンハムやその他の地での彼らとの霊的な交わりは忘れがたいものであつた。彼らの誤りを最も敏感に感じている時でも、彼はそのふんい気をなつかしく思うのだつた。それは祈りとみことばへの愛のあふれた交わりであつた。しかしどういふことか、何かが欠けていた。若い宣教師が見いださなければならなかつたその欠陥とは、きたるべき日に人々を指導しようとする時、霊的であるばかりでなく、实际的でなければならぬということだつた。ずっと昔のヨセフの場合のように、彼の魂は寄せる激しい苦難にぶつかつていた。しかし、この忍耐の中から、試みがいくらか襲つてきても変わらない心の安らぎがわき出てきたのである。彼は妹と、別の親しい人に書き送っている。

どのようにして困難を乗り越えたかと言われるのですか。それはこうです。問題を主のところへ持つて行くのです。ここまでは書いてから夕べのみことばとして、詩篇七十二篇から七十四篇を読んでいました。読んでみて下さい。このみことばはいかにもよくあてはまります。どうしてか知りませんが、今わたしは喜びと感謝の涙なしに聖書を読むことがほとんどできません。わたしが今ある状態、中国到着以来わたしのあつた状態が、向上と前進のために他のどの立場よりも役だつていたことがわかります。もつともそれは、多くの点で苦痛であり、わたしがみずから選んだであろうこととは全く違つていましたが、ああ、神の知恵と愛にもつと従順に信頼

する者となれますように。

注

(1)テラー氏の若い時代についての自伝的な書物、「回想」の邦訳は、三一書店から出版されている。

(2)これは米国バプテスト宣教師連合 (American Baptist Missionary Union) の F. J. ロバート牧師であつた。長髪賊の運動の創立者であり指導者であつた洪秀全は、モリソンの回心者のひとり里阿華 (リャンアファー) が、広東であつた学科試験の間に手渡したトラクトによつて初めて真理を学んだ。のちに披はこの新しい教理についてもつと聞こうとして広東に帰り、そこでロバート氏の指導のもとに、二、三か月を聖書研究に過ごした。あまり長くそこになかつたので、受洗したり、教会員になつたりするといふことはできなかったが、キリスト教の精神と教えについては十分に学び、彼が異常な熱心をもつて宣伝活動を始めた所である広西 (コアンシー) 省へ歸つて、同郷の人々に伝道することができた。この運動が革命的な性格を持つようになつたのは、中国政府の激しい迫害によつて、彼に従う者たちが武器を執るようになったからである。

(3)バード氏と同様に中国伝道協会の書記。

(4)のちに香港の監督となり、中国でほとんど五十年にわたる献身的かつ実り多い働きをした、軟会伝道協会の J. S. バードン牧師。

六 友情とそれを越えるもの

兄弟の重荷の下に低くかがむ愛

それはどんなにその人を高め

その悲しみを吹き飛ばすことだろう

答えられることも

報いられることも求めない愛

その人はどのようにして会うのだろうか

自分の目より、もつともつと慕わしい目に

F・W・H・マイヤー

ハドソン・テラーが中国で過ごした最初の二年間の記録の中で、最も驚かされることは、彼の開拓伝道に対する全き献身である。戦争のただ中に置かれて、中国語の学びを続けながら、圧倒されるばかりのさまざまな試練を受けていた彼が、よもや当時の「内陸」をたびたび巡回する計画などを立てはすまいと人々は思うだろう。ところがこの期間に、十回にわたる伝道旅行が記録されている。そのいずれもが驚くほどの勇氣と忍耐とを要する働きであった。

上海の北、南、西には、無数の小路で通じる人口の多い地帯が広がっていた。ジャンクがたくさんあり、それは日中、交通機関として利用されるばかりでなく、夜になると一種の宿の役割を果たしていたので、旅行者はあまり中国人の宿屋には依存しなかった。ジャンクの中では、簡単な料理で船頭の家族と

「客」との食事がまかなわれたが、客は自分が持ってきたもの

でそれを補うこともできた。床に近い所に小窓がある場合が多かった。ベッドはただの板で、横になったり腰をおろしたりすることはできなかった、立つことはできなかった。ジャンクの宿は不便も多かったが、それによつて市から市、町から町へと、人々に接触することができた。ゆつくりと行く舟からは、どこまで行つても村落が視界から消えなかった。

ずつと昔の彼の師である主の場合と同じように、このことは非常にハドソン・テラーの心をひきつけた。主と同じ「しなればならない」という思いが彼の心にあつた。「わたしはわかされたかたのわざをしなければならぬ」、「わたしはほかの町にも神の国の福音を宣べ伝えねばならない」、「わたしにはまた……他の事がある。わたしは彼らをも導かねばならない」。上海の大路、小路を行くだけでは十分ではなかった。それなら他の人たちもある程度までのことはしていた。彼はそのかなたにいる人たちへの責任感に責められる思いであつた。救いの道について聞いたことがなく、またキリストに満たされたメッセンジャーが伝えなければ聞く手段もない人たちである。

冬の厳寒も、夏の酷熱も、また西欧の人たちの生命をいつでも危険にさらし、上海への帰還を不可能にするような戦争の恐怖も、この人をとどめることはできなかった。

一つの旅が終わると、すぐ次の旅行の準備に取りかかるのだつた。ある期間、学びに専念してからは、その地方語ばかりでなく、北京語で話ができるようになった。続く巡回伝道は非常に激しいもので、十五か月の間に、十回の巡回旅行をしたほどであつた。パーカー博士が到着する以前には、上海の周辺十六キ

口ないし二十四キロの地城に、たびたび出かけていた。博士といっしょになってからの三か月間には、千八百冊の新約聖書と分冊、二千冊の注釈やトラクトを配布した。極力むだのないように努力して、文字の読める人たちにだけに渡したのだが、大部分の人が文盲であったことを考えれば、配布した地城がどんなに広く、常に異なつた群衆に彼らがあかして歩いていたかということがわかる。一月から三月までの冬の間は、零度以下の酷寒もいとわずに、四回にわたる巡回伝道が試みられた。さらに四月、五月、六月、八月、九月にも同じことがくり返された。人々の間で過ごす日中も、どろぼうに備えて戸を閉じた船中での夜間も、暑さの苦しみからはほとんどのがれられなかった。しかし、この若い伝道者をとどめるものは何もなかった。

旅行の危険は相当なものであり、また仲間のない時の孤独も格別であつた。彼は他の外国人からは遠く離れ、あまり好意的ではない群衆の中で働いて、自分の務めを果たしていた。そしてその際に、医療器具が人々の心を開くのに役だつことも知つたのであつた。その間に彼は、キリストなしに生き、また死ぬことが何を意味するかを、いよいよ深く知るようになっていったし、その視野もいよいよ広げられていった。頂上に神殿のある丘や古塔のある高台から、何百万という人々の家のある町や村を見おろしたことであろう。そこには、救われるべき唯一の名を一度も聞いたことのない男がおり、女がおり、子供がいる。彼の心に去来する思いは、大きく、深く、終わりまで変わらなものである。

このような中で、内乱は最後の段階に達し、ついに上海は政府軍の手に落ちた。ハドソン・テラーは当時、年輩の宣教師とともに蘇州湖へ向かつて旅行していた。ある丘の上から広い

範囲にわたつて大火事の煙が見えたのは、出発してからまだ何日にもなつていない時だった。その方向の火はただ一つのことを意味している。上海が燃えている。居留地にいる家族はどうしているか。すぐもどりはじめたが、彼らは途中で保護を求めた逃走中の反徒から聞いて、恐れていたとおりであることが確かめられた。もちろん宣教師たちに反徒を助けることはできなかった。反徒たちはやがて捕えられ、彼らの目の前で斬首されてしまった。彼らはいよいよ心配をしながら道を急いだが、やがてなまなましい惨状が繰り広げられていった。しかし、居留地はもとのままであつた。人殺しに飽きた政府軍兵士は、征服者の満足に酔つてしまい、外国人などには全く注意を払わなかつたようである。ハドソン・テラーは書いている。

上海は、今はきわめて平穏ですが、それは死の静けさのようです。最小に見積もつても二千人が死にました。犠牲者の中には、残忍な宗教裁判によつて、最もひどい拷問を受けた者もありました。上海はほとんど廃虚の山といった状態で、破壊されながらもなお残っているものは、見るも哀れなありません。

それでも最悪の事態は終わった。ハドソン・テラーとその同僚は、本格的な仕事について委員会からの指示を待ちながら、人々の肉体的、霊的な世話をいっしょうけんめいに行っていた。用いられることこそ、彼らが願ひ求めていたことであつた。彼らはその計画について周到に考え、真剣に祈つてきたのであつた。しかし、彼らの将来がそれにかかつているにもかかわらず、回答はなかなか届かなかつた。

夏の酷暑は、彼らの住居でもひどいものだった。寧波への短期間の訪問によつて有望な見通しが開けてきた。その地の宣教師たちは、効果的な組織の弱点になつてゐる医療事業を強化するために、病院を建設する必要を感じており、パーカー博士にその責任をとつてくれるようにと丁寧な招待を寄せて来た。そして彼らは一致して協力することを誓つたのである。彼らはこのことについても委員会からの回答を待つていたが、その間に、同居していた家族とともにその家を、近いうちに家の所有者であるミッシヨンの宣教師のために明け渡すように、という通知を受けた。同居していた人たちはすぐに自分たちの所へ引越して行つたが、彼らは家を建てられるような立場でもないし、居留地にも中国人街にも、どこにも貸室を見つけないとはできなかった。ハドソン・テラーのためにただ一つの道しか開かれていないように思われた。特に長い間待つていた回答が届いたが、それが好ましくないものであつたので、ますます道が唯一であるように思われた。委員会には、港町に建築するために費用を使わせる気持ちにはなかつた。彼らは働き人が内陸部へ行くことを願つてゐた。しかし、それが実現できるまで、どこに住むべきかは明らかでなかつた。こうした状態の中で、パーカー博士夫妻は寧波へ行くことを決め、彼の同僚は不安定な立場に残された。友は去り、家はなくなり、現地人街にさえも宿ることができない状態で、どうして上海にとどまつて仕事を続けることができたであろうか。

しばらくの間、彼らは非常に迷つたが、この困難な状態の中から、しだいに新しい方向への考え方が浮かんできた。彼はその活動の拠点として、どんな所でも借りようとしたが、できなかった。上海では難民の流入によつて人口が急速にふえ、住宅

問題が非常に深刻になつてゐた。もし、陸上に家を見つけることができないなら、多くの中国人のように、舟に乗り、水上生活をするのがなぜできないか。これはすでに彼が考えていた中国服を着ることともよく合うし、その仕事を遂行する上にもよりよい方法であつた。そうだ。そこからすべてが開けはじめた。彼は、パーカー夫妻に同行して、寧波へ行く時わずかな持ち物を持つて行つたが、またもどつて来て、自分が生涯をささげた相手の人々と全く同化しようとしていたのである。

しかし、このことは、初めに考えていたほど容易ではなかつた。当時、中国服を着ることは、前頭部をそり、弁髪のために髪を長くすることを意味した。宣教師でも、他の外国人でも、こんな習慣に従う者はだれもいなかった。時として旅行者などが、普通の衣服の上に中国の上着を着用することはあつた。しかし、西欧の服装をやめて、全面的に現地の服装を用いることは全く別のことだつた。ハドソン・テラーは一年半中国にいながら、そうした行為が社会的な疎外を意味することを悟つていなかった。しばらくの間、彼は苦しんだが、より高い視点からこの方法を採用することが望ましいとしだいに強く自覚するようになった。彼が求めていたのは、人々に近づくことであつた。そのころ揚子江を三百二十キロほどさかのぼつて内陸にはいつて行つたひとり旅の巡回伝道でも、普通考えられていること以上のことがなされうるといふ確信が与えられていた。彼が訪問した五十八の市や町のうち、五十一はまだ宣教師を迎えたことがなかつた。しかし、この旅で、疲労や緊張のおもな原因となつたものは、彼の服装であつた。欧州人の服装が、初めて見る人にとっては、いかにもこつぱいであり、貧相であり、野蛮

なものと思われたのだろう。聴衆は彼の服装にばかり気をとられていて、そのメッセージには集中できなかった。要するに、彼がかちとろうとしていたのが中国人であるかぎり、港町の外人地区に住む少数の人たちに認められようとして、中国人に認められることを犠牲にしようよりも、中国人の考え方にふさわしい服装をするほうが重要なことは当然であった。それで祈りと導きを求め、みことばを学んだのちに、ついに彼は決心をした。パーカー夫妻が寧波に向けて出発する準備ができた時、ハドソン・テラーの中国服の準備もできており、あとはただ、床屋に自分の頭を任せて変形の仕事をしてもらう劇的な瞬間を待つだけであった。

パーカー夫妻の旅の、最初の段階で使用するジャンクを雇うために、川を下って行つたのは、八月のある夕刻であった。途中まで行くと、見知らぬ中国人が近づいて来て、驚いたことには、貸家を捜しておられるのではないかと尋ねた。小さな家でもよいか、中国人街でもよいかと尋ねた末に、南大門の近くにそんな家があると言った。ただその家はまだ完成してはいなかった。所有者の資金が足りなくなつて、完成できなくなつてしまった。もし借りたいのなら、六か月ほどの家賃の前納さえしてくれば、保証金などはいらないということだった。ハドソン・テラーは夢ごちで市の南部に案内されて行き、むだなく建てられた小さな家を見た。全くの新築で、清潔であり、一階と二階に二へやずつあつて、さらに中庭を隔ててもう一へやあるという構成で、まさに必要をそのまま満たすものであり、場所も願いどおりであつた。その晩、金を払い、建物を確保するというのがどんなことだったか、描写するよりも想像するほうがよいだろう。結局、彼はまちがってはいなかつ

た。上海にはまだなすべきことが残されている。祈りは答えられ、長い間待望していた導きは与えられた。

その晩、中国内陸の伝道にきわめて大きな影響を及ぼすことになる歩みが踏み出された。床屋ができるだけのことをすると、この若い宣教師は自分の髪で結えるようになるまでの間代用する黒い長い弁髪に合わせて、残った自分の髪を黒く染めたのである。翌朝、彼は大いに努力して、慣れないだぶだぶの中国服を着、「先生」と呼ばれる学者階級の人が身に着けるような上着としゅすの靴をはいて現われた。

この時から、すべてが新しい方向に開けて行つた。上海への帰路では、説教をしたり、印刷物を配布したり、患者を診察したりするまでは、外人であることさえ気づかれなかった。それからは、婦女子たちもずっと自由に近づいて来るようになったし、聴衆もそれほど興奮もせず、うるさくもならなかった。

ヨーロッパ人であるというある種の威厳を失いはしたが、服装を変えることによって得た、人々の間を動き回る自由は、それを補つて余りがあつた。かつてなかったほどに家々の門は解放され、興味を示す者と静かに語り合うチャンスができてきた。こうした利点を得たことの感謝にあふれながら、彼は自分が用いるようになった新しい衣服について、家人に手紙を書いて「これが内陸へはいって行くためにいちばん助けになることは確かです」と述べている。

「内陸」への彼の重荷は、いよいよ固められていった。南大門の新居での二、三週間は、彼にとって霊の養われるすばらしい時であつた。十月初めの手紙には、次のようにしるされている。

パーカー博士は、寧波にいます。でもわたしは孤独ではありません。

ん。今まで知らなかったほどに伴って下さる神の臨在を覚えています。祈られ、目を開かされていることは、大きな祝福でもあり、必要なことでもあります。

小さな家を与えられていたことは、幸いであり、周囲には多くのよい機会があったが、ハドソン・テラーはふたたび未伝の地へ出かけて行つた。上海の家の近所の関心を持つていた人たちを、彼はその教師であつたクリスチャンの世話にゆだねた。またこの大都會では、他の宣教師たちもりっぱで熱心な仕事を続けていた。神のみことばの種子をまきながら、できるだけ遠隔の地へ出かけて行くことは、あまり効果的な方法ではないように思われたが、これは主の教えと模範に従うものであつた。この方法によらなければ、さらに遠隔の地にいる人たちが、どうして聞くことができたであろう。

これに続く何日かの経験は、喜びと悲しみの奇妙な取り合わせであつた。収穫の多い旅ではあつたが、結果的には騒ぎの中に巻き込まれてしまったからである。目的地は崇明（ツォンミン）島という大きな島であり、百万以上の人口がありながら、そこにはプロテスタントの宣教師がひとりもいなかった。一年前にバードン氏とともに訪れた崇明島であつたが、今度は前回とは全く違った迎えられ方をされようとしていた。最初に上陸した地の人々は、彼が他へ行くのを承知しようとしなかった。同じ服装をしていたので外人には見えなかった。彼の葉箱もその説教に劣らず人々をひきつけた。その地は湿気が多かったた

めに、彼が階上のへやを求めていることがわかると、人々は言うのだった。

「二階のへやがどうしてもなかったら、お寺に住みなさい」。屋根裏のようなへやのある家を持った人が備えられており、到着後三日目に「中国内陸部」に最初の落ち着き場所を持てることとなつた。これは実にすばらしいことであつたが、彼の説教への反応もまたすばらしいものであつた。近所の人々は毎日集会に集まつて来たり、訪問者や患者たちは、とどまるところを知らない流れのように、彼を訪ねて来た。医療団体の中にいくらかの反対をひき起こしたことが、六週間にわたる幸いな奉仕から、熱心な求道者の群れが生まれてきた。そのひとは張（チャン）という名の鍛冶屋であり、「主がその心を開かれた」有力な実業家もいた。彼が初めに導いた貴華（クエイホー）と別にもうひとりのクリスチャンが、彼を助けていたので、ハドソン・テラーが上海へ帰っている間も、この小さな群れには十分な顧みが与えられていた。

それから突然、苦しい失望を経験しなければならなかった。崇明島では彼の知らないうちに策謀が進められていた。医師や薬剤師たちが、彼が診療費を全然取らなかったにもかかわらずこの若い宣教師を商売がたきとみなして、高級官吏のひとりに彼を追い出すようにとたきつけたのであつた。彼を待っていたのは、イギリス領事館への召喚状であつた。すべてが平穩で友好的であるこの島に残留する許可を訴願したが、むだであつた。領事はイギリスとの条約では、開港都市への居住しか認められておらず、他の地に住もうとすれば五百ドルの罰金刑となると注意した。崇明島にはフランス人の司祭が住んでいたにもかかわらず、彼は家を放棄し、家財を上梅に移し、それ以後は、

禁を犯さないように注意しなければならなかった。司祭たちは、ハドソン・テラーもよく知っていたように条約の追加条項によって保護されていたのだが、他国民に許された追加条項は、イギリス人にも適用されるべきであった。さらに上級の機関に上訴することもできたが、それまでの間は、領事の決定を受け入れて従う以外にはなかった。

その晩、家へ書いたのは傷心の手紙であった。若い求道者たちはどうなるのだろう。張や宋やその他の人々はどうなるのだろう。彼らは彼自身の信仰の子ではなかったか。神についてわずしかし知らない彼らを、助ける者もないままに、どうして残して行くことができるだろう。しかも主は、それを許された。わがは主のものであった。神は彼らを見放すことも、見捨てることもない。

「ごいつしよに集会ができなくなることは、ほんとうに悲しいことです」。

最後の集会の時に鍛冶屋は言った。するとその友は答えて言う。

「しかし、皆さんは自分の家で礼拝なさるでしょう。わたしがいても、いなくても、神はここにおられますから、日曜日にはやはり仕事を休みなさい。あなたがたのために聖書を読んでくれる人を見つけて、近所の人々を集めて福音を聞かせてあげなさい。」

「あまりわずかしかならないので……」、と宋が口をはさむ。

「それに読むことは読んでも、どの字もわかるというわけでもないし……あなたが去って行かれるのはほんとうに悲しい。でも、神があなたをここに送って下さったことを感謝します。あ

れほどの重荷だった罪が、すべてイエスの上に置かれたのですから。毎日、喜びと平和が与えられています」。

若い宣教師は、困惑と失望の中から、将来について、ただ神を待ち望みうるだけであった。このころ、両親にあてて次のような手紙を書いている。

お祈り下さい。わたしのためにお祈り下さい。より豊かな恵みを要しています。特権をはるかに下回る生き方をしています。「わたしは羊のために生命を捨てる」と言われた時、主が感じられたように、もつとわたし自身が感じられたら……。おおかみが近づくかと逃げてしまうような雇い人にはなりたくありません。また、安全な所で多くをなしうる時、軽率に危険の中に飛び込みたくもありません。主の御旨を知り、たとえ国外追放になったとしても、それを行なうだけの恵みをいただきたいのです。「今わたしは心が騒いでいる。わたしは何と言おうか。……父よ名があがめられますように」。ことばばかりでなく、行ないにおいても、また、真理においても、

キリストに従う者であるようにお祈り下さい。

この苦しむ人の全然知らないことであったが、同じ問題に直面していた人がもうひとりいた。この人は、神の事実について彼よりも豊かな経験を持つている人であった。この人もまた、中国内陸部の、滅び行く何百万もの魂のために重荷を負っていた。彼もまた巡回伝道の可能性を調べ、そのために開かれた有望な道を見いだしたのであった。しかし彼は、南京に到達しようとして失敗し、閉じ込められた生活を余儀なくされ、し

だいに沿岸へもどっていた。一八三九年の大リバイバルの時、スコットランド、カナダを通じてすばらしく用いられた、ウィリアム・バーンズが上海に近づきつつあったのである。ハドソン・テラーがちょうど必要を感じていた時、彼らは出会った。年齢的にはいふん隔たりがあるにもかかわらず、ふたりはまもなく、お互いに同じ思いをいだいていることを認め合った。パウロとテモテのようにふたりはいっしょになった。ハドソン・テラーの宣教生活ばかりではなく、その指導のもとにやがて発展する広大な事業の性格を形造つてゆくような友情が、こうした冬の日に始まったのである。

今は、一そうだけではなく、二そうの舟が組になつて、上海から内陸に達している水路を旅することになった。それぞれ中国人の伝道者を同行していたし、手伝いの人たちも同乗していたので、舟の上で毎日行なわれる礼拝は、なかなかたいした集まりであつた。バーンズ氏が進めて行つた仕事の方法は、協力者として喜んで従えるものであつた。主要な拠点を選んで、同じ場所に二、三週間とどまる。はつきりとした計画をもつて毎朝早くから出発し、時にはいっしょに、時には別々に、いろいろの地域を訪問するのであつた。バーンズ氏の信じていた方法は、どの市へ行つても、まず外人をほとんど見ることもない郊外で静かに働きを始め、しだいに住居の密集している地区へ進出するというやり方であつた。郊外での宣教に数日を費やし、道端の店の人の感情を害したり、商品を痛めたりすることがなく、自由に通行できるように、しだいに人の多い街路やマーケットへ近づくようにしたのであつた。それから寺院、学校、茶店を訪れてから、きまつて説教に最適の場所へ帰つた。どの集会でも、次にその場所を訪れる日時を知らせておいたので、

幸いなことにたびたび同じ顔を見ることができたし、関心を持つている聴衆とさらに話し合うために舟に招くこともできた。時がたつにつれてバーンズ氏は、ハドソン・テラーが彼よりはるかに若く、経験も少ないのに、より熱心な聴衆をひきつけ、自分は民家を訪れても外で待たされるのに、彼の場合は招き入れられるという事実が気がついた。やじ馬連中は外国の服装の人の回りに集まり、じゃまされずに心から聞こうとする者は、特に目だたない服装の友につく事実を見のがさなかつた。その結果は、バーンズ氏が左の手紙で語っているようなこととなった。

今度の旅行で上海を離れてから四十一日になりましたが、中国伝道協会のテラー氏と行をともししてきました。…わたしたちは豊かなあわれみを経験し、仕事の上でも大いに助けられました。一再ならずお話ししなければならなかつたのですが、四週間前の十二月二十九日に、どのようにして今着用しているこの中国服を着るようになったかを、もう一度お話ししなければなりません。

テラー氏は二、三か月前からこの服装の変更を実行しております。その結果、説教の時などにもずっと多くの人々から受け入れられるようになりました。わたしはこれに気づきましたので、この前例にならうのがわたしの義務であるという結論を得ました。

特定の一つの場所で本格的な仕事を続けることは困難かもしれませんが、この地方の働きの場はきわめて広大です。人々は熱心に聞いてくれますが、彼らが覚醒し、悔い改めに導か

れるためには、上からの力が必要です。キルサイスの信者の間に、わたしたちのための祈りの霊が働いているでしょうか。この霊を求めるなんらかの努力が見られるでしょうか。

必要の大きさは、どれほどでしょう。これはなんとしても祈るべきことであり、また祈りに答えていただかねばならぬ問題です。ここでの収穫は実に多いのに、働きの人はあまりに少なく、またこうしたための恵みも得ていません。しかし、恵みによつて弱いわずかの器が、大きなこと―考えられないほどの大きなこと―を達成する手段とされうるのです。

一八五六年一月二十六日

ウィリアム・バーンズの生涯にとつて、祈りは呼吸であり、神のことばは日用のかてであつた。彼の伝記にしろされている。

彼は実によく聖書を知る人であつて、その最大の力は、人々の良心に聖書の剣をあてはめる方法にあつた。時に彼の厳粛な訴えを聞く者が、生きた預言者が初めて語る聖書の新しい一章を聞いているのではないかと思うほどであつた。…その全生涯は文字どおり祈りの生涯であり、その奉仕のすべては贖罪所での戦いの連続であつた。…みことばの野を掘つて、のちにそれに触れるものの霊的な富となつたすばらしい金塊を掘り上げた。

温和な人となり、生まれながらの知者である上に豊かな教養を積んだ彼は、理想的な協力者であつた。彼は宗教音楽を愛した。変化に富んだ逸話の宝庫のような彼は、周囲の人々にとつて魅力であつた。他人のために自分の経験を喜んで語つたりも

した。この人とこの人の友情は、その持てるすべてのゆえに、特別な危機におけるハドソン・テラーへの神の賜物であり、祝福であつた。彼はその影響を受けて成長し、発達し、そののちの生涯に見られる霊的なものの価値の理解を与えられるようになった。大学での学びも非常に有益なものではあつたが、そのすべてよりもウィリアム・バーンズから受けたもののほうが大きかつた。同じ中国でテラーの前で彼が生きた現実とは、テラー自身が得、かつ知るべき現実であつたからである。

彼らは七か月の間、喜びをもつてともに働いた。初めは上海地区で働き、のちには汕頭（スワト）の周辺で働いた。南部にあるこの港町への召命は、全く突然であつた。彼らはこの地への最初の宣教師となる特権をになつた。ここは困難の多い地であつたが、今では実り豊かな働きの地となつている。もし彼らが中国服を着ていなかつたなら、土地の人たちの中にはいつて行つて住んだり、不隠な状態の隣人をあれほど多く親しい友とすることができなかつたであらう。医療事業を神が祝して下さつたので、初めは一へやししか借りられなかつたのに、四か月目には家全体が借りられるようになり、草創期の困難は終わつたかに見られた。

それからバーンズ氏の願いで、その若い協力者は、安全を図つて残してきた医療器具を上海へ取りに行くことになつた。長の別れになつてしまうことを予感しているかのように、彼はなかなか出かけようとしなかつた。彼はきわめて大きな意味を持っている交わりを、中断することを好まなかつたが、それ以上に、最悪の酷暑の中にバーンズひとりを残して行くことが心苦しかつた。彼は、ずつとあとになつてから回想している。

あの何か月かは、わたしにとって言いがたく幸いな喜びと、慰めの時であつた。バーンズ氏のような霊的な父を持ったことはなかつた。あれほどきよく、あれほど幸いな会話を経験したこともなかつた。そのみことばの愛はこちよく、きよく厳肅な生活と、神との不断の語り合ひは、彼と交わるわたしの心の深いかわがいがいられるほどであつた。

バーンズは医療事業の成長の必要を強く感じていたので、どうしても医療器具と薬が必要であつた。それでハドソン・テラーは上海へ向けて出発した。しかし、そこで知つたことは、火事で彼の医療器具がすっかりだめになつてしまつたことであつた。そして別に新しく調達しているうちに、彼は実に悲しい知らせを受け取つたのである。彼が愛し、尊敬していた友が、中国官憲の手によつて逮捕され、三十一日間の道のりを広東へ護送されて行つたというのである。その上汕頭へ帰ることも禁止されてしまつた。あれほどはつきりしていると思われた道が、不思議に不明確となり、失われてしまつたことの衝撃はさらに苦しいものであつた。

しかしながら、この大きな突然の試みがなければ、ハドソン・テラーが備えられていたその生涯の奉仕に導かれることはなかつたかもしれない。他のすべての人間的な愛を越えて彼の最高の喜びとなり、また祝福となつた愛を知ることでもなかつたかもしれない。

注

何年もあとになつてからのことであるが、――それは大揚子江をさかのぼる彼の最後の旅となつた――その時彼は筆者と

ともに甲板を歩いてゐた。彼は涙にかすんだ目で南岸の丘陵を見やりながら、幾度となく立ち止まつたものである。彼が「あのことについて話してあげることができればなあと思う。それはあの辺だつたが正確な場所は思い出せない」と言つたのは、青草島のあたりであつた。

何を思つてか、非常に感動している様子なので次のことばを待つた。しかし今、追憶して喜び、厳肅な思いにさせられてゐることは、もはや五十年も以前の経験である。彼はことばには表わせなかつた。彼の魂と神との間に何があつたのか、語ろうとしながら彼にはそれができなかった。その遠くに見える高地で、彼の将来についての啓示が与えられたのである。主はそこでご自身が導いておられた人に、全き服従の召命をお与えになつたのであつた。

七 「完全」―神の方法

主よ感謝します

わたしの巡礼の日々を

その時

荒野の泉はかれています

しかし初めてわたしは知ったのです

あなたの愛が

どんな必要でも満たせるということ

政治的な世界では、久しく暗雲が広がり、バーンズ逮捕を知らせたその同じ手紙によって、英国と中国との関係がさらに悪化し、ついに爆発点に至ったことが知らされた。ハドソン・テラーは寧波で、英艦隊の広東砲撃を聞いた。この戦争が終わるまでには四年の歳月を費やした。彼が初めに考えたことは、もちろん、バーンズのことであつた。バーンズがすでに汕頭を離れていて、南部の人たちの激しい怒りにさらされないですんだことはあわれみであつた。彼は十一月に妹にあてて手紙を書いている。

お気づきのように寧波に止められています。南部で起こった騒ぎの原因がついにはつきりました。最新のニュースによると、広東は二日にわたって砲撃され、二日目には橋頭堡が築かれ、太守が英国に満足な回答を与えるのを拒否したの

で、軍隊が町へはいったということです。もつと新しい、正確な事柄を知りたいとせつに願っています。どのような行動が

なんの役にたつのかわたしにはわかりません。だからそれについてわたしの意見を書くのはやめます。ただバーンズ氏がちやうどよい時に汕頭から移されたことは、主のよきお顧みであつたと言いたいと思います。汕頭にいる広東人たちの感情を、現在のこの情勢から判断すると、もし彼が彼らの手に掛かったらたいへんなことになったであろうと思われるからです。

たいへんな騒ぎに見えた情勢も、ここではすでに「神を愛する者」のために働いて益となる「すべてのこと」の一つとして認められている。これと同じように多くの困難な経験を通してハドソン・テラーは、神ご自身を、情勢そのものを支配されるおかたとして考えることを学んだ。また、外面的な環境とか情勢は、神の意志が許しによって与えられるものであるから、必ず最も行き届いた、最も考え深く、最もよいものでなければならぬと考えるようになった。寧波にとどめられていた彼は、まもなく神の愛と顧みのもう一つのすばらしい証拠を見せられた。そこで彼自身の生活をすばらしく整えてくれるような生活をしている人と出会うことになるからである。

市の南部の古いパゴダの近くに、二つの湖にはさまれた呉家橋（ウーケキョー）通りという静かな道があつた。パーカー博士は自分の病院から二、三キロ離れたこの通りに診療所を開設していた。秋も深まるころ、ハドソン・テラーは、そこに仮の住居を与えられて喜んだ。この小さな所は、のちに多くの州に何百というセンターを持つようになったチャイナ・インランド・ミッション（中国奥地宣教会）の最初の拠点となつたいわ

れのある場所であるテラーはこうした最初の毎日を回想して書いている。

今は四つ五つの小さなへやに分けられ、けっこうな天井もできていたが、以前、穀物倉のようだった二階の大きなへやでは、夜中掛けぶとんに雪が積もるのだった。その雪の上に自分のかしら文字を書いたことをよく覚えていた。中国の家の屋根は普通の雨に対しては問題はなかったが、割れ目や裂け目に吹きつけて中に侵入してくる雪はあまり防げなかった。しかし、そんなに完全な造りではなかったとしても、人々の間で働くのには、実にふさわしい小さな家であった。わたしはそこに、朝、昼、晩の奉仕のための適当な場所を得て、感謝をもって落ち着いたのである。

市の同じ地域に住んでいた外人は、彼のほかには、彼と同様に中国伝道協会に所属していた「ジョーンズ夫妻と、ふたりの若い助手とともに中国で初めての女学校を経営してすばらしい成功を収めていた婦人だけであった。このオルダシー女史は幸いにも、サムエル・ダイヤー牧師―中国宣教の先駆者のひとりでロバート・モリソンの同労者―の娘たちの助力を得ていた。

ジョーンズ一家が学校からあまり遠くない所に住むようになった時この姉妹のうちの妹は、機会を見つけては家事に忙しいジョーンズ夫人をよく助けたのであった。彼らはできるかぎり近所の訪問に出かけたが、ダイヤー嬢のりゆうちようなことばのために、幸いな率仕ができた。頭もよく、才能も豊かであった彼女は、まだ二十歳にも満たない若さだった。学校でも非常に忙しい責任を果たしていたが、また彼女は真に魂をかちとる

ことのできる人であった。彼女は宣教師の仕事が、教えるということばかりではなく、人々をキリストに導くことであることをはつきりと知っていた。

このことからハドソン・テラーは、彼女に興味を持つようになり、だんだんにひきつけられていった。彼らは同労者の家でしばしば会ったが、彼女は非常に率直で、自然であったので、ふたりはやがてよい友だちとなった。たいせつな問題のすべてについて、彼らは同じ気持ちをもっていることがわかり、彼は意識していなかったが、彼女は彼の心に新しい満足を与えはじめていた。

しかし、まもなく寧波の宣教師のうえに起きた突然のできごとが、このふたりの友情を中断してしまった。宣教師をすべて虐殺するという陰謀が発覚したのだ。結局この計画は実行には移されなかったのだが、この地域全体にわたって広東人の憎悪が激しく、子供のいる家族を沿岸地方に移す必要が考えられるようになった。ハドソン・テラーが上海の方言をよく知っていたために、一隊の同行者としていちばん適任だということになった。このような時に、この地方を去るのは困難なことではあったが、拒否のできるような事柄ではなかった。

オルダシー女史にも勧告がなされたが、彼女は安全な場所を求めようとはしなかった。ちょうどそのころ学校は、彼女の年齢も考慮して、米国長老教会宣教会にゆだねられようとしていた。時は不必要な変更をすべき場合ではない。可能なかぎりの用心をしながらいっしょにとどまるようにと彼女は若い助手たちを励ましていた。姉妹のうちの姉は、ハドソン・テラーの親友、J.S.バードンと婚約していた。そのために妹は寂しく、

守られていないような感じがしていた。こうした時に彼女を残して行くことがどんなにつらいことであつたか。しかし、ハドソン・テラーには、彼の存在が彼女にとって特に慰めになると考えてよい理由もなかった。それに彼は、彼女を忘れようと努めてさえたのではなかったか。

第一彼は、愛する者に与えられるものが、あまりにも少ないことを敏感に悟つていた。中国伝道協会の代表としての彼の立場に、そのころ、ますます困難を覚えるようになっていた。協会が借金を負つていたこと、彼の給料も借入金から支払われていることなどを、しばらく前から彼は知るようになっていた。こうした事情を思い起こしながら彼はしるしている。

わたしは個人的には、いつも借金を避けてきた。そのためにはお金の使い方に非常に注意をしなければならないことが、幾度もあつた。現在は収入も増し、このことは別に困難ではないが、協会自体が借金を負つてしまつてゐる。給料として銀行からおろすように指示される金は、しばしば借金によるものであつた。これについて手紙の交換が始まり、それは翌年まで続いたが、ついにわたしは良心的な理由から辞職した。

わたしにとって神のことは、「何人にも借りがあつてはならない」ときわめて明白に教えているように思われた。わたしにとつて借金は、聖書に反することであつた。借金は神が何かよいものを与えて下さらず、与えられていないものをみずから得ようとする決意の告白であつた。個人としてのクリスチャンにとつてよくないことが、集団としてのクリスチャンにはよいということがありうるだろうか。いくらかの前例が

あるからといって誤つた方法を正当化できるだろうか。みことばが教えるところがあるとすれば、それは借金とかかわりを持つなどということである。わたしには、神が貧しく、十分な持ち合わせがなく、また真にご自身のわざである働きの必要を他のものによつて補うことを喜ばれるとは考えられない。仕事が続けられていくために資金が不足しているというなら、その資金を要していることそれだけが神のわざではありえないと思われる。良心の示しに忠実であるためにわたしは、協会との関係を断たざるをえなかった。ほんとうにうれしいことに、同労者のジョーンズ氏もわたしと行動をともにするように導かれた。団体を離れるにあたつて、どちらにも全く感情の行き違いなどを残さないですんだことは、ふたりにとつてまことに感謝なことであつた……。

こうした方向に踏み出したことは、信仰のなみなみならぬ試みであつた。神がわたしに何をさせようとしておられるのか。それまでのような仕事を、それまでのように続けられるように、必要を満たして下さるのかどうか、必ずしもよくわからなかつた。しかし神は、わたしを祝福し、わたしのわざを祝して下さつた。正式に団体から離脱できた時、まことにうれしく思い感謝した。次に示して下さることを恵みによつてなす備えもでき、また主の親しいお取り扱いに強い確信を与えられた。そして満たされた気持ちでまっすぐにみ顔を見上げることができた。

主がどれほどの祝福の中にわたしを導いて下さつたか、とても表現できない。それは以前母国において経験したことの連続のようであつた。信仰が試みられなかつたわけではない。

しばしば失敗し、み父を信頼しなかったことについては、ほんとうに申しわけなく、恥ずかしく思った。しかし、何よりもわたしは主を知ることを選んでいたので。その時でさえ試験を失いたくはなかった。主は実に近く、生き生きとして親しいおかたとなつて下さった。時に財政的な困難を経験しても、個人的な必要が満たされなかったことは一度もなかった。困難は、周囲にいる何十人もの飢えて死にかかっている人たちを助けるためであつた。こうした困難は目だちはしなかったが、他の面で探られ、深められて、さらに豊かな実を結ぶ結果となつたのである。

その冬、彼らがめんどろをみていた貧しい人たちは、長髪賊の乱のために荒らされた地区から上海へ流入して来た難民であつた。程度の差はあつたが彼らは、病氣におかされ、衣服もなく、飢餓にひんして苦しんでいるという状態で、低い弓型の墓をあけて住んだり、半ば廃屋となつた建物に住んだりしていた。ハドソン・テラーは、ロンドン・ミッシヨンに属するチャペルの一つの責任を持つて、毎日、市の寺院で説教をしていた。さらに彼は時間をつくつて、この気の毒な人たちのすみかをジョーンズとともに訪れ、飢餓状態の多くの人たちに食を与えたのである。

彼がいつも寧波に思いをはせていたのは、このように仕事がなかったからではなかった。そこへ行けば結婚問題を切実に考えざるを得なくなる自分を気づかつてもいた。「できることなら結婚するな」とは、誤解を招きやすい神秘的なことばであるが、ハドソン・テラーは、その意味を理解しはじめていた。

神からの大きな愛が与えられていたからであり、その意味するところを隠すものはなかったからである。

その間、乗り越えなければならぬ障害は非常に多かつたが、寧波でも同じ恵みの摂理のわざが続いていた。しかし問題は、最も心を用いていた相手にあつたのではない。マリヤ・ダイヤーは深みのある優しい性質の人であつた。子供の時から孤独で、真の心の友にაცოგაれながら成長した。父親はほとんど思ひ出せないほどだつたし、母親も彼女が、十歳の時に世を去つていた。オルダシー女史を助けるために中国へ向かう道で真の回心を経験したが、そのために彼女の宣教師としての働きは、そうでなかつた場合に考えられるのとは全く違うものとなつていった。しかし、なんといつてもまだ十代の少女にとって、宣教師であることは寂しい働きであつた。姉が婚約をしてからは、なおさらそうであつた。

そんな時に彼が来た。きよくあること、用いられること、神に近くあることを自分と同じように求めている人として彼女の心に強い印象を与えた若い宣教師が来たのだ。彼は他の人と異なつていた。それは彼が特に天分が豊かで魅力があつたからではなかつた―もつとも彼は聰明で、感じのいい人であり、静かで楽しいふんい気を持つてはいたが―彼のうちには彼女を安らがせ、自分を理解していくれると感じさせる何かがあつた。彼は確かに真の世界に生き、真の偉大な神を持つているようであつた。彼について別に多くを知っているわけではなかつたが、彼が近くにいるのを知ることが彼女にとって慰めであつた。彼がわずか七週間後に汕頭へ帰つて行つた時は、彼女が自分で気づいてはつとするとするほど彼をなつかしく思つていた。

それからすで見えてきたように、汕頭での働きの道が閉ざされ、彼は寧波に帰つて来た。彼女にとつてはうれしい驚きであつた。おそらく彼について自分がいだきはじめていた感情を自認するようになったのは、このことによつてであろう。やがて彼女はそれに気づいた。真実で優しい性質の彼女は、自分の心を神の前に隠そうとはしなかつた。また彼女は彼のことを別にだれにも語りはしなかつた。彼女が彼のうちに見たものを、他の人も見るとはかぎらなかつたからである。人々の中には彼の中国服姿をきらい、土地の人たちと同化するのをよいと思つていない人もあつた。彼女は彼の中国服が大好きだつた。というよりも、それが表わすもの、つまり中国服を着るような彼の気持ちが大好きであつた。彼の貧しさや、困つた人たちに与える態度も彼女には全くよく理解できたし、また、どれほど同情したことであろうか。他の人たちは彼が広大な未伝の内陸へ行くことを切望しているのを、なぜ空想的だと考えるのか。それこそ彼女の心の重荷であつたし、彼女もそうした生き方を願つていたのだ。ただ彼女が婦人であるために、実現性を少なくしていたように思われたにすぎない。それで彼女はその友のために熱心に祈つた。もつとも彼に対しては、そのことをわずかししか表わしはしなかつたが。

彼が上海での滞在を余儀なくされている間にも何か月かが過ぎ去つて行つたが、彼にとつて彼女のそばを離れることがなんらかの打撃であるということさえも彼女は知らなかつた。それからついに一通の手紙が来た。大きなすばらしい喜びが突然やつて来たが、それは驚きではなかつた。むしろ長い間、うちに輝いていたことが、静かに外に現われて来たにすぎない。彼女は結局誤つてはいなかつたのだ。ふたりはもともと互いのための

存在であつた。「み前にともに歩むために神が選ばれたふたり」であつた。

最初のうれしい感謝から立ち上がることができるとすぐに、彼女は最も同情的であつた姉を見つけに行つた。次になすべきことは、オルダシー女史に、ビウラの場合と同様に、この婚約を認めてくれるように願いつつ話すことであつた。しかし、この話を聞いた時の老女史の怒りはたいへんなものであつた。

「テラーさんですつて！ あんな若い貧乏なひとりよがりの長物、あの人はどうしてそんなことを考えることができるのでしょうか。もちろん、この求婚はただちに断わらなければいけません。わたしの言うことはこれだけです」。

マリヤは彼女にとつて彼がどんなに大きな存在であるか説明しようとしたが、むだであつたし、事態をますます悪化させるのみであつた。彼女をそうした愚かさからすぐに救い出すために、親切な人が最大の善意をもつて、すべてを処理するように取り計らつてくれた。その結果は、この問題をここで終わらせるだけではなく、今後、決してふたたびこの話を持ち出さないようにと願つたオルダシー女史のことばどおりの手紙を書くことであつた。困惑しきつてしまい、非常に心を痛められながらも、哀れなこの少女には、選択の自由がなかつた。あまりにも若く、経験もなく、内気な彼女にとつて、友人たちからいよいよ支持を得ているオルダシー女史の決定に逆らうことはできなかった。骨身にしみる悲しみに打ちひしがれながら、彼女にできることは、すべてを天のみ父にゆだねることであつた。主は知られ、主は理解して下さる。それからの長く悲しい日々、姉までがオルダシー女子の立場に立つてしまつても、彼女は、主にとつてはむずかしすぎることは何もないということを確信し

て安らぎを得ていた。「もし主にわたしのイサクが殺されなければならぬとしても、ふたたび生かしたもうことを知っている」と彼女はくり返しくり返し自分を納得させるのであった。しかし、ふたたび春が訪れ、離れていた人たちが上海から帰れるようになると、彼女の立場はいよいよむずかしいものとなってきた。ハドソン・テラーがふたたび現われることを怒ったオルダシー女史は、あたかも自分の義務であるかのように、あらゆる可能な方法で彼を軽べつした。彼はマリヤ・ダイヤーからもらったあの手紙のために、彼女に会おうとすることもできず、彼女の態度の変化についてなんの手がかりも得られなかった。有能で魅力的な彼女に対して、他の人に勧められて公然と求婚する者たちもあつた。そして、善意からの人づき合いの方法と、中国人の作法とが結びついて、ふたりが会うのは、ほとんど不可能なことだつた。しかし、ふたりは祈っていた。非常に試みられながらも、主の御旨を心から願つてふたりの心は神に対して開かれていた。真実、主はすばらしい働きの方法をお持ちであつた。

七月の蒸し暑い午後のことであつた。ジョーンズ夫人の家で婦人宣教師の祈り会が持たれる順番になつていた。その日、集まる時は別になんのことでもなかつたが、帰る時には非常に困難なことになつた。いつもの婦人たちが集まつて会が始められた。するとその時、ほとんどなんの前ぶれもなく竜巻が襲つて来た。竜巻は海水が流れ込んでいる川を、まるで掃き上げるかのようにしてさかのぼり、寧波の街を水浸しにしてしまった。続いて激しい豪雨が降りはじめた。診療所にいたジョーンズとハドソン・テラーは、道路が洪水になつたために帰宅が遅れた。家に着いた時には、婦人たちはほとんど帰つてしまつてい

たが、学校の召使がそこにいて、「マリヤ・ダイヤーさんともうひとりのかたがかがを待つておいでです」と告げた。するとジョーンズはハドソン・テラーに、「あなたは書斎へ行つていて下さい。彼女に会えるかどうか見てきますから」と言つた。

ほどなくジョーンズはもどつてきて、婦人たちがジョーンズ夫人と三人だけでいて、テラーに会うと喜ぶだろうと言つた。テラーは夢中で、二階にのぼつて行き、彼がこよなく愛していた人と会うことができた。確かにそこには他の人たちもいたが、それは中国の習慣としてやむをえないことであつた。しかし、彼にはほとんど他の人々が見えなかつた。彼の目にはいたのは彼女の顔だけであつた。その時、彼はただ、ロンドンにいる彼女の後見者に結婚の許可を願う手紙書いてもよいかとだけ尋ねるつもりだつた。けれども彼はいつさいを話してしまつた。彼にはどうすることもできなかったのだ。一方、彼女は、そこには親友しかいなかったし、いつまた会えるかもわからないと思つて、すぐに彼のことばに同意した。それから彼女は、それをはるかに越えることをしたのだつた。真実な女性の心をもつて彼女は、彼が自分のことを思つていてくれるのと同じように、彼女も彼を慕わしいと思つていて彼を安心させたのだつた。それで、ハドソン・テラーは「祈つてすべてを主にゆだねましょう」と言つた。このことばで、その場の緊張は和らげられた。

オルダシー女史の反対はますます強くなり、本国に手紙を書いて遠縁の人たちを説得しようとしていた。このようなことを知りながら、返事を待つている間の四か月は、実に長く思われた。ロンドンにいる彼女の後見者が女史の強い意見に動かされ

たらどうなるであろう。結婚に同意することを断わられたらどうなるのだろう。若いふたりはともに、両親や両親の代理として権威を持つ者への服従がなければ、神の祝福を得られないことをはつきりと自覚していた。のちにハドソン・テラーは書いている。

わたしは両親のはつきりした命令に―たえ両親がまちがっていても―従わないで罰を受けなかったというような例を知らない。主によって勝ちなさい。主はいかなるドア（注）でも開かれる。こうした場合に責任は両親の側にある。それは厳粛な責任である。むすこや娘が真実に「わたしはあなたが道を開かれるのを待ち望みます」と言えるなら、問題は主のみの手のうちにある、主がそれを取り上げて下さるであろう。

そして主は、確かにそれを取り上げられた。十一月も終わりに近くなつたころ、長い間待つていた手紙が来た。しかもそれはよい返事であつた。ロンドンのおじは注意深く調べてから、ハドソン・テラーがきわめて有望な宣教師であることを知つて満足したのであつた。中国伝道協会の書記たちが彼について言つたことは、よいことばかりであつた。また他の人たちからも、彼について聞いたことは、みな最高の評価であつた。穏やかでないうわさを聞いても彼は、それを聞くのに価値のないものとした。彼は心からめいの婚約に賛成し、ただ彼女が法定年齢に達するまでは結婚を延ばすようにと求めてきた。彼女が二十一歳に達するまでには、あと二か月とちよつとにすぎなかつた。

公式の婚約が成立してからの幸いな冬の日の喜びは、それまでのできごとのすべてを十分に埋め合わせた。一月十六日土曜日に花嫁候補は二十一歳になつた。結婚式はその次の週に予定された。

ハドソン・テラーは書いている。

こんなに気持ちよく感じたことは今までにありませんでした。：母上様、何が起こつたのか、ほんとうに実感がわきません。ともに苦しみ、待たされたのちに、ともに会つていっしょにいるだけでなく、神が許されるならば二、三日のうちに結婚をするはずです。神はわたしたちをよくあしらわれました。神は確かに祈りに答え、敵の力に対してわたしたちの味方となつて下さいました。もつと主に近く歩み、もつと忠実に主に仕えたい。あなたがわたしの愛する者を知つていて下さつたら、なんとお思ひになるでしょう。彼女はまことに宝です。彼女はわたしが望むすべてです。

六週間ほどたつてから彼はまた書いている。

最も優しく、また献身的に愛する者と結婚することは、どんなことばでも表現できず、あらゆる想像を越えた祝福であります。そこには失望はありません。そして、わたしのようによい宝を与えられていると、毎日が愛する主のみこころを、いよいよ明らかに示される時です。毎日いよいよ誇らしい幸福な気持ちになり、地上の賜物の最善である妻を与えられたことを、すべてのよきものの与え主である神に、いよいよへりくだつて感謝させられます。

注

テラーはその時、外国宣教への召命の問題を特に考えていた。ここで言っているのは、両親のひとりか、またふたりともが賛成しない場合である。

八 收穫の喜び

種まきののちに收穫

雨ののちに太陽

神秘ののちに理解

苦しみののちに平安

F・R・ハーバーガル

中国でのハドソン・テラーの働きの第一期はわずか二年半を余すのみであったが、それはむだのない豊かな期間であった。呉家橋通りの小さな建物も、今ではほんとうの家庭を営んでいるようになった。礼拝堂と客室のある階下は前と同じで、信者や求道者が自由に出入りしていたが、二階の明るいいくつかのへやが、もとは物置きのような屋根裏であつたとは思われなかつた。カーテンの掛かつた窓からは、前の狭い道と、後ろの運河が見おろせた。婦人や子供が男子とともに住めるようになったので、大きな変化がもたらされていた。テラー夫人は、すでに近所の人々の間でよく知られていたが、訪問して行くとますます歓迎されるようになった。そして「世界じゅうは愛ある者を愛する」ゆえに、一つに結ばれた心を持つふたりの魅力は、多くの人々をひきつけたのであつた。最も親しい友であり、助力者のひとりに、以前の仏教徒指導者で、町で綿の商人をしていた人物があつた。この人は倪（ニー）といつて、長い間寧波に住んでいたが、それまで福音に接したことがなかつた。彼は非常にまじめな人で、ある偶像礼拝の団体の会長とし

て「神々」に仕え、多くの時間と金を費やしていた。しかし、その心は安らかではなく、彼なりに熱心におつとめをすればするほど、そのむなしさを感じさせられていたのであつた。

ある夕方、道に面して開いたままになっている戸口の中で何かが行なわれているのに彼は気がついていて、そこには人がおおぜい集まつていて、何か集会でもあるようだった。それが宗教的な問題を話すための集会だとわかると、彼もその中へはいつて行つた。彼にとつて、罪の罰と、どこともわからない所へ魂が移り住まなければならないということほど、大きな関心事はなかつた。若い外人が中国服を着て、聖典から説教をしていたが、寧波語を自由にあやつつていたので、倪はその一語一語を理解することができた。しかし、いったいそれはどういう意味なのだろう。

ちやうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない：神はそのひとり子を賜つたほどこに、この世を愛して下さつた。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によつて、この世が救われるためである。

救われる、さばかれない、永遠のいのちを見いだす道、世を愛する神、へび、人の子が上げられた―彼の心の中に起こつたことを脱明するのに、「倪氏は関心を持った」というのでは、あまりにも不十分である。罪と罪の恐ろしい結果からの神のいやしの説明である荒野におけるへびの物語。主イエスの命と、死と、復活。こうしたことすべてが自分の魂の必要に対してどん

な意義を持つかということを理解した彼は、聖霊の力によつて安息を与えられたのであった。実際それは、今日でもなお見られるいつに変わらぬ奇跡である。

「わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引き寄せるであらう」。

集会は終わろうとしていた。外人教師は話をやめた。こうした問題で先頭にたつのに慣れた者の直感で、倪は、自席に立ち上がり、聴衆を見回しながら飾りけのないことばで言った。

「わたしは長い間真理を求めてきましたが、見いだせませんでした。遠近を問わずあちらこちらに旅行しました。しかし、結果は同じことでした。儒教、仏教、道教などにも安息はありませんでした。しかし、きょう聞いたことにほんとうの安心があることがわかりました。わたしはきょうからイエスの信者です」。

彼は熱心に聖書を学びはじめた。その知識と恵みにおける成長はめざましかった。彼は回心してからまもなく、以前に会長をしていた団体の集会で話すことになった。同行して行つたハドソン・テラーは、彼が福音をはつきりと、しかも十分に証明したことに深い感銘を受けた。以前彼についていた人がひとり、彼の証言によつてキリストに導かれた。こうして倪は救霊の喜びを知りはじめたのである。友人となつた宣教師に、突然彼は質問した。

「このよい知らせはあなたの国ではいつごろからわかつていたのですか」。

「何百年前からです」とあまり気の進まぬ返答があつた。

「なんですって、何百年もー」。彼は悲しそうに続けた。「わたしの父は真理を求めました。しかし、見いだせないままに死

んでしまいました。なぜもつと早く来て下さらなかったのですか」。

これはハドソン・テラーがその後も忘れられなかつた苦難の瞬間である。それ以後は伝えうる人々にキリストを伝えることを、さらにせつに求めるようになった。

このころ、全時間をささげて仕事を助けてくれる人が必要であつた。その必要があまりに切実であつたために、よほど忍耐をしていないと、聖霊の先走りをしてしまいそうであつた。若い宣教師たちには、その時まで、一定した中国人の協力者がいなかった。倪は、仕事の許すかぎりの時間をささげて、熱心に働いていたし、かご職人の方能貴、ホシの農夫王、教師の邱（キュー）とその母も同様であつた。彼らも、他の人たちもみな、夕刻と聖日は宣教師館で多くの時間を過ごしたが、日中は本業に時間を取られていた。テラー夫人が毎日多くの時間を

用いて教えている学校の先生でもいいし、他の人でも報酬を与えて雇い、訓練して働きに役だつようにするほうが容易であつたろう。しかし、長い目で見ればこの方法は助けになるよりも妨げになるだろうと宣教師たちは考えた。どれほど真剣であつたにしても、報酬を払ふこと―特に外国からの金で報酬を払ふこと―は、彼らの品性を傷つけるとまではいかないとしても、彼らの影響力を減退することは避けられないに違いない。彼らの神からの召命がだれの目にも疑えぬものとなり、信者たちが彼らをサポートできる時が来るだろう。中国人の教会によらなくて、どうして中国に伝道ができるだろうか。宣教師が霊的な発展を忍耐して待たなければ、回心者たちが主イエス・キリストへの愛から、報酬なしに、進んで奉仕をすることの喜びを知ることができないだろう。

このようにハドソン・テラーとその同労者は、すこぶる多忙な毎日を過ごし、彼らの周囲には若い回心者たちが成長を続けていたのである。彼は路傍や礼拝堂での説教、訪問者の応待、通信や経理の処理、伝道旅行、さらにそれらに加えて医療の仕事にも少なからず力を用いていた。しかし、何があっても第一に主要な仕事である信者や求道者とのたいせつな毎日の交わりを欠くようなことはなかった。

回心者たちが恵みと神の事実の知識に成長していったのは、惜しみなく注がれた愛の配慮を考えれば、むしろ当然のことであつた。宣教師たちは、夕刻になるといつでも相手をしてくれた。定期集会が終わると、注意深く準備された三時限にわたる学びが整えられていた。最初が旧約聖書からの学びであり、ハドソン・テラーは喜びに満たされて旧約の霊的な教えを説き明かした。しばらく休んでから「天路歷程」のような有益な書物の一章を読んで聞かせ、最後に新約の一章節を取り上げて討論し、また実生活に適用させていったのである。礼拝と伝道集会が行なわれる日曜日までは、毎晩このような順序がくり返されていった。

聖日にも講義の時間があつた。信者たちにとっては、七日のうち一日、店をしめて家業を犠牲にすることは少なからぬ打撃であつた。しかし、ハドソン・テラーと同労者たちには、そういうことがなくては強力な自力伝道のできる教会の建設は不可能であることがよくわかつていた。それで彼らは、せっかくの犠牲を有意義なものとするために、神にささげた時間をむだにせずには有用な仕事を喜んで続けることができるように、全力を尽くす覚悟をしたのである。定期集会の間の時間には、信者、求道者、患者、学童、下僕たちが、それぞれの分級で、直

接に、最も効果的な方法で教えを受けていた。四人しかいない宣教師にとつて、このために日曜日の負担は相当なものであつた。しかし、彼らがそのためにいくらかでも苦勞し、疲れを覚えたとすれば、彼らはそれによつて回心者たちの払う犠牲を、より身近に感じる事ができたであらう。遠くから歩いて来る者は、食事もとらずに何時間もかかつて来なければならなかつた。中には迫害を受けて、個人的な損失を余儀なくされた者もいた。しかし彼らの大部分は、礼拝のために聖日さえ自由になれば、どんなに困難な問題にぶつかなければならなかつたとしても喜んでいた。彼らは礼拝にあずかるのとそうでないのとは、一週間のうちにどれほどの相違があるかということを知っていたからである。

こうして教会は成長し、宣教師たちの働きは発展し、奉仕の機会はだんだんと広がつていった。ハドソン・テラーが結婚した年の夏に天津条約が調印された。ついに内陸各州への道が開かれたのである。いまや宣教師たちは旅券の保障のもとに自由に旅行する権利を得、長年祈り続けてきた便宜を、ただ利用しさえすればよいことになった。十一月にテラーはしるしている。

この手紙が着く前に新条約についてすべてをお聞きになつてゐることでしょう。奥地行の…何人かの宣教師を寧波から失うことになるかもしれません。ああ、祖国の教会が目ざめ、よきおとずれを伝えるために、もつともつと多くの人をこちらに送つて下さらないものでしょうか。わたしたちの多くが奥地へ行くことを待望しています。せつに願っているのです。しかし、主以外にだれも解くことのできない責任と仕事

に縛られているのです。主がこの地の多くの中国人に「賜物」を与えて、すでに形造られた諸教会の世話ができるようにして下さり、わたしたちを自由に、開拓伝道に出かけさせて下さいますように。

伝道的な自給教会を神の祝福によつて起こすこと、これが彼らの心の重荷であつた。依然として彼らを主にある両親として必要としている、小さな信者の群れの望みを無視することはできなかった。これらの魂は、彼らの愛と祈りにゆだねられたのであり、今彼らを残して行くことは、それが他の人たちの益となることであつたとしても、親の責任という最高のゆだねられたわざを無視することになつた。のちになつてはつきりと見られるようにこの確信は正しかつた。倪、能貴、王をはじめ、その他の信者たちは、神の用いうる人たちであつた。そのほとんどは貧しくて教育もなかつたが、彼らは人をとる漁師になるはずであつた。初期の回心者のうち、少なくとも六、七人が、チャイナ・インランド・ミッションの草創期に、彼らの愛する指導者を助けるようになった。事実、彼らの協力がなくては人間の的に考へて新しい計画は実現できなかったであろう。この時の呉家橋通りの集中伝道の結果を、あまり高く評価することは困難である。宣教師たちの状態は、たぶん彼らの信仰の子供たちの状態の上に現わされた。霊的な祝福を伝えるのに、これ以上に確実な道はない。

刈り入れのこの喜びの最中に、突然、非常に悲しいできごとが起こり、そのためにハドソン・テラーは新しい責任を引き受けることになつた。居留地ではそのころ、パーカー博士の新しい病院が完成していた。場所は市の門の一つに近く、川を見お

ろす所にあつた。広々としたいくつかの建物を、毎日何千もの人々が見ていた。そのすべては、苦難の年月を経て築き上げられた事業の必要にすばらしくよく適合していた。しかし、博士の家には、悲しみに打ちひしがれた人たちがいたのである。あれほど多くの困難を乗り越えてきたこの勇者の妻は、ほんの二、三時間の病気のうちに四人の子供を残して去つて行つた。彼らはその愛する者のゆえに泣いていた。ひとりの子供は重病だつた。博士は子供たちをみなスコットランドへ連れ帰らなければならぬと悟つていた。しかし、博士が病院を離れたらその後はどうなることだろう。病院には患者が満員であつたし、診察室には毎日手当てを必要とする人が群がっていた。代わつてくれる医者もない。冬を迎えようとしている時に、病院の閉鎖は考えられないことであつた。この仕事のために残してゆく経費もなかつた。経費は、彼の個人的な医療事業の収入によつてまかなわれていた。けれども博士は、以前の協力者であつたハドソン・テラーが診療を続けてくれることができるのではないかと考えた。そこで彼らに予期していなかつた勧誘がなされたのである。テラーは回想して言う。

主に導きを求めてから、必要を満たす方法を備えられ、祈りを聞きたもう神のご忠実さにのみたよつて、診療だけでなく病院の世話も引き受けるようにと迫られているのを感じた。診療を受けに来る人々のほかに、時には五十人以上もの入院患者がいた。ベッドのうち三十床は、普通、無料の患者とその付き添い人に割り当てられ、それ以外は食費を払つて阿片吸引の習慣を直してもらう人々のために当てられていた。外来者の医療費はもちろん、入院患者の費用も無料であつたの

で、毎日の出費は相当なものであった。その時までには、博士が外人を診療して得た基金でこれらのすべての経費がまかなわれていたが、博士の出発とともに収入源は全くなくなつてしまつた。しかし、主イエスの名によつて求めることはなんでもなされると、神は言われたではないか。それにわたしたちは、方法ではなくて、神の国そのものをまず求めなさい、そうすればこれらすべてがわたしたちに加えられると聞いている。まさに十分な約束ではないか。

若い宣教師たちにとつて、その地位が望んでいたものでなかつたことも、本国の友人がだれもこのことを予見しうるはずがなかつたことも、手紙の返事を何か月も期待できないこともいさ問題ではなかつた。必要のために彼ら自身は主だけを見上げていたし、期待にそむかれることもなかつたではないか。緊急事態に備えられた信仰の秘訣は、神に対する静かな、實際的な、日々の依存と、信じる者の心に神を生き生きとさせる信頼であつた。彼はしるしている。

寧波病院のめんどろをみるなどということは、実際にそうなる八日前までは夢にも考えなかつた。本国の友人がそのための必要を予見できなかったのはなおさらのことである。しかし、主はこのようなことが起きるのをすでにご存じであつた。それは事態が進むにつれてしだいに明らかにされていた。病院の運営の事情が変わり、病院にはその日の必要を満たすだけの基金しかなく、その後はただ祈りにたよるしかないという実情がわかつた時にパーカー博士の残していつた働き人たちが辞職する決心をしたのは無理もないことであつた。パーカー博士はずつ

と以前から働き人を替へたいと思つていたが、別の種類の助力者をどうして得られるかわからなかつたのでちゅうちょしていた。しかし、ハドソン・テラーにはその方法がわかつていた。だから非常に楽な気持ちで、彼を失望させることのない人々の群れに目を向けたのである。呉家橋通りの信者たちは、霊的な必要と同様に、物質的な必要についても主に信頼することを当然と思つていたからである。大は小を兼ねるのではなかつた。「先生」がよく思い起こさせてくれたように、神は子供の必要を決して忘れることのない真の父ではなかつたか。そこで彼らは、友である宣教師の働きを強化するためばかりではなく、自分たちと、また関心をもつすべての人に対して、神の忠実さをもう一度新しく明らかにするために、喜んで病院に来たのである。それぞれの働きは一樣ではなかつた。ある者はでぎるだけの時間をささげた。ある者は必要は備えられたが別に賃金の約束もなしに全時間をささげて働いた。みんなが病院とその問題のために、心を用いて祈つた。診療所にも、病室にも、新しい空気がしみ込んでいったが、それも不思議なことではなかつた。患者たちの間に――とにかく初めは――家庭的なふんい気と、熱心な扱い方に対する喜びがあふれていた。毎日が新しい興味の連続であつた。これらの働き人――草刈りの王、ペンキ屋の王、倪、能貴たち――は、限らない喜びの秘密を知つていくように思われたし、多くのものを与えることのできる者のように思われたからである。彼らは病人には親切で慎重であつたが、そればかりではなく、時間があるとすぐ、彼らの命を造り変へ、安息を求めて来る者をだれでも受けうるかたについて話していた。本もあり、絵もあり、歌もあり、すべてが賛美を奏

しているようであつた。礼拝堂での毎日の集会は、次の集會をいよいよ待望させるようなものであつた。

中国で秘密が保たれることはほとんどない。病院を經營するための經濟的な基礎も秘密に属することではなかつた。まもなくすべてを知つた患者たちは、結果がどうなるかを熱心に見守つていた。パーカー博士が残した金はなくなり、ハドソン・テラー自身の供給するものも心細くなつてきた。次に何が起ころのだろうと想像をめぐらす人々も多かつた。そのころ彼は、ある時はひとりで、またある時はわずかの助力者たちとともになつて、熱心にせつに祈り求めていた。この事實が公然と知られていただけに、ある意味では彼の最も危機的な經驗であつたとも言える。病院が持ちこたえるかどうか、ということばかりではなく、そこには少なからぬ数の人々の信仰がかかつていた。しかし、予期していた答えもないままに、一日一日と過ぎていった。

ある朝ついにコックの貴華（注）が主人のところへ来て、深刻な報告をした。彼は最後の米袋も開いてしまい、それもほとんど減つていゝと言つた。ハドソン・テラーは「それではいゝいよ主の助けて下さる時が近づいてゐるのに違いありません」と答えるのだつた。實際、そのとおりであつた。その米袋がからになつてしまふ前に、若い宣教師は一通の手紙を受け取つた。それは彼が今まで受け取つた手紙の中でも実に驚くべきものであつた。

バーガーから来たその手紙の中には、以前と同じように五十ポンドの小切手が同封してあつた。ただ今度の手紙には、バーガーが神のために用ゐるべき富の重荷を強く感じてゐることが付け加えられてあつた。そのころバーガーの父親がなくなり、

相當な遺産が残されたが、自分のためにその遺産を使おうと思つてはいなかつた。同封されてゐた小切手は当座の必要のためであつたが、氏はなおこの遺産の使い方について神の目的を知るために祈つてゐる。だから、中国にいる友人が祈つてもつと多くの金を、最も有効に用ゐる道があれば、事情をよく知らせてくれるようにというのであつた。

五十ポンド！それが今テーブルの上にある。はるか遠方にいる友人が、最後の米袋のこと、病院の多くの必要のことなどについて、何も知らずに、もつと必要はないかと尋ねてくれた。ハドソン・テラーが感謝と恐れに圧倒されたのも当然である。物資が足りないという理由で、それよりもむしろ信仰が不足しているために、病院の責任を引き受けてゐなかつたとしたら、どういふことになつてゐただろうか。これほどの神を持ちながら信仰が不足してゐるというのは、いったいどういふことなのだろうか。

そのころまだ救世軍はなかつたが、礼拝堂で開かれた感謝会の時の歌と喜びの叫びは、救世軍の集會のようなふんい氣であつた。もつとも病室に患者がいたために、集會を短く切り上げなければならなかつたことは、そういう集會と異なつてゐた。患者たちはこの集會の様子に耳を傾けてゐたことであらう。そこにいた男女は、それまでは空虚な異教以外には何も知らなかつたのである。「あれほどのことができる神がどこにおられるだろうか」、「わたしたちの悩みの時に神々が救つてくれたり、こんなぐあいに祈りに答えてくれたことがあるだろうか」。これが彼らが心にいだいたり、口に出したりした疑問であつた。

注

この人は、上海や崇明（フォンミン）などでテラーと
いっしょにいた有用な下僕で、その時にはりつばな信者に
なっていた。

九 陰での数年間

ああこの人々を救うため

その救いのために

滅びる彼らが生きるそのために

死になさい彼らすべてに自分をささげなさい

多忙ではあったが、また幸いなこの奉仕は、これに従事する人々に多大の影響を及ぼしていた。九か月の間に、病院からは十六人の受洗者を出し、このほかにも三十人ほどの人が寧波の教会のどれかで受洗の志願をしていた。しかし、中国での六年間、実に激しい戦いの六年間は、彼の上にそのあとを残さないうちはなかった。ハドソン・テラーの体力は急速に衰えていった。彼は父親にあてて書いている。

人々は滅びつつあり、神は奉仕を非常に祝して下さいます。しかし、わたしたちは弱つてきており、どうしても助けを受けなければなりません。

熱心で献身的な青年で、実際の必要以上を望まず、神に仕えることのみを望み、中国へ来て働いてくれる人をご存じないでしょうか。ああ四、五人の助力者がいてくれたらと思います。彼らはおそらく六か月ほどの勉強で中国語の説教ができるようになり、必要の満たされる方法も祈りに答えられて備えられるでしょう。

「人々は滅びつつあり、神は非常に奉仕を祝して下さ

る」。この緊急の事態が、一八六〇年に病人として本国へ送られたハドソン・テラーをその重い病氣と別離の苦痛からささえていた。もう一度中国へ帰れるほどじょうぶになることがないという医師たちの考えが正しいように思われる状態が続いた時にも、中国の切迫した事態が彼をささえていた。彼の魂の中で、実際に見てきた重大な必要と、それに対する強い責任感とが、変わることはない炎となつて燃え続けていた。あの滅びゆく魂にキリストを伝えるという召命感、病氣によつても、励ます者がなくても、他のどんな困難によつても、弱まることはなかった。

テラーは、健康状態の好転とともに、以前の病院の近くに住むためにロンドンの東端に落ち着き、医学の勉強にもどることができた。彼はまた聖書協会の同意を得て、ローマ字の寧波語聖書の改訂にも従事した。そしてしばらくの間、生涯の奉仕の場に中国を選んだ青年たちと、相当な量にのぼる手紙の交換をしていた。その結果、寧波のジョーンズ夫妻を助けるために、ただひとりの器であつたが彼らのうちから送り出されることになった。(注一)しかし、しだいに外部の人たちの中国への興味は薄れてゆき、テラー夫妻は、二、三の友人とともに祈りと忍耐の生活に退いた。まだ二十九歳と二十四歳の夫妻にとつて、最も愛した仕事から離れて、ロンドンの寂しく貧しい、まるでよどみ水のような地区に取り残されていることは、容易なことではなかった。しかし、隠されたこの年月になされた試練と成長とがなければ、青年の幻と熱情とが成熟して、のちの彼に見られるようなリーダーシップを生むことはできなかっただろう。五年にもわたる陰での長い年月の間に、テラーが経験

したことは、ほこりにまみれた古い荷箱が見つけれなかったら、ほとんど何もわからなかったであろう。その箱をあけると、役にもたないようなくずの間から、十二冊の小さなノートが出てきた。ノートの一冊一冊には、彼の筆でひと続きの記録がしたためてあり、一冊の欠けもなかった。古びたノートにしるされた記録をたどりながら読んでいくうちに、涙に目を曇らされる物語が明らかにされていった。

それまで知られていなかったページからは、いよいよ神と親しく、いよいよ神に依存している彼の姿が明らかにされた。ここには信仰があり、最も小さいことに至るまでの忠実さがある。献身があり、絶え間ない働きに至る自己犠牲がある。そしてさらにしんぼう強くくじけることのない祈り、すばらしく答えられた祈りがあった。しかしそこには、何にもまして一心に神に従う魂の深い長い間の訓練があった。そして、見えるところではなくて、信仰によつて歩むために召された人が、しだいに強められ深められていく姿が示されている。実に神のみに結びついた心のことばに言い知れぬ確信が秘められている。この確信こそ他の何にも増して神に喜ばれるものである。「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない。なぜなら、神に来る者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることを、必ず信じるはずだからである」。

外面的には静かな、普通の仕事の続く日々であったが、さまざまの試みや喜びが彼らの経験をさらに豊かにしていた。寧波で彼らの祝福となった小さな娘に続いて、三人の弟が生まれていた。四人の子供たちのいる家庭であったが、その経費は非常に限られており、テラー夫妻は直接に神により頼む歩みが続けながらも、しばしば試みられた。寧波での仕事のための必要を

備えたり、指導を与えたりしなければならず、たびたびの手紙の交換も必要であった。新約聖書の改訂は終わりに近づくどころか、脚注をつけるようになったために、いよいよ仕事が増大していった。これは寧波の信者にとって非常に役だつことになった。この準備の仕事はなみたいていではなかったが、神のみことばのために毎日何時間も費やすことは、この若い宣教師に少なからぬ祝福をもたらした。

彼は実に、驚嘆に値するほどの量の仕事をした。次にあげるのは、毎日テラーがおもな仕事に用いた時間を記録しているものの一例である。この記録がなければ、彼の働きはほとんど信じられないほどである。

四月二十七日

聖書改訂七時間（夕刻エクセター・ホール）。

四月二十八日

聖書改訂九時間半

四月二十九日

聖書改訂十一時間

四月三十日

聖書改訂五時間半（バプテスト宣教会集会）。

五月一日

聖書改訂八時間半（午後十時まで訪問客）

五月二日

聖書改訂十三時間

五月三日

ペイズウオーターでの聖日。朝、ヨハネ三・三三よりのルイス氏の話を聞く。午後聖餐にあずかる（注2）。夕刻は帰宅して、中国の働きのために祈る。

五月四日

聖書改訂四時間（手紙と訪問客）

五月五日

聖書改訂十一時間半

五月六日

聖書改訂七時間（重要な面接）

五月七日

聖書改訂九時間半

五月八日

聖書改訂十時間半

五月九日

聖書改訂十三時間

五月十日 日曜日

朝、王来君（ワンライシュン）（注3）とヘブル十一章の初めの部分を学ぶ幸いなひととき。ジェームス・メドーズ氏に手紙を書く。午後、マリヤとこの家を離れることのために、メドーズ氏のために、聖書改訂のために祈る。ロード氏（注4）に手紙を書く。夕刻、マタイ二十七章四十二節から「（彼は）他人を救ったが、自分自身を救うことができない」というケネディ氏の話を聞く。ああ、柔和、忍耐、愛のイエスに似ること、主よ、どうかもつとあなたに似た者として下さい。

右に言及されている会合は、このころのテラーの仕事の大きな部分を占めていた。というのは、彼が中国内陸部の伝道を目的とした超教派の委員会の成立のために、最善の努力を払っていたからである。彼は、ある時はひとりで、また時には改訂の協力者であるC・M・SのF・F・ゴー牧師とともに、いろいろな団体を訪れては、宣教地の必要を証明した。そこは長い間放置されていたが、今では旅券も交付され、内陸部での居住さえも許されているのである。どの団体でも彼のことは同情をもつて聞かれたが、これほどの大きな仕事の責任をとる準備は、どの委員会にもないことが、しだいに明らかになった。

こうしたすべてのことの反応として、当然のことながらハドソン・テラーは、一つの方向へと進んでいった。中国のいくらかの地域を直接に知っていた彼が、全中国の事情を綿密に研究した結果は、実にすばらしいものであった。この研究は、彼の友人で、バプテスト雑誌の編集者であるルイス牧師が、寧波ミッションへの関心を呼びさまそうとして、彼に連載記事の執筆を頼んだことから始まった。第一回目の原稿がすでに記事になつてから、ルイスは二番目の原稿を返して来た。返却の理由は、その記事がきわめて重要な迫力のあるもので、単に一派の雑誌に限定してしまうべきではないという気持ちからであった。さらに加筆して中国全域を扱い、中国内陸の訴えとして、公に出版するようにと、ルイス氏は熱心に勧めた。

このことから導かれてテラーは、中国各地とその周辺の属領の霊的な必要について詳細な研究を始めた。彼は寧波に在る間、身近にある問題に圧迫されて、もつと奥地の、さらに大きな必要について考えるゆとりがあまりなかった。しかし今、書

齋の壁の地図を毎日見ながら、その魂を捕えて放さぬ約束に満ちた開かれた聖書を前にして、中国内陸の広大な諸州が、彼自身が以前働いていた沿岸地方と同じように身近に感じられた。

「荷を負った心が安らぎを得られるのは、ただ祈りのみによる」というのは、たいして不思議なことではない。

しかし、真の危機は、祈りによって安らぎが得られなくなってしまう、彼が避けようとしていた仕事にいいよ引き込まれるように思われた時に訪れて来た。自分の祈りに対する答えとして、彼自身でも用いられることをあの開かれた聖書の光から知るようになったからである。彼はしるしている。

神はわたしに必要な働き人を求めさせ、わたしといっしょに行かせることを望んでおられるという自覚がしだいに強くなってきた。しかし、長い間わたしの不信仰が第一歩を踏み出すことを妨げたのだ…。

神のことはを研究しながら学んだのであるが、りっぱな働き人を得るために必要なのは、援助を求めるための手のこんだ訴えではなく、第一に働き人を押し出して下さるように熱心に神に求めることであり、人々が故国にとどまれなくなるように教会の霊的な生活を深めることである。使徒たちのしたことは、方法や手段を得ることではなく、「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」と言われたかたを信じて、行き、仕事をすることであると知った。

不信仰は、常に一貫性を欠いている。イエス・キリストのみ名によつて同労者を与えられるように祈れば、与えられるであろうということは疑わなかった。このような祈りが答えら

れて、わたしたちが出て行くための費用が備えられ、中国の未伝の地の門戸がわたしたちの前に開かれることも疑わなかった。しかし、その時わたしは、まだわたし自身のために、力と恵みを与え続けて下さることについて主に信頼することを学んではいなかった。当然のことながら、当時のわたしは、わたしとともに行く備えのある他の人を、神が保つて下さることを信じえなかったのである。わたしはこのような仕事にどうしても付きまとう危険、困難、試練の中で比較的经验の浅い信者が挫折してしまつて、彼らを全く無理な仕事につかせようとしたということで、激しくわたしを非難する者がいるのではないかと恐れた。

わたしは何をすればよいのだろうか。血のとがめを受けているような感じがよいよ強くなつて行つた。わたしが求めることを拒んだという理由だけで、働き人は起こされず、中国に向かつて行かない。かの地では何万もの人たちが、キリストのいないままに滅びの墓に向かつているのだ。滅びてゆく中国のことで、心も頭もいっばいになって、日中も安息を得ず、夜もわずかしが眠られず、健康をそこなつてしまつたほどであつた。

陰での数年にわたる果たすべき役割は全うされ、神の用いうる器は備えられた。東ロンドンの小さな家庭からささげられていたせつなる祈りは、予期していなかったがすみやかに答えられるはずであつた。

注

① ジェームズ・メドーズは、チャイナ・インランド・ミッ

シヨンの創設に三年ほど先だつ一八六二年に、中国に向かつて出帆した。彼は五十年以上もミッシヨンの一員として尽くし、人々から尊敬を受けていた。その娘のうちふたりは、中国でミッシヨンに属していた。

②当時、ロンドン西部のベイズウオーターには、B・プルームホールと結婚したテラーの妹アメリカの家があつた。

M・G・ルイス牧師は、テラーが会員であつたバプテスト教会の牧師であつた。

③王来君は、寧波の信者のひとりで、テラー夫妻の働きを無報酬で助けるために、志願して英国まで来ていた。彼はチャイナ・インランド・ミッシヨンの最初の牧師のひとりとして最も献身的に働いた人である。三十年にわたる彼の祝された働きと、この時の協力とには浅からぬ関係がある。

④寧波のR・C・ロード牧師は、米国バプテスト伝道会の関係の人であつたが、ジョーンズに代わつて呉家橋通りの教会の世話をし、メドーズにとつても大きな助けになった。ジョーンズは病氣のために中国を離れなければならなかつたが、英国へ到着する前に召天した。

一〇 神に対して沈黙する人

さきにあるものではなく

あとにあるものもない

信仰の歩みは

むなしいように見えるところを踏み

その下に岩のあるのを見いだす

J. G. ホイッティアー

ふたたび夏がめぐって来た。ロンドンの街はほこりっぽくて暑かった。テラーの顔色がすぐれないのを見て旧友のピアスが、海岸のブライトンへ来て二、三日過ごすようにと招いてくれた。彼の健康状態を気づかっていたテラー夫人は、その時夫が経験していたことを部分的にしか理解していなかったが、喜んで彼を送り出した。彼は耐えがたいほどの魂の問題を、妻にさえ十分に示すことができなかった。

彼が生涯の危機に直面したのは、その日曜日の朝、ブライトンの砂浜にひとりでいる時だった。その朝彼は、他の人たちといっしょに教会へ行つたが、救いのあかしに喜ぶ群衆の姿を見ると、耐えがたい気持ちになった。「わたしには、この囲いがない他の羊がある」——中国にいる、うせた、滅びゆく者たち、だれもその魂のことは考えない——「わたしは彼らをも導かねばならない」。主のみ声が、主の愛の笑顔が、沈黙のうちに彼を説得しようとするのであった。

神が語りかけておられることを彼は知っていた。すでに見たように、もし彼が主の御旨に自分をゆだね、導きに従って祈るならば、中国内陸のための伝道者は与えられるであろう。彼らの生活の必要については、彼は心配しなかった。彼らを召し出し、送り出されるかたは、日用のかてを与えて下さらないはずがない。しかし、もし彼らが失敗したらどうであろうか。ハドソン・テラーが直面していたのは、未知の状況ではない。彼は中国の事情をよく知っており、当然遭遇する誘惑、自分の領地に堅固な壕を築いている真の敵をよく知っていた。同労者が耐えきれなくなつて、責任を彼に問うて来たらどうなるであろう。彼は回想して述べている。

それは、まさに不信仰を通しての自己評価であつた。祈りと信仰は、人のあるべきところに落ち着かせる。しかし悪魔は、そこからできるだけ完全に抜け出さねばならぬと、人に感じさせようとしている。わたしは、人と手段を与える力は、またそれを十分にささえることもできる、遠い中国の内陸においてさえそうだとすることが、わからなかった。

その間、あの広大な救いを待望する地では、神を知らないまま毎月百万という人々が死んでいった。このことは彼の魂に焼きついていて、彼は、決意をしなければならぬことを知っていた。彼はこのようなかつとうの継続に、もはや耐えられなかった。働き人のために祈ることは比較的容易であつたが、はたして彼に、指導者としての重任を受ける用意があつただろうか。また実際にそれを受けることができたであろうか。

靈的の非常な苦しみをいだきながら、わたしはひとり砂浜にさまよい出て行つた。そこで、主はわたしの不信仰を征服して下さり、わたしはこの働きのために自分を神にゆだねた。さまざまの問題や、その結果についての責任は、ことごとく主にかかっている。わたしは主に、しもべとしてのわたしの果たす分は主に服従することであり、主のなさつて下さる分はわたしとわたしの同労者になるはずの人々を指揮し、必要を与えて下さり、導いて下さることであると告げた。すると、重荷にあえいでいたわたしの心に、たちまち平和がみなぎつてきたことは言うまでもない。

そこで、その時、わたしは二十四人の宣教師を主に求めた。宣教師のいない十一の省と、蒙古とに、それぞれふたりずつ派遣するためである。持つていた聖書の余白にこの願いを書き、何か月も失つていたような平安を心に味わいながら、主がご自身のわざを祝しておられ、わたしがその祝福の分けまえにあずからせていただく確信をもつて家路についた。

戦いは終わり、すべては平和であり、喜びであつた。ピアス氏宅へ向かつて丘を駆け上がれるような感じであつた。その晩は実によく眠れた。妻はこの驚くべき変わりようは、ブライトンに行つたためだと考えていた。実際そのとおりであつた。

一一 神につかわされた人

主により頼みなさい

そうすれば安らかに道を行くだろう

その目を堅く主のみわざにとめなさい

そうすればあなたのわざも全うされるだろう

ポール・ゲルハルト

召されて信仰の道を行く者で、思いやりに富み、力となる伴侶を持つ者は幸いである。結婚生活に関して欠けのなかった七年半の間、ハドソン・テラーは、愛する者への失望を味わったことはなかったし、片時も期待を裏切られるようなことはなかった。二十八歳の若いテラー夫人は、かよい身で四人の子供の世話に手いっぱいであったが、夫が一見不可能にさえ思われる中国内陸の伝道という大きな仕事に召されたことを知った瞬間から、テラーにとって全く新しい慰めと靈感の人となった。彼のために書き、その信仰によって彼の信仰を強め、その祈りによって彼のわざが守られるようにとりなし、実際の経験と豊かな愛の心によって、彼女は文字どおり「ミッシェンの母」となったのである。

彼らは、前に住んでいた家よりも、ずっと大きなコボン通りにある家に移った。この大きな家は、中国行きの候補者たちですぐにいっぱいになった。広すぎるように思われた広間も、土曜日の祈り会に集まって来る人々のためには、とても十分とは言えなかった。最初にチャイナ・インランド・ミッシェンの名で

銀行に預金した五十ドルは―彼の有り金のすべてであったが―この働きに参加しようとする人々の自発的な献金で、何百ドルにもなっていた。こうして最初の宣教師団を送り出す計画は、自然にできはじめていた。

さてある日曜日―テラー氏が静かに書き物をする時間の持つる唯一の日であるが―のゴボン通り三十番地にあるこの家の居間の光景を想像していただきたい。テラー夫人は、ペンを手にしてテーブルに向かっている。テラーは、彼らの心の中にある問題に全く心を奪われてこつこつと音をたてながらへやのあちこちを歩いている。ルイスから頼まれていた記事が新しい意味を持つようになっていたからである。緊急に事態を知らせる必要があるばかりでなく、神に信頼して必要を満たしていただくように努力するという、新しい方向に向かってはつきりとした歩みが始まっていたからである。「中国の霊的な必要と要求」は、彼らが祈りながら書き、書きながら祈っている中から生まれたバンフレットである。近代において神の民を動かすのにこれほど効果的であったものは他に類がない。「中国の霊的な必要と要求」が版を重ねている間に、中国へ送られるようになった人が何人いたことであろう。それによって外国宣教事業への理解を得るようになった人が、世界じゅうにどれほどいることだろう。信仰を強められ、祈りと献身の生涯を送るようにと励まされた人がどんなにいることだろうか。これらすべての人の心に隠されたことが明らかにされるまでは、すべては決してわからないであろう。実に「一語一語が祈りに浸され」一語一語が神の力によって生きているようであった。

この小冊子によつて多くの友が与えられ、多くの可能性が開けてきた。それは三週間を経ないうちに増刷しなければならなくなり、多くの手紙が寄せられて来た。左にあげるラドストック卿からのものはその一例である。

わたしはあなたのバンフレットを読み、非常に感動しました。わたしは、あなたが聖霊によつて、多くの働き人をぶどう畑に押し出すことばを語られるようにされることを信じます。愛する兄弟、さらに大きな望みを持つて下さい。百人の働き人を求めて下さい。主は彼らをあなたに与えて下さるでしょう。

しかし、最初の目標は百人でなく、二十四人であつた。今は薄れてしまつてはいるがはつきりとした字体で、テラーがこの祈りを書き留めた使い古しの聖書が、わたしたちの前にある。事の成り行きに得意になつてしまうということは全くなく、彼は成功によつてますますその責任を強く感じていた。記念すべきその冬、あちらこちらを旅行して、人々を彼と同様な神の自覚に目ざめさせたのは、神からのメッセージの重荷を負つたハドソン・テラーその人であつた。

地球の裏側での宣教活動をささえる経済的面での基礎として、信仰を語ることは、きわめて新しいことのように思われた。当時あつた団体は、普通の教派の委員会で、「信仰によるミッシヨン」とは聞いたこともないことばであつた。しかし、ハドソン・テラーは、若くはあつたが、実に生き生きと神を知ること学んでいた。彼自身書いているように、彼は、主が祈りの明確な答えとして千天に雨を降らせ、あらしの海を静め、風

向きを変えられるのを見た。彼は主が祈りに答えて、人を殺そうとしている者の手をとどめ、怒り狂っている人の暴力を静められるのを見た。彼はまた、主が祈りに答えて、病氣をとどめ、生きる望みのない危篤の人を立たせるのを見た。(注2) 主は彼の祈りを聞いて下さり、八年間余りも、彼とその家庭の働きをすべて満たして下さり、彼らでさえ気づかなかつた多くのものも与えて下さつた。実にテラーは体験を通して神の忠実さを体験してきた。それゆえに彼は、忘れることのない愛と、失望させられないことのない忠実さに信頼するようにと、人々を励まさないではいられなかつたのである。テラーは人々にこう語っている。

わたしたちが相手にしなければならぬかたは、その腕が短くて救いえず、耳が鈍くて聞きえないようなかたではなく、すべての力の主なるかたであります。その変わることにないみことばによつて、わたしたちが求め、また受けるように導いて下さり、わたしたちの口を広くあけさせて喜びを満たして下さるかたであります。主は、ご自身を信じる者が、祈りによつて神の全能の力を自由に用いえられるほどへりくだつたかたであります。しかし、この恵みの神は、故意に怠つて、滅びゆく者たちのためにこの特権を働かせることを怠る者の血を流す罪を軽視なさらないかたであることを記憶しなければなりません。神に召されて、契約を守られるその忠実さを体験していいいかたがたにとつては、遠い異数の地へ二十四人も欧州人の伝道者を、ただ神のみを見上げてつかわすことは冒険のように見えるかもしれません。長年にわたつてわたしは、この神の真実を体験するという特権を与えられ

てきました。国の内外において、陸上でも海上でも、病気の時にも健康の時にも、また危険や欠乏にひんし、死に直面した時でさえもこの神の変わらない真実を知らされてきました。ですからわたしには、これが冒険であるとは、決して考えられないのであります。

彼らの仕事は、単独の教派には荷が重すぎた。ミッションが給料の約束をしないということ自体、経験によつて神を信頼する者以外のすべてを完全に阻止していた。また、このような経験を持つ人々の間には、何物にもまさる一致があつた。テラーは述べている。

さまざまの教派の人が、それぞれ良心的にどうにもできぬという問題や相違もなしに単純に、伝道という線に沿つてともに働けるかどうか考えなければならなかつた。わたしは祈りのうちにそれが可能であるという結論を得たので、神のこゝとの全き靈感を信じ、携行して行くこの聖書の保証のみをたよつて、中国の内陸へ行くことによつて信仰を明らかにする同信の友を招き、協力を求めることにした。もちろん、数派的な考え方がどうであるかということは問わなかつた。その聖書は言っている、「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのもの（食物、衣類）は、すべて添えて与えられるであろう」と。もし神が真実を語られたことが信じられないなら、中国へ行つてその信仰を広めようとはしないほうがよい。しかし、もし信じるならば、約束はまことに十分ある。さらに保証がある。「正しく歩むものは、よきものに欠けることがない」。正しく歩むつもりがなければ、

国にとどまるほうがよい。しかし、もし正しく歩むつもりならば、保証積立金としてすべての必要とするものを持つていくことになる。全世界の金銀も、全世界の丘にいる牛も、すべては神の所有である。だからわたしたちは菜食主義者になる必要はない。

事実、もし願うならば、保証金を持つことができたであろう。しかしその必要もなく、かえつて有害だとさえ感じた。置き場所を誤つた金銭、正しくない動機から与えられた金銭は、いずれも非常に恐るべきものである。主が与えようとされる金だけがあればよい。きよめられもせず、まちがつて置かれた金を持つことはできない。パンを買うためであつてさえ、金は持たぬほうがはるかによい。中国にはからすがたくさんいる。主はもう一度からすを用いてパンと肉を運ばせることがおできになる。主は荒野で三百万のイスラエル人を四十年間もささえられた。三百万の宣教師を中国に送つていただくことは期待できないが、もし主がそうされるならばそのすべてを養われるよい方法をお持ちである。

神を直視し続けるようにしよう。神の道を歩み、小さいことでも大きなことでも主を喜ばせ、主に栄光を帰することを求めよう。これにたよつていくかぎり、神の方法によつてなされたご自身のわざが、必要を欠くようなことは決してないであろう。

テラーが非常に心を用いたことの一つはこの新しい事業が、すでにある機関へ行くはずの人や物の方向をそらせてはならないということであつた。パウロに支払うためにペテロから奪うことは、神のわざの利益にはならないであろう。彼の計画に

は、大学教育を受けていないために、他の宣教団体に受け入れられないはずの人たちに道を開くことも含まれていた。彼はだれにもチャイナ・インランド・ミッションへの参加を勧誘しなかった。もし、収穫の主が中国で働かせようとする人があれば、主は彼らの心にささげる思いを与えられるであろう。それと同様に彼は、金銭のためにも人には訴えなかった。もしミッションが基金のために予約のリストを作ったりせず、どんな勧誘もしないで、ただ祈りの答えとしてささえられるならば、既存の団体に対して、しかも彼らの決まった経路からの献金をそらす危険もなく成長できるだろう。この方法は、大いなる働き人である主に人々の注意を向けさせ、神の働きのためには神ご自身のみで十分であるという根本原則の実際的な証明になるという点で有益でさえある。

このほか、組織という面では、彼らはわずかで満足した。この事業の本国側の働きのためには、セイント・ヒルのバーガー夫妻が与えられた。実にすばらしい備えである。彼らはテラー夫妻と変わりないほど、このことを重荷としていた。彼らはそのためにも生き、テラー夫妻と同じ熱心をもつて、そのために祈り、自分たちの美しい邸をミッションのすべての利益を代表するセンターにした。この関係についてテラーは言う。

わたしが前進を決意をした時、バーガー氏が本国での代表となつた。わたしたちは互いに非常に近づけられたのだ。ミッションの命名が行なわれたのも彼の画室であつた。どちらがどちらを任命したというのでもない。ただそういうことであつたのだ。

基本的な霊的原則については、候補者と語り合い、ミッションの基盤がはつきりと理解された。バーガーのいる所で二、三の簡単な申し合わせの事項が記録にとどめられ、それですべては終了した。以下がテラーの簡単なことばである。

わたしたちは神の命令によつて、神の子供として、すべての必要を神により頼んで神のわざをなすために中国服を着用し、内陸へ行くために出て来た。中国ではわたしが指導者になるはずであつた。問題をだれが決定すべきかは、問題ではなかつた。

同様に、バーガーは本国での責任を負つた。彼は候補者と通信し、献金を受け、現地へ送金し、監査を済ませた会計報告を掲載した「臨時報告」を発行し、負債にならずに基金が許すかぎり適当な人を、働きの強化のために送り出した。この最後のことは、この働きに関心を持つすべての人の中心的な原則であつた。(注3) これを指摘してテラーは述べている。

神にとつて事前に与えることは容易であり、むしろそうすることを喜ばれる。神はわずかの金の不足のために、ご計画を行き詰まらせてしまうほど愚かではない。霊的でない方法で得た金銭は、確かに祝福の妨げとなる。

経験のみが解決しうるような多くの問題があつた。バーガーの実際的な説明がしばしば彼の心に浮かんた。バーガーは実務家であつた。彼は当時好況のどんぶり製造業の中でもトップクラスであつた。自宅の樹木と同じように、生きているものはすべて

成長することを彼は知っていた。この点に関して彼は言っている。

枝がたくさん茂る前に、木の成長を待たなければならぬ。はじめは細く弱々しい幹だけがあり、葉も少なく、根も浅い。それからだんだんと小枝が出てきて、やがて大木となるのである。ただ時間と忍耐とだけが必要なのだ。生命さえあれば、それ自体の成長のしかたで発展するだろう。

第一期の宣教師団の出発準備をしているうちに与えられた多くの祈りの答えについて、今述べることはできない。「臨時報告」第一号に、旅費といたく金として必要であった金額がすでに満たされたことを挿入しなければならないほどであった。しかしこの経験の背後には、熱い祈りがあつた。特別祈り会と断食の日はもちろんのこと、テラーの家とセイント・ヒルでは、毎週祈りの時が持たれ、毎日正午にはテラーの家で祈りがささげられていた。

人には何もなく、神にはすべてがある―これは確かに真実であるというのが、コボン通りでの最後の日々のふんい気であつた。彼ら友人たちはそこに出入りしながらそのふんい気を感じないではいられなかった。荷箱や包みの間で最後の祈禱会が持たれた。人々は、へやの中はもちろんのこと階段にまでもあふれ、すわれる物の上にはすべてすわっていた。壁にはその時もお地図が掛かつており、机の上の聖書は開かれていた。新しい使命についてテラーは書いている。

わたしたちのせつなる願いと目的は、今まで及ばなかった十一の省と中国領土に、十字架の旗を打ち立てることである。

「向こう見ずな仕事だ」と困難なことばかりを見る人々は言った。

「超人的な仕事だ」と好意的な人々は感嘆の声をあげた。

「公式の委員会も、組織もないのでは、あなたがたは遠いあの地で行くえ不明になってしまふだろう。物いりの多い時代のことだ。生活費がなくなつてしまふのも遠いことではないだろう」という人も少なくなかつた。

「わたしは子供たちを連れて行きます」。これがさまざまのこゝばに対する静かな答えであつた。

「彼らに、朝には朝食、昼には昼食、夜には夕食が必要なことを思い出すのに困難はないと思います。忘れようとしても忘れられないでしょう。わたしたちの天の父がその子に対して、地上の貧しい父親にすぎないわたしより、彼らのことを気にかけなかつたり優しくなかつたりすることは、とても考えられませぬ。主がわたしたちをお忘れになることは決してありません」。

その後の全期間を通して、同行者のひとりびとりについて考えるならば、この確信が全く正しいものであつたことが明白になる。

注

①この偉大な、しかも予言的な提案とともに五百ドルという多額の献金が送られて来た。ラドストツク卿は、テラーが一年以内に百人の働き人を与えられるようにと祈り

求めて、そのとおりの答えが与えられた時まで存命していた。

②これらの経験についての詳細は、もつと詳しいテラー伝の第一巻、特に四二九ページから四九二ページまでを見よ。本書の著者によるHudson Taylor in Early Years: The Growth of a Soul 参照

③テラーが、自分のためにも、家族のためにも、決してミッションの基金から振り出さないことは、最初から明白であった。かえって主の与えられる力に従って、貧しいけれども多くを富ませる者として、ミッションのためにささげていた。

一二 霊的な緊急事態

墓を明るくする望みもなく

人はあなたのかたわらを

暗いうちに死んで行く

ともしびを取りそれを大きく振れ

現代は漆黒のやみ

それを照らすともしびを振るのだ

エ・ボナー

新しいミッシヨンの指導者たちと、最初の働き人たちの多くが、背後からの力にささえられていたことは、その後の二、三年の記録を見れば明らかである。彼らの特長であった霊的な真剣さと、彼らをあらゆる困難と試練の中を通り抜けさせた極度の真剣さに、非常に強い印象を受ける。彼らには主イエス・キリストへの真剣な愛があった。彼らが新しく、より深く、み苦しみにあずかることによつて、主を知る特権を光榮と思つたのは、この愛のゆえであつた。また彼らには、周囲の滅びゆく魂に対する切迫した愛の真剣さがあつた。現在、救いを要している滅びゆく魂について語ることは、時代おくれに思われるかもしれない。しかし、ヨハネによる福音書三章十六節の神学は世界のすべての知恵と力をもつてしてもできないことを、信者を通して全うする原動力である。

神はそのひとり子を賜つたほどに……愛して下さつた。そ

れは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。

今の世は宣教師としてさえも、もつと豊かな富を得、教育を受け、旅行ができ、居住の便宜を得ることが出来るかもしれない。しかしはたして今日のわたしたちに、わたしたちの前を歩んだ人たちを動かしたのと同じ迫られる気持ち、深い内的な自覚があるだろうか。主イエス・キリストに対する同じような激しい愛、親しい愛を持つているであろうか。もし持つていなければ、これは何ものによつても補うことのできない損失である。

青い海路なき海を越えて

神に仕えんとして小さき群れは行く

荒々しい水の広がりを超え

インマヌエルの救いのみ名を伝えんと

遠き支那の地へ行く

彼らは東の兄弟からの血の叫びを聞いた

そこには神なく死んで行く人が

毎月百万もいるのだと

神のほかに助けはない

彼らは遠い地での必要を

父のみにのみ求める

世界とそれに満ちるものはみな主のもの

地と天にあるすべての力も主のもの

彼らは弱いけれど強く

貧しいけれど富んでいる

彼らは主にすがっているからなのだ

これ以上に何が必要だというのだ

彼らは兄弟からの血の叫びを聞いたのだ

そこでは神なく死んで行く人が

毎月百万もいるのだと

八百トン足らずの船でする航海は、決して楽なものではなかった。しかし、あらかじめ彼らは、安全のためばかりでなく、船員たちに対してみことばを祝して下さるようにと真剣に祈っていた。最初の一日は船室の整理にさかれたが、それから中国語の学びが開始された。午前中はティーラーが、午後からは夫人が担当して教えた。生徒たちが船酔いで倒れてしまい、教師たちが給仕の仕事をしなければならぬ日も何回あった。しかし彼らはみなよい船乗りであった。若い人たちが船に慣れるのには、あまり時間がかからなかった。実際彼らは若かった。彼らの指導者でさえ三十四歳で、この集団では相当の年長者であった。小さな船の狭い船室で、漢字の試験が行なわれた。この乗客たちが自分の仕事にどれだけ打ち込んでいるかは、船員たちにはすぐわかった。彼らを見る目は、学んでいる時にも、くつろいでいる時にも鋭かった。宣教師たちは同船者が航海を楽しめるように最善を尽くして、祈り、待った。そのうち、船員たちのほうから集会を開くように求めてきた。神のわざが始められ、船員の大部分が回心するという結果となったのである。そのころの手紙は、ミッシェンの開拓者たちが魂をキリストにかちとるためにのみ生きていたことが明らかにされている、すばらしい記録である。といつても彼らに全く誤りがないかったというわけでもない。祝福をはばんだ失敗のことも書いている。これらの失敗は、なんでもないこととして見過ごさ

れたのではなく、常に事実が追求され、真実の告白がなされ、主にある交わりが回復されるのであった。

大敵「空中の権をつかさどる君」は、この集団の力を破壊できなかったもので、彼らを船もろともに沈める決意をしたかのように、支那海を航行している間じゅう、船はあらしに激しくもまれた。次から次へとやって来た台風のために、十五日の間、船は難波するばかりにもみぬかれ、苦しめられ続けた。彼らが目的地に到達できたのは、全く奇跡だというほかはない。のちにティーラーは、この間の経験をしるしている。

事態はまことに普通ではなかった。船の揺れ方は恐るべきものであった。マストも帆柱もたれ下がって、残ったただ一つの帆さえも破れはじめ、ピストンのように中心の帆柱を乱打していた。前甲板から後甲板までは、切れめのない海であった。波の響き、鎖のがらんがらという音、裂けた帆の鋭い音などが混じり合って、命令の声を聞くことさえほとんど不可能であった。

それから三日間、危険はさらに増すばかりであった。船には浸水が早く、男も女も排水に努めたが、火はみな消えてしまい、調理をすることも不可能であった。しばらくは飲み水さえもなかった。しかし、このすべてを通して、祈りはすばらしく答えられた。ひとりの死亡者も負傷者もなかった。思いをはるかに越えた平安のうちに保たれ、子を気づかう母親さえ―彼女が書いていっているように―かつてないほどハバククの経験の中に導かれることができた。

「しかし、わたしは主によって楽しみ、わが救いの神によつ

て喜ぶ」。

上海に着いた彼らが、中国服を身に着け、家を求めて内陸に向かった時に与えられた祈りの答えも、同様に驚くべきものであった。屋形舟で旅をしたために、婦人や子供たちは、通過する町々の群衆の好奇の目にさらされないですんだ。その間、何人かの青年たちの落ち着く家を見つけようと努力したが、待ち受けているものは失望ばかりであった。何度もうまくいった、と思われながら、交渉は失敗し、一団はもとのままの状態で杭州に向かわねばならなかった。杭州にはすでに、二、三の宣教師の家族が住んでいた。もしこの大集団の到来が反対運動を引き起こすようなことになれば、先住の人々にとつても、新来の彼らにとつても、重大な危険を意味していた。彼らはどうすればよかったのか。秋も深まり、水上で過ごす夜は非常に寒かった。彼らのうちの何人かは、すでに多少とも病気になるていたし、舟で働く人たちは、冬が来るから早く帰りたいと騒いでいた。ハドソン・テラーは郊外の静かな所で舟を降り、必要に迫られている家を探しに行つたが、この時ほど強く責任を感じたことはなかった。

テラー夫人も、夫と同様に鋭敏に事態の急を悟つてはいたが、静かな確信に満ちた信仰をもつて、祈りのために若い宣教師たちを集めた。その時彼女は、日課として続んでいた詩篇から与えられた慰めについて語った。「だれがわたしを堅固な町に至らせるでしょうか。だれがわたしをエドムに導くでしょうか。：われらに助けを与えて、あだにむかわせてください。人の助けはむなしのです」。彼らはともにこのみことばを読み、続いて熱心な祈りをささげた。やがてこの苦しい不安な時

は、いつまでも記憶される交わりの時と変えられていったのである。

外にいた舟の人たちが動き出したのは、テラーの声を聞いたからであろうか。こんなに早く帰つて来ることでできたテラーは、どんな知らせを持つて来たのであろうか。「彼らが呼ばないさきに、わたしは答え、彼らがなお語っているときに、わたしは聞く」。確かにそのとおりである。すべてはよかった。一軒の家が備えられて、彼らを待っていた。杭州の宣教師のひとりが一週間ほど留守にするので、気持ちよく整えられたその家をテラーの一団が自由に使つてもよいとも言ひ残して行つたのだつた。静かな通りに面しているその家からは、人目につかずに舟まで行くことができた。その晩、疲れた旅人たちは感謝しながら、この大都市でくつろいだのである。

いつものことながら困難は少なくなつたが、それから二、三日のうちにテラーは自分たちの家を確保することができた。その大きな家は、以前は役人の家であつたが、いつか何家族もが住む雑然とした普通の建物になつてしまつていた。新しい家主は、建物の一部しか所有していなかったが、うまく改造できそうであつたし、その屋根の下であまり目だたずに宣教活動を開始することもできた。人を愛する者の心にあるものは、多くを語らなくてもあふれ出るものである。グループの最年少であつたミス・フォールディングは、すでに婦人たちに話を通じさせられるほどになつていた。十二月の中旬になつてから彼女は書いている。

住居を少しばかり住みよくするために働いていました。しなければならぬことはいくらかでもあります。テラー先生と

青年たちは、木わくに紙を張った天井を工夫して、冷たい外気を防ぐようにしました。二階の天井はよく故国の礼拝堂で見られるようなものです。もちろん、まだ相変わらず混乱は続いています。とにかくやっています。そのうちに、いつか落ち着くと思います。

家に住んでいた人たちは、来週引き払います。あの人たちがここにいたのは、ほんとうにうれしいことでした。彼らの多くは、中国語の祈りの時間に来て熱心に耳を傾けていました。まだ外部を訪れることはできませんでした。けれども毎日この婦人たちといっしょに、読んだり、話したりしました。彼女たちもそれが好きなようでした。わたしはこの婦人たちのひとりに非常に期待しております。

クリスマスまでに、日曜の集会には、五、六十人の熱心な聴衆が与えられるようになった。またこの間にテラーは、少なくとも一度は伝道旅行をしている。彼とミドーズとは隣接の蕭山市に福音宣教の機会を得て、小さな家を一軒借りることができた。そこに新来の宣教師を何人か住まわせる考えであった。彼らがどのような気持ちでこの大仕事に当たっていたかは、バーガーへの手紙に示されている。

現地の郵便の状態は非常によく、手紙や金銭を内陸に送るのにも不自由のないことを喜んで下さると思います。簡単には行けないようなこの国のどの省への送金にも、特別の困難はないと思います。いちばんの奥地から港町に手紙を出すことも自由にできます。こうした通信には、時間もかかり、費用もかなり高くなりますが、比較的確實です。それで奥地で

の働きの道が開けているのがわかります。

天井もなくて、壁や窓の少ない家に住むには、相当に寒い気候です（十二月四日）。縦六尺、横九尺のわたしの寢室の壁には、すきまがあつて、シーツでふさいでいますが、換気は全く自由なものです。しかし、こういうことはあまり気になりません。周囲には貧しく、やみの中にいる異教徒たちがいます。ひとりも宣教師がない大都会、人口の多い町々、無数にある村々、そのすべてが恵みへの手段を与えられていません。わたしはこのような人たちを忘れたり、多少の不便を恐れてこの人たちのために何もせずに、滅びるままに任せたりする心の状態をうらやみはしません。神に対し、わたしどもの仕事に対し、忠実なものにされますように。

その間、杭州にいて彼は、さばききれないほどの仕事をかかえていた。中国の新年とともに、診療所には一日に二百人もの患者が群がり、日曜日の礼拝にも同じくらいの人数が集まっていた。一八六七年の初めに、本国から最初の増援の人たちが到着した時にも、テラーは忙しすぎて、何時間も彼らに対して何もできなかった。その時彼は、中庭のテーブルの上に立って患者の群れに説教をしていたので、ミドーズに連れられて一隊がはいつて来た時、心からの歓迎のことばが叫べただけであった。新しく到着した人々は、この状態を見て満足以上のものを感じ取った。ジーン・マカーシーはそれからまもなく、テラーのかたわらで医療のためのおもな助手になった。そのころ同労者たちは、外的な困難の中で、彼らの理想とするところを実にすばらしく体験している愛する指導者と、とにかく近くに

いて働くことができた。それから三十八年のうちに、マカーシーは西部中国から書いています。

わたしが彼について考える時、彼は今まで知ってきたとおりの人である。親切で、愛に富み、自分以外のだれに対しても思いやりがあり、行くさきさきで祝福となり、接するすべての人に力となり慰めとなる。あらゆる点で宣教師の変わらざる模範である。

このような初期の働きにおいても、自分の霊的な生活の失敗から、回りのすべての人に対して批判的になった者がいた。航海中に問題を起こす原因になったものは、なお消えなかった。その人たちの非難は、テラーはもろろんのこと、テラー夫人をも少なからず苦しめた。彼女はバーガー夫人にさえ、このことを何か月もあとまで知らせなかった。彼らは愛と忍耐によって、問題を解決するように努力していた。夫人が詳細を書いたのは、セイント・ヒルからの質問に答えてであった。

どうぞわたしたちのためにせつにお祈り下さい。今、神さまの恵みによつて保たれることがほんとうに必要です。わたしたちはサタンの陣営で彼と戦うことになりました。主はわたしたちをほうっておきはしないでしょう。もしわたしたちが自分の力でここにいるのだとすれば、なんと愚かしいことでしょう。しかし、わたしたちとともにいますかたは、敵のすべてよりも大いなるかたです。わたしは、もしわたしたちの仲間の姉妹たちの間に、不一致の種がまかれるようなことがあれば、とても残念に存じます。これがわたしの恐れている

わざの一つなのです。Zの問題がどうなりますか、わたしには考えられません。わたしが知っておりますただ一つのこと、は、イスラエルの望みであるかたは、わたしたちを見捨てられることがないということです。「なぜZが来ることを認められたのだろう」と尋ねたい誘惑にかられそうになります。たぶんそれは、わたしたちのミッションが歩みの初めに、正しい基礎の上に確立されうるためでありましょう。

やがて夏が来て、暑さがきびしくなるにつれて信仰と忍耐をとためすために別の種類の悲しみがやって来た。しかし、その間にも魂は救われ、今日までに千五百の教会が立てられていった。最初の洗礼が五月に行なわれた時、テラー夫人はバーガー夫人に書いています。

愛する主はおそらく、わたしたちが自分の仕事に神が豊かな祝福を与えていて下さることを忘れて、得意になってしまわないために、悲しみを必要としている、とお考えなのでしょう。

しかし、こう書いた彼女自身も、この暑い季節に襲つて来ようとしていた、耐えがたいまでの悲しみの経験を、ほとんど予期してはいなかった。彼らの子供たちの中で、寧波で生まれた娘は、いちばんかわいく、賢かった。彼女はやがて八つになろうとしていた。弟たちに対してももちろんよいねえさんであったし、よく働いて彼らを助けていた。主イエスに対しても、回りの人々に対しても、愛に満ちている彼女だった。しかし、暑い

日が長く続いているうちに、このグレイシーはだんだん元気がなくなってきた。子供たちをいくぶんでも暑さをしのぎやすい丘に移したが、その時には小さな生命はもうどうにもならなくなっていた。荒れ果てた古い寺院の中で死んで行く子供のかたわらにいて、テラーは、自分と最愛の妻にとつて、このことが何を意味するかということをはっきりと理解しようとしていた。バーガーにあてて彼は書いている。

この土地を知り、人々のことも、気候についてもよく知つていながら、自分とともに妻子をもこの働きのためにささげたことは、むだなことでもなく、思慮のない行動でもありませんでした。そして、全く足りない者でありながら、単純な気持ちで敬虔にお仕えし、またお仕えしようと願つてきた神ある程度の成功は収めてきたのですが、今は、今もわたしたちを離れなさいません。

テラーは、母親に対しては、もつと自由に書いている。

愛する小さなグレイシー、朝ごとに聞いたあの子の優しい声を、ほんとうになつかしく思います。朝起きた時、わたしたち最初にあいさつする声、日中も夕方も聞く声でした。踊るようにしてわたしのそばにいたあの子といっしょに歩いた道を、今はわたしひとりで散歩をすると、胸が苦しくうずきます。「あの小さな手の圧力を二度と感じられず、あの明るい目の輝きを二度と見られないということがありうるだろうか」という考えが、心に浮かんできるとは、しかし、あの子は滅びてはいません。わたしはあの子を取りもどしたいとは

思いません。他の子供でなくてあの子が取り去られたことを感謝します。あの子はわたしたちの生涯の光ではありませんが、わたしはあの子の遺骸ほど完全で美しいものを見たことがないように思います。すばらしく弧を描いたまゆ毛の下の長い絹のようなまつげ、デリケートに整った鼻、小さく優しく語りかけているような口、清らかな白い顔、すべては心に深く刻まれて記憶されています。それからあの子の小さな中国服の上衣、胸の上で組み合わせ、一輪の花を持った小さな手、ああーそれは過ぎ去つてゆく美しさでした。わたしたちの目から永遠に消え去ることのいかにもむずかしい美しさでした。

わたしたちのためにお祈り下さい。時としては、わたしたちの仕事に関連した内外の試みに、圧倒される思いがします。しかし、主は言われました。「わたしは決してあなたを離れず、あなたを見捨てない」。「わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」。それでよいのです。

この悲しい経験を通してテラー夫妻は、中国の内陸に福音を携えて行く仕事に新しい献身をしたのである。その年の終わりまでに浙江省のおもな町を、みな訪問した。隣の省の南京でも働きが始まり、二十四日間も旅行しなければ行かないほど離れた諸都市でも、ミッシェンのメンバーが働いていた。杭州の教会も王来君を牧師として、すでに固められていた。ふたたび春がめぐってくるころには、ミッシェンの指導者たちは、その働きから離れることができた。

当時の中国で伝道所を開くことは、生命の危険にさらされていることを意味していた。暴動が起こるのはいつものことで、伝道のためには通らなければならぬ一段階のように思われた。片足を失い、松葉づえがなくては歩けない宣教師候補者に向かつて、テラーが次のような質問をしたのも当然であった。「もし中国で暴動が起こり、逃げなければならなくなった時、あなたはどうかしますか」。

「わたしは逃げることは考えませんでした」。彼は静かに答えた。そして、「わたしは「足なえまでも獲物をとる」のだと考えていました」と述べた。

事実、この人は、時が来て、困難な情勢下に置かれる特権を与えられた時、このことばを地で行なったのである。この試みを契機にして温州に福音が伝えられることになった。彼の持ち物をすべて奪ったうえに、松葉づえまでも取り上げてしまった暴徒は、「なぜ逃げないのだ」と叫んだ。「逃げる！」彼は微笑をもつて答え、「一本足でどうして逃げられるか、知りたいものですよ」と言った。勇気に満ち、親しみのあふれた彼の応待に暴徒たちの態度は和らぎ、そこにはしばらく前とはまるつきり異なったふんい気がみなぎっていった。目には見えない祈りの力が、その日をかちとつたのである。

長身で、もの静かなスコットランド高地の人、ジョージ・ダンカンが初の永住宣教師として南京入りしたのも同じような気持ちからであった。彼はそこで宿屋を見つけれなかった時、日中は街路や茶店で群衆と接して過ごし、夜は鐘楼の囲いのない屋根裏で、ねずみや音色の深い鐘とともに過ごして満足していた。お金が残り少なくなつてくると、ただひとり彼に同行して

いた中国人コックがどうしたらよいかと尋ねるのだった。町を離れるほうがいいのだろうか。しかし、もしそうするならば、やつと見つけた小さなへやにもどることはおそらく不可能になるだろう。宣教師ダンカンは「やりましょう。わたしたちは『主に信頼して善を行なう』べきですから。そうすればこの国に住んで平安を得るのです」と語るのだった。

何日かが過ぎた。テラーは、土地の銀行を通しては南京へ送金できないことを知った。ダンカンのことを心配して、事態を收拾するために同労者の宣教師を南京に派遣した。一方ダンカンのほうでは、この時までには喜んでささげたコックの所持金までも使い果たし、ふたりのもとにはただのドルも残っていなかった。しかし、ダンカンはいつものように説教に出かけ、心配する協力者に、「主に信頼して善を行ないましょう。彼の約束にはなお変わりがありません。そうすればこの国に住んで安きを得るのです」と言うのだった。

一方、ラドランドは、大運河が異常に減水したために船では進めなくなつて、途中から陸路をとつて目的地に向かった。そのほうが船で行くよりも数日早く到着できたからである。彼がそこへ着いた時には、ダンカンたちの食物だにも、財布にも何もなくあった。ダンカンはどこまでも続く街路を歩きながら、一日じゅう説教して疲れ果て、空腹をかかえて帰途についた。その時、中国人の助手が一目散に駆け寄つて来た。そして息せききつて「先生ーもうだいじょうぶです。ラドランドさんーお金ーおいしい夕食ー」と叫んだ。「けさ言ったではありませんか」。ダンカンは彼の肩に手を置いて優しく答えた。「生ける神に信頼することは、いつでもまちがいのないことなのです」。

テラーは、青年たちを開拓伝道につかわすだけでは満足しなかった。彼にも、夫人にも、どんな危険にでも向かつて行く備えが十分にあつた。うちなる霊の衝動は、少なくともミッションの他の人たちと同じくらい強かつた。彼らが十六か月の定住生活と奉仕ののちに、杭州を離れることは容易ではなかつた。教会にはすでに五十人の受洗者があり、求道者の多くはまことに有望であつた。とはいえ協力者としてはマカーシーがおり、婦人たちのためにはミス・フォールディングがおり、王来君牧師の伝道は、いよいよ前進することであろう。しかし他方では、孤立無援のままの開拓伝道者もあり、いのちのことは全然知らない市、町、村も多い。杭州を離れることは、家庭をこわし、子供たちを一時、舟の上に住まわせることになるが、彼は春が来るとすぐに出発した。南京のダンカンに協力するつもりであつたが、途中で与えられた場所にとどまる可能性も十分にあつた。

二か月にわたる水上生活ののち、旅行者が落ち着けた所は、揚州市であつた。蘇州市では、開拓を始めたばかりのミッシヨンの一員であるヘンリー・ゴルドンとともに三週間過ごし、それから大運河と揚子江の合流点にある鎮江に至つた。テラーはこの地の戦略的重要性をみてとつて、ここで家を手に入れる交渉を始めた。のちに家は手にはいつたのだが、交渉が長びきさうであつたので、彼らは揚子江を越えて旅行をし、大運河の北部に四、五キロほど進んで行つた。こうして、かつてマルコ・ポーロが総督をしていた有名な町揚州に着き、三十六万という人口をもちながら、キリストの証人がひとりもない、その城

壁に到達したのであつた。テラー夫人はバーガー夫人にあてて書いている。

あなたがたがご自身で長期の旅行をなさつたのでなければ、一週間前の月曜日のわたしたちの気持ちを理解していただくことはとても不可能と思います。その時、へやというへやにみな、どんどん雨が漏る始末の、不便な水上生活から、中国で第一級のホテルに移つたのです。中国の宿泊設備についてよく通じている主人でさえ、それまで見たこともないようなホテルだと申すほどでした。このホテルは揚州市内にあります。

ホテルの親切的な支配人と、関心を持つようになった訪問者たちの群れは、最初から前途の祝福を約束するものであつた。知事が好意的な発言をしてくれ、七月になると家が入手できて家族は移り住んだ。暑さはすでに相当なきびしさになつていた。八月には静かに過ごせるようにと、彼らは願つていたが、患者と訪問者はあとを絶たなかつた。町に住む外人家族の存在は、相当に目だつた。特にテラーが有能な医者であることがわかつてからはなおさらである。テラー夫人が快く中国語で話し、気持ちよくふるまう態度が、婦人たちをひきつけて、杭州にいた時と同じように人々は福音に対して心を開いているように思われた。

しかし、敵もその働きを休んではいなかつた。このような悪魔の陣営への進撃が妨害されないわけはなかつた。この町の学者連中は、集会を開いて彼らを妨害することにした。外人たち、特にイエスの宗教を宣伝している連中は、最も悪い反乱罪を犯

しているという無署名のビラが、町じゅうに張り出された。まもなく、宣教師たちには人々の態度が変わりつつあることがわかった。好意的な訪問者は、戸口の回りに群がるやじ馬連中に所を譲り、さらに新しく張り出されたポスターが、ますます炎に油を注ぐことになったが、テラーたちは忍耐と親切な態度によつて幾度も暴動を避けることができた。数日の間テラーは、家の入り口からほとんど離れられなかった。そこで彼は、人々を静め、質問に答えていたのである。あらしが終わつたと思われたころ、ラドランドの家族と、ダンカンが到着して、家の中にはあふれるほどの感謝がみなぎつていた。八月のたいへんな暑さは、豪雨によつて破られ、これが群衆を散らすのに大きな働きをした。しかし、休息は長くは続かなかつた。鎮江から揚州に外人がふたり訪れて来た。彼らは宣教師たちのように中国服を着ているのではなく、そのままの洋服姿であつたので、少なからぬセンセーションを引き起こした。学者連中にとつて、これはそのまま見過ごしにできぬチャンスであつたので、彼らはまた忙しく動きはじめた。この訪問者たちが、すべてが静かであるという印象をもつて町を出て行くやいなや、あらゆる方面から子供がいなくなつたといううわさが立ちはじめた。少なくとも二十四人の子供が残酷な外人たちのえじきになつたと人々は信じた。

「勇気を出せ、かたきを討て、やつつけろ、滅ぼせ、ぶんどり物は多いぞ！」

それから四十八時間たつたー鎮江に近づいていた一そうの舟の上で、傷つき、苦しみながらも、落ち着きを失わなかつた宣教師たちが、圧倒されるばかりのあらしの中でも、不思議に守ら

れたことを神に感謝していた。この時、テラー夫人は書いている。

神さまはわたしたちを守り通して下さいました。これからのち、もつと主をたたえ、ご栄光のために生きられますように。言つてみれば、もう一つの台風を経験したようなものです。もつとも二年前の実際の台風の時ほど長くはありませんでしたが、けれども、少なくともわたしたちの生命の危険は同じであり、恐ろしさはもつと大きなものでした。わたしは神さまがこの経験を用いて、ご自身のみ栄えを現わして下さいことを信じます。そして、福音の前進のために役だつようと願つております。

「臨在の救い主」ー暴徒たちは、これほどの静けさと力強さの秘密をいくらかでも理解できたであろうか。彼らは、なんであるかは悟れなかつたが、何ものかによつて恐れを感じ、最悪の暴力行為には出なかつた。死は近づきはしたが幾度か避けられた。土地の警察に援助を頼みに行く途中、群衆の激しい怒りにさらされていたテラーも、占領された家で攻められ、火事に直面していた、彼が残して行かなければならなかつた人たちも、ともに見えざる神のみ手に守られていた。

しかしながら、それは非常に苦しい数時間であつた。二階のへやに子供たちと婦人たちとを避難させていた母親の苦しみであつたー放火されたため、その二階からも、ついには迫り出されてしまつたのだがーまた、遠くで動けなくなり、破壊に夢中の暴徒どもの叫びを役所の衛門でただ聞いているばかりの父親

の苦しみであつた。外面的にはなんの危険もないように、テラー夫人は静かにこの恐怖の場に臨み、落ち着いた態度とりゆうちような中国語で、死の危険を免れたのは一再ではなかつた。しかしながら、その時の彼女の心は、再び会えないかもしれない愛する夫のことを心配して、引き裂かれるばかりであつたのだ。

揚州の家が修理されてもどれるまでには、長い困難な、交渉をしなければならなかつたが、彼らが帰ることがゆるされた時、一行を受け入れるための盛大な祝いが準備された。ミッシェンの指導者が次のように書くことができたのは、深い感謝の気持ちからであつた。「この事件の結末は、内陸における働きのために非常に役だつことになるであろう。これはほとんど確実なことであろう」。しかし、実際に人々の疑いの気持ちをしだいに解きほぐしていったのは、宣教師たちの親切な態度と家庭生活とであつた。行動はことよりも雄弁である。近所の人たちは、あのようなことがあつたのになんのためらいもなくテラー夫人が、もう一度子供たちを連れて、うるさくて落ち着きのない環境の中に帰つて来たのを見て、何か考えざるを得なかつた。彼女はセイント・ヒルの愛する友にあてて書いている。

神はこのことにおいてもまた、わたしの心の願いをかなえて下さいました。生まれてくる子供が安全に守られるならば、他のどの場所より、この町の、この家の、このへやで生まれてくれればよいと感じていました。

四番目のむすこの誕生は、暴動で破壊されたすべてがすぐに回復されたのと同じように、非常に喜ばしい印象を与えた。しかし、それにも増してすばらしい償いがあつた。それは、初めに彼らを町に受け入れてくれた宿の支配人と、暴動の時から好意的に事を図ろうとしてくれたふたりの人が、この時キリストへの信仰を告白し、受洗を待っていることであつた。

「種を携え、涙を流して出て行く者は、喜びの声をもって刈り取る」。

注

①一八六六年五月二六日、CIM (チャイナ・インランド・ミッシェン) の最初の集団の出発についてのE・グラタン・ギネス牧師の詩から。

②すでに何年か中国にいたジョージ・スコット氏が、温州市と温州県に福音を植えたのは、幼いグレースの死後まもなくであつた。その教会の会員は、陪餐会員をすべて含めて八千人に及んでいる。

地と陰府（よみ）が力を合わせ わたしと戦う

でも神の力はわたしの側にある

イエスこそすべてなるかた

わたしはこのかたを持っている

W・T・マットソン

中国においてこの小さなミッションの上にあらしが吹き荒れていたが、英本国においてバーガーがみまわれていたあらしは、さらにきびしいものであった。揚州の暴動は、英国議会と、国内で、全く信じられないほどの批判を巻き起こした。正確な事実にも基づかないで一般の新聞は、中国との戦争の危険に迫り込んでいと述べて、宣教師たちを激しく攻撃した。宣教師たちが銃砲をつきつけてまで中国の宗教を変えさせようとし、その戦いに英国の砲艦の援護を要求したと言うのである。もしこのような批判が根拠のあるものだとするならば、テラーもその同労者たちも、それにはあまりかかわりがなかったことは言うまでもない。領事館当局は、この事件を宣教師たちが予期もせず、希望もしていない方向で取り上げていた。当局者たちは外務省の指示に基づいて、この機会をできるかぎり条約権の強制に利用しようとしていた。しかし、不当とは言えない英国大使の要求が、まだ提出されないうちに、英国の政府が変わり、事態がますます複雑になっていった。夫を助けるために

テラー夫人は、バーガー夫妻に対して詳細を明らかにした手紙を書いた。彼女の結論によると、

世界のきびしい批判や、それ以上に苦しい信者の兄弟による誤解について、なすべき最善のことは、わたしたちの仕事そのまま続けて、神ご自身にわたしたちの立場を弁明していただくことだと感じております。けれどもあなたにはわたしたちがどのように行動し、なぜそうしたかを親しく知っていただく必要があります。しかしながら、総領事メドハースト氏、ならびに彼を通してラザフォード・オルコット氏が、わたしたちが願いませんのに、この事件を取り上げたという事実を、活字にすることは望ましくないと存じます。新政府の外務省は、前政府が訓令をした政策のゆえに、現地の人々を調べております。ここでわたしたちが、さらに彼らの負担になるようなことを言つて、彼らの立場をいよいよ困難なものとすることは、慈悲のない行ないでもあり、また恩知らずの行ないでもありましょう。

揚州で静かな生活にもどつてからのちも、ずっと続いていたあらしを切り抜けるためには、祈りと忍耐とをもつてするよりほかはなかった。四か月ほどのちになってバーガーは、セント・ヒルから書いている。

揚州事件は上院で問題になっています。この国での反響はご想像になれないほどです。でもこれらの何物によつても動かされることはないと言えることを感謝します。神がわたしたちをこの働きに召して下さったことを信じます。ここからの

がれたり、困難に負けてしまうことは、わたしたちのためではありません。元氣を出して下さい。戦いは主のものです。

このような危機にあつて、苦痛を倍加したのは、ミッシヨンの中の何人かの者の不満が最高潮に達して、最初から問題のもとになつていたこの人たちに辞任を求めなければならなかつたことである。この人たちの話すことが本国での誤解にさらに拍車をかけ、バーガーの賢明で強力な指導にもかかわらず、この事業から関係を断つようになつた友人も少なくなかつた。このことは新聞のきびしい論調とともに、ミッシヨンの収入に大きな影響を及ぼしていた。ミッシヨンの指導者のうえに加えられた試みは、少なくとも小さくもなかつた。暴動後、まもなくテラーは書いている。

わたしたちのためにお祈り下さい。多くの恵みを必要としております。毎日の訪問はどれほどの忍耐と寛容とを要することでしょうか。国籍も、ことばも、感情も異なつた多くの人たちの間で起こるさまざまの困難や誤解に対して適切な態度で臨むためには、どれほどの知恵を要することでしょうか。想像なさるのも困難なことでしょう。主がわたしに、ありのままを見ることのできる目、明確な判断、知恵と優しさ、忍耐強さ、ゆるがない目的への自覚と信仰、責任を最もよく果たすために必要とするキリストのような愛を与えて下さるようにとお祈り下さい。始まつたばかりのこの大事業のために、十分な物と適当な器とを備えて下さるよう祈つて下さい。

このような状態の中でも、ミッシヨンの目的としている開拓伝道は、停止しなかつた。揚州事件が結着する以前に、テラーは大運河を北上し、北部の各省に向かつて行く拠点として、ある都市へ旅行をした。メドーズは寧波の仕事を他にゆだねて、鎮江から西に向かい、最初の内陸の省である安徽省への進出を指導できるようにした。安徽省には二千万もの人が住んでいるが、新教の宣教師はひとりもいなかった。人材と物資とが増強されるようにという祈りは答えられなかつた。そればかりでなくかえつて本国からの送金は目に見えて減少していった。彼らにはわからなかつたが、この事態に対する備えが何もなかつたわけではない。のちに彼らもそれに気づいて励まされたのであるが、試みが来るのをゆるされるかたは、同様にご自身のすばらしい方法で必要をも備えられたからである。すでに英国では一文なしの人―文字どおり空の鳥や野のゆり以上の資力があるわけではない―が、祈りと信仰によつて二千人もの孤児の家族を養つていた。この人数は、のちに倍増したが、一セントの基本財産があつたわけでもなく、援助を訴えて祈るのでもなかつた。彼はその必要については主の約束により頼み、天の父以外のだれにも必要を知らせることをしなかつた。この人、ジョージ・ミューラーの働きには明らかに神のご忠実さが示されていた。その信仰はハドソン・テラーやその他の多くの人々に多大の影響を及ぼすことになつた。このブリストルの神の人は、非常に心の広い人で、地上のもつと暗い地域での、直接的な宣教活動に、なんらかの役割を果たさずには満足できなかった。

彼は中国を含む多くの国で福音宣教を進めうるために、資金を求めて祈った。そしてなみなみならぬ困難の中で、主からの助けを伝達する役割を果たす喜びを味わっていた。それは、主が特別な方法で彼に語りかけられて、他の人が見落とす働きや、必要が多いのにもかかわらず十分な備えのない働きに彼を用いておられるように思われた。例をあげるならば、揚州の暴動が起きるとすぐ、英国にニュースが伝わるよりもずっと前に、ミュラーの心には、チャイナ・インランド・ミッションに経済的な援助をする重荷が与えられていた。彼は以前にも寄金をしていたが、暴動後、一、二日のうちにバーガーに、祈りのためにリストに書き加えるべきミッションの他の働き人の氏名を知らせてくれるようにと、依頼の手紙を書いている。バーガーは、何人かを選んでくれるようにという意味で、六人の氏名を送ったが、ジョージ・ミュラーは、『その全部を選んで祈りのリストに載せたのである。

そんなことがあつてから一年ほどのち、中国で資金の不足が最も深刻に感じられていた時に、ジョージ・ミュラーは、また手紙を書いて援助を拡大させたのである。この手紙がまだ郵送中に、テラーは、十二月分の必要を送りながら、働き人のひとりに書いている。

この財政年度の上半期は、昨年より献金額が一千ポンド減少しました。わたしのところには今、コックはいません。わたしは月ひとり一ドルで食堂から食事の仕出しをしてもらうほうが安上がりだということがわかりました。…わたしたちの働きを後退させることがないように、信仰をもつて資金のために祈りましょう。

自分をもつと不便になることは、彼にとつてたいしたことではなかったが、働きを縮小しなければならないようなことになったら…それはことばに表わしえない苦痛である。がしかし、感謝なことに、彼らには全然その必要がなかった。この時には、年が暮れる前に、ミュラーから次のような手紙が彼のもとに着いていた。

愛する兄弟、中国における主の働きは、いよいよわたしの心の重荷となつております。それでわたしは、祈りはもちろんのこと、経済的にももつともつとお助けできるようにと待ち望み、祈つておりました。最近わたしは、特にあなたとともにおられるひとりひとりの愛する兄弟姉妹を、金銭的にお助けすることを願つております。ひとりひとりに対するわたしの関心を彼らに知ってもらいたいと強く願つているからです。このわたしの願いは、今、成就されました。

同封されていた十一枚の小切手は、ミュラーがそれまでは助けていなかった働き人全員のためであつた。同じ手紙でバーガーは言っている。

ミュラー氏は、しばらく考えてから、そうすることがさしきざわりにならないならば、ひとりひとりに援助を送ることがよいと思われるかとされて、C・I・Nに連なる兄弟姉妹の全員の氏名を尋ねてこられました。主はわたしたちの資金が減少していることを確かにご存じでした。それで、ご自身の尊い器の心に、わたしたちを助けるようにと示されたのです。

ジョージ・ミューラーからの贈り物が非常な励ましとなったのは金銭のゆえばかりではなく、このような人物の祈り深い理解であつた。彼は宣教師へ手紙を書いている。

わたしの目的は、わたしが主にあつてあなたを愛している事実と、中国における主のわざに、重大な関心を持つており、あなたのために毎日祈っていることを、お知らせすることです。

困難、試み、苦しみ、失望の中で、あなたのことを感じ、主の前にあなたを覚えている者がもうひとりいると聞くことが、あなたにとつて、いささかの励みになるかもしれないとわたしは考えました。しかし、たとえだれもあなたのことを心に掛けず、あるいは、だれもあなたのことを心に掛けていないと感じるような立場にあつても、常に主があなたとともににおられるでしょう。ローマにおけるパウロの例を思い出して下さい（第二テモテ四・一六―一八）。

ですから、主を認め、主を見上げ、主により頼んで下さい。もしあなたが主とともに歩み、主を見上げ、主からの助けを期待するなら、決して主はあなたを失望させられないことを確信して下さい。四十四年間、主を知ってきたわたしが、兄としてあなたを励ますために申します。主は決してわたしを失望させませんでした。最大の困難の時、最も深刻な試みの時、極度の貧しさと欠乏の時にも、主はわたしを失望させませんでした。わたしは主の恵みによつて主に信頼することを許されていたので、主はいつもわたしを助けに來られまし

た。主のよきことを語るのはうれしいことです。

テラー自身がこのような励ましを、非常に必要としていた。揚州事件に続く困難は、内的な試みに比べれば、まだまだ軽いものであつた。外的な環境からの圧迫も、靈的な喜びと平安とを妨げたものの一部であつたに違いない。しかし、やがて訪れようとしていた深い経験をしてからのは彼は、どんな試みによつても、主にある喜びを曇らされはしなかった。

「どんなにひどい圧迫を受けようと、実際それはたいしたことではない」と彼はよく言つていた。「問題は、その圧迫がどこに加えられるかである。それは決して主とあなたの間には来ない。もしそうなら、圧迫が強ければ強いほど、主のみ胸の方にあなたを押しやるだけである」。しかし、その時、彼はまだ、自分ののちの生涯に、非常に輝きをもたらす秘訣を学んではいなかった。長い間内的な暗黒に住み、彼はほとんど絶望的な気持ちにさえなつていた。母親にあてて彼は書いている。

祈りのうちにわたしを覚えて下さいと、幾度かお願いしました。そしてお願いした時、確かにそうしていただく大きな必要がありました。しかし、今ほど大きな必要を感じていることはありません。ある人々からはねたまれ、軽蔑され、他の人々からは憎まれ、聞いたこともなく、関係もないことについて、しばしば非難されています。宣教師活動の定石を変え、異教のあやまちと迷信の大組織に挑戦し、いろいろの点で前例もなく、わずかの経験のある協力者しか持たずに働く時、心は乱され、周囲の状況に当惑することはもちろん、肉体的にもしばしば病気になるてしまします。もし主がわたしに対して特別にあわ

れみを示して下さらなければ、わたしは倒れてしまったでしょう。この仕事の主のものであるという確信で心がささえられ、文字どおり「戦いのただ中」と呼ぶべき現実の中で、彼がともにいますという確信にささえられなければ、わたしは押しつぶされてしまったことでしょう。しかし戦いは主のもので、主は征服なさるでしょう。わたしたちは失敗するかもしれませんが、また失敗を続けることでしょう。しかし主は決して失敗をなさいません。わたしは今までより以上に祈りを必要としております。

わたしの立場には、いよいよ重い責任が加わってきています。それを果たすために、さらに特別の恵みが必要です。それなのに、わたしはいつもわたしの尊い主であるかたをまねるのがおそく、主からあまりにも離れたところに従っていることを悲しまざるを得ません。

時として、誘惑に打ちのめされてしまいます。そのさまはとももお話しできません。わたし自身が、どんなに悪い心の持ち主か、知りませんでした。しかし、わたしは神を愛し、神のわざを愛し、すべての点で主におお仕えするのを願っていることを知っています。わたしが神によつてのみ受けられる尊い救い主を、他の何にもましてすばらしく思います。しばしばこんなにも罪に満ちた者が神の子供でありえようか、と考えたい誘惑にかられます。しかし、わたしはその考えを投げ捨てるようにして、いよいよイエス・キリストの尊さを喜び、「愛する者のうち」にわたしを受け入れて下さった恵みを喜びます。主は神に愛されるかたです。主はこのわたしたちからも愛されるべきかたです。しかし、この点でもわたしは、なんと不十分な存在なのでしょいか。もつと主を愛し、主に仕えられるように、神が

わたしを助けて下さることを、祈って下さい。主が、わたしに罪を犯させず、わたしをきよめ、もつと主のみわざに用いて下さるように、祈って下さい。

「聖霊は、キリストが待ち望む魂を満たすため以外に、義に対する飢えかわきを起こされることは決してない」

「十字架につけられたイエスの信仰は、罪人のための平和の道である。よみがえりのイエスの信仰は、聖徒のための日々の救いの道である」

「あなたは自分の救い主になることはできないだろう。全面的であつても、部分的であつても」

注

その後の二、三年間に、ミュラーは年間一万ドルにも達する献金をした。その額は、揚州暴動以来のミッシェンの収入の減少額に相当した。

一四 新たにされた生涯

そうですわたしのうちに

わたしのうちに主は住まわれます

主のうちのわたし わたしのうちの主

今も そして永遠までも

わたしのからの魂を満たされる

エ・ボナー

前述の手紙が書かれてから六か月後のこと、大運河を北に向かつて行くジャンクの中には、新しく見いだした大きな喜びに満ちあふれた乗客がいた。揚州では、ジャッドが、その友人であり、指導者である人の帰りを待っていた。しかし、彼は、以前からよく知っていたこの人の中に起こった変貌については、予期さえもしていなかった。あいさつもそこそこに、テラーは自分の物語を始めた。背中に手を回す独特な姿勢で、へやの中を叫びながら、行ったり来たりするのであった。

「ああ、ジャッドさん、神さまはわたしを新しくして下さいました。神さまはわたしを新しくして下さいました。」

祈りの答えとして与えられた経験は、実にすばらしかった。しかし、あまりにも簡単すぎて、ことばではなんとも表現できないほどであった。それはずっと昔にあったのと全く同じである。つまり「わたしは盲であったが、今は見える」ということである。

鎮江に帰ったハドソン・テラーを待っていた手紙の束の中には、ジョン・マカーシーが杭州の古い家から出したものもあった。そのころ彼の上にはまぶしいほどの朝日が輝いていた。それはすべてを新しくするうちなる光である。彼はぜひともテラーにこのことを話したいと切望していた。彼はその友が、魂のひどい苦悩を経験していたことを、ある程度まで知っていたからである。しかし、どう切り出してよいのか、どう表現すればよいのか、彼にはわからなかった。彼は書いている。

聖潔の道について、今こそあなたとお話しできたら……と思います。あなたがこのことについて話して下さった時、それはわたしの心を占めていたすべてにまさって重要な問題でした。それは何かを読んだというよりも、失敗の意識からでした。わたしは、目標とすべきだと感じているところから、いつも落ちてしまい、不安ばかりが残っていました。神と親しい交わりを楽しむ道を見つけようとして、絶えず努力をしていますものの、時として生き生きとした親しい交わりができず、たとしても、すぐに幻のように遠のいてしまうのです。

わたしは今、きたらんとするよき目を目ざして、努力や渴望や願いということではきよめられることはできず、幸福をうることも、用いられることもないと考えています。もちろん、貧しい成果だけで満足しているよりもはるかによいことでしょうが、それでもなお最善ではありません。わたしは「すべてなるキリスト」という本の一節に深い感銘を受けました。そこにはこんなことばがあります。

「主イエスを受け入れることは、聖潔の初めである。主イエスを喜ぶことは、聖潔の進展である。必ずそこにおられるか

たとして主イエスにたよることは、聖潔の完成である……」。

「キリストを最も多く所有し、主の完成されたみわざを最も深く喜ぶ者が、最もきよい者である。人の歩みを妨げ、多くの人を倒すのは、欠陥のある信仰である」。

この最後のことは全くそのとおりだと思います。わたしの愛する救い主に、御旨、すなわち、わたしのきよめを全うしていただくことは恵みによってわたしたちが生きる目的であります。努力でも、苦闘でもなく、主にあること、主を見上げること、主を信頼して、今、力を得ることです。「すべての罪」よりの全き救いの喜びの中に、全能の救い主の愛の中にいこうこと、これは新しいことではありません。しかし、それでもわたしにとつては新しいことでした。わたしは黎明の輝きに照らし出されたように感じています。恐れながら、しかし、信じてこの祝福を歓迎します。わたしは、限りなく広がる海の岸べにだけいたように思います。全き満たしを与えられるのに、ただほんのちよつと水を口にしかただけのように思います。今、イエス・キリストは全くわたしのすべてであり、奉仕のための力、唯一の力であり、変わることはない喜びの唯一の源であると感じられます…。

わたしたちの信仰は、どのようにして増していただくことができるのだろうか。それはキリストのご存在のすべて、わたしたちのためのご存在のすべてによるのみである。主の生命、死、みわざ、みことばに現わされた主ご自身を、いつも考えているべきである。信仰を持つという努力ではなく、忠実なおかたを見上げることが、わたしたちのなすべきすべてであろう。今

も、また永遠までも、愛する主のうちに全くいこうことである。

奇跡がどのようにして行なわれたのかはわからないが、「読んだ時、すべてがわかった」とテラーは書き、さらに続けて「わたしは主を見上げた。見上げた時、実になんとも言えない喜びに満たされた」と述べている。

ジャッドも記録している。

いまや彼は、喜びの人、明るく幸いなクリスチャンであった。彼は、重荷を負い、苦勞し、特に最近では魂の安らぎを得られないでいた。しかし、今は主にあつていい、主にわざをなさしめている人となっていた。主にわざをなさしめる—すべての相違はここから生み出される。それから、彼が集会で話す時にも新しい力が流れ出るように感じ、生活の実際問題についても彼のうちには新しい平安がみなぎっていた。以前のように心配事に心を煩わすこともなかった。新しい道に立つて、すべてを神にゆだね、祈りのためには以前にもまして多くの時間を用いた。従来は夜おそくまで働いていたが、夜早く床につき、朝五時に起きて、一日の仕事が始める前に聖書の学びと祈りに時を用いるようにした（それが二時間にわたることもしばしばであった）。

テラーの生涯は変わった。その生涯は、もはや彼自身のものではなかった。六か月ほど前に、彼は「わたしはいつもわたしの尊い主であるかたをまねるのがおそく、主からあまりにも離れたところに従っていることを悲しまざるを得ません」と書いていた。今は、まねるという考えはなかった。キリストがわた

しのうちに生きておられる、というのが幸いな現実であつた。この両者の間にはどんなに大きな相違があることだろう。鎖の代わりに自由、失敗の代わりにうちなる静かな勝利、恐れと弱さの代わりに他者であるかたにいる満ち足りた安心感があつた。解放があまりにもすばらしかつたので、この時からのちテラーは、どこへ行つてもこのすばらしい秘密をかわいていく魂に理解させようと努めたが、いくら努力しても努力し足りない気持ちであつた。今日、このような助けを必要とするかわいた魂は多い。それでこの問題について、彼が初めのころに書いた手紙の一つから詳細を引用してみよう。それは妹のブルームホール夫人にあてて書いたものである。彼女は、十人もの子供を持つようになった家族の重荷を現実体験していた。

長いうれしいお手紙、ほんとうにありがとう。わたしたちが中国に帰つて来てから、あんなに長い手紙をもらったのは初めてでした。手紙が書けなかつたのは、わたしの場合と同じ事情からだということはおかっています。書きたくないのではなくて書けないのです。身も心もある程度以上の緊張には耐えられませんが、また、ある程度以上の仕事もできません。仕事に関して言えば、わたしの場合は、今までになく豊かですが、それだけ責任も大きく困難でもあります。けれども、その重さと緊張感はみななくなりました。最近の一月ほどは、おそらく今までの生涯でいちばん幸いな時でした。主がわたしの魂のうちに下さつたことについて、少しお話ししたいと切望しています。それについて、わたし自身のことをどれだけわかつてもらえるかわかりません。新しく、珍しく、不思議なものは何もないのに、なおすべてがみな新し

いからです…。

以前のことにさかのぼって述べれば、おそらくもつとはつきりとわかつてもらえらると思ひます。そうです。愛する妹よ、過ぎ去つた六か月か八か月の間、わたしの心は非常に苦しめられていました。その時、自分についても、ミッシェンについても、わたしの魂に、もつと深い聖潔と生命と力が必要であると感じていたのです。しかし、何よりも自分の必要が先で、最大のものでした。感謝の気持ちのない、神により近く生きていない危険と罪を感じていました。それで、祈り、苦しみ、断食し、努力し、決意をし、もつと忠実に聖書を読み、黙想するために、より多くの時間を求めました。しかし、すべてはむだでした。毎日、ほとんど毎時間、罪の自覚にわたしは押しつけられていました。

もしも、キリストの中にいることができさえするならば、すべてはよくなるだろうとわたしは知っていたのですが、それができませんでした。たとえ一瞬間であつても主から目を離さないつもりで、祈りによつて一日を始めようとはするのですが、耐え切れないほどに苦しい仕事の圧迫や、仕事を中断されることによつて、しばしばわたしは疲れ果てて主を忘れてしまふのです。こうした状態の中では、神経が異常に高ぶつて、いらだちやすくなり、かたくなな考え方をしたり、冷たいことばを押えるのが困難になるような状態でした。毎日、罪と失敗と力の欠乏が記録されるばかりでした。願い求める気持ちはあるのに、どうすればよいのか、わたしにはわからないありさまでした。

それから、疑問がわいてきました。いつまでもこのような状

態―絶えざる争いと、あまりにも頻繁な敗北―が続かなければならないのか。

イエスを受ける者には、「彼は神の子となる（すなわち神のような）力を与えたのである」と、自分の経験とは違っているのに、どうして真剣に説くことができるだろうか。わたし自身はいよいよ強くなるのではなく、かえってだんだんに弱くなり、しだいに罪に逆らう力が減退して行くように思われました。無理ありません。信仰が、そして希望さえも下降をたどっていたのですから。わたしは、自分を憎み、自分の罪を憎みましたが、それでもそれに抵抗する力は得られませんでした。わたしは神の子供であつたように感じました。わたしの心の中にある神の聖霊は、わたしのみじめさにもかかわらず「アバ父よ」と叫ばれるようでした。しかしわたしは、子として与えられている特権に生きることについては全くの無力でした。

わたしは、実際の聖潔は、忠実に恵みの手段を用いることによつてだんだんに得られるものだと考えました。聖潔ほどわたしが求め、また必要としているものはありませんでしたが、それを少しばかり得るのにさえも力が及ばないありさまでした。いっしょうけんめいになればなるほど、それはわたしから遠ざかつてしまい、ついには願うことさえもほとんどしなくなり、神は天国をより慕わしいものとなさるために、地上では聖潔を与えられないのであろうと考えはじめました。自分の力にたよつてそれを得ようと努力していたとは思いません。わたしは自分に力のないことはわかっていました。主に向かつてそう申し上げましたし、力を与えて助けて下さいとも願ひ求めました。時には主がささえ保つて下さると信じ

られそうになることもありました。夕暮れになると、ああ、そこにあるものは罪のみであり、神の前に告白できず、嘆くこともしない現実のみでした。

長くつらい何か月かの経験のすべてがこうであつたという印象を与えたことはありません。確かにそれは、当時、実にしばしば見られた魂の状態であり、陥りやすかつた傾向でした。それでも、この時ほどキリストが尊く思われたことはありませんでした。こんな罪人を救うことができ、また救うことを望まれる救い主：主にある安らぎの時も、確かに幾度かありはしましたが、それもすぐに過ぎ去つてしまうのです。いくらくよく見ても、そこにあるものは悲しい力の欠乏でした。この戦いを終わらせるにあたつて、主はまことによきおかたでありました。わたしの必要のすべてはキリストにあるという確信を、ずつと持ち続けてはいましたが、実際問題は、その確信をどのように働かせるか、ということでした。主は真実に豊かなおかたですが、わたしは貧しい。主は真実に強くあられるが、わたしは弱い。根や幹に豊かな栄養があることは十分に知っていますが、実際にそれをどのようにしてわたしの小さな枝に受けることができるかが問題なのでした。しかし、しだいに光が輝いてくると、唯一の必要は信仰であることが明らかになつてきました。満ち満ちた主に向かつて手を伸ばして、その豊かさを自分のものとするものであることがわかりました。わたしにはこの信仰がなかったのです。信仰を求めてわたしはいっしょうけんめいでしたが、得ることができませんでした。信仰を行使しようとしたが、むだでした。イエスのうちにたくわえられたすばらしい恵みの宮、わ

これらの尊い救い主の完全を見れば見るほど、わたしのとがと無力さはいよいよひどくなるようでした。わたしが犯した罪は、不信仰の罪に比べれば、ごくわずかなことと思われました。神をそのみことばどおりに受け取らず、受け取ることもできずに、かえってうそつきにしようような不信仰こそ、世界を破滅させる罪だと感じていました。がしかし、わたしがその中に浸っていたのです。信仰を求めて祈りはしましたが得られませんでした。わたしは何をすべきだったのでしょうか。

わたしの魂の苦しみが極点に達した時、ちょうどその時、よき友マカーシーの手紙の一節がわたしの目のかすみを取り除き、神の霊が、わたしたちはイエスと一体であるという真理を、今までにないほど明らかにしてくれました。同じような失意に苦しめられながら、わたしより先に光を見たマカーシーは書いています（記憶をたどって引用します）。

「しかし、信仰を強められるためには、どうしたらよいのでしょうか。それは、信仰を求めて努力するのではなく、忠実なおかたに寄りかかることによるのです」。

それを読んだ時、わたしにはすべてがわかりました。「たとい、わたしたちは不真実であつても、彼は常に真実である」。わたしは主を仰ぎ、「決してあなたを見捨てない」と言われる主を見たのです。わたしが見上げた時、ああ、どんなにうれしかったことでしょう。

「ああ、安息がある」と考えました。「主のうちにいこうとむだな努力をした。もう努力はすまい。主がともにいて下さると約束されたのではないか。決してわたしを見捨てず、見放すこともない」と。愛する妹よ、確かに主は決して見放さ

れません。

これは、主がわたしに示して下さったことのすべてでもなく、半ばでもありませんでした。ぶどうの木と枝のことを考える時、祝福の聖霊はなんとすばらしい光を、わたしの魂に注ぎ込まれたことでしょう。主から活力や満ちしを取り出そうと願ったことが、どれほど大きなまちがいであつたかをよく考えさせられました。わたしは、イエスが決してわたしを見捨てられないということだけでなく、わたしが主のからだの一部分であり、主の肉の一部分であり、主の骨の一部分であることを知ったのです。ぶどうは根だけではありません。それは、根も、幹も、枝も、小枝も、葉も、花も、実も、すべてなのです。そして、イエスはそれだけではありません。主は、土であり、日光であり、空気であり、雨であり、さらにわたしたちが夢にみたこともなく、願ったこともなく、必要とも感じないような他のさまざまのものでもあるのです。この真理を知ったことは、ほんとうに喜ばしいことでした。あなたもまた、このような理解ができるように、光をいただき、キリストのうちに自由に与えられている富を知り、楽しむことができるようにと祈ります。

愛する妹よ、よみがえり、昇天された救い主と、真実な一体であること、キリストの枝であることはすばらしいことです。そこに含まれているものがなんであるか考えて下さい。キリストが富んでおられ、わたしが貧しいということがありえましょうか。あなたの右手が富み、左手が貧しいことがありえましょうか。頭が十分に養われているのに、からだが飢えているということがありえましょうか。さらに、このことが祈りに対してもつ意味を考えて下さい。銀行員が客に向かつ

て、「小切手を書いたのはあなたの手であつて、あなたではない」とか、「あなたの手にこの金を払うわけにはいいかない。払えるのは、あなたにだけだ」とか言えるでしょうか。それと同様に、あなたの祈りが、またわたしの祈りが、イエスの名によつてささげられるならば（イエスのゆえのみではなく、わたしたちが彼のものであり、彼に属する者であるという理由で）、キリストの預金の限界内にとどまるかぎり、無効だということはありえません。この限界は相当に広いものです。もし、聖書的でないことや、神の御旨に沿わないことを願うならば、キリストご自身それを受け入れて下さることはできないでしょう。「わたしたちが何事でも神の御旨に従つて願い求めるなら、神に願い求めたことはすでにかなえられたことを、知るのである」。もし、一部が他よりも慕わしいと言えるなら、最も慕わしいものはキリストの完全な一体化がもたらす安息であります。わたしはこのことがわかつてから、もう何事も思い煩ひません。主は御旨を行ないうるかたであり主の御旨はわたしの心であることを知るからです。主がわたしを、どこに、どのようにして置かれるかは問題ではありません。そのことは、わたしよりも主がお考えになるべきことなのです。なぜなら、最も楽なところでも、主はわたしに恵みを下さらなければなりませんし、最も困難なところでも、主の恵みは十分だからです。わたしが召使にちよつとした安い物を買に行かせようと、非常に高価な物を買に行かせようと、彼にとつてはたいした違いではありません。いずれにしても彼は、わたしに金を求め、買ったものをわたしのところに持つてきます。もし神がわたしを深刻

な困惑の中に置かれるとしても、神は十分にわたしをお導きにならなければなりません。非常に困憊な立場に置かれる時には多くの恵みを与え、激しい圧迫の中では非常な強さを与えて下さらなければなりません。主が貧しくあられるので緊急の事態に対応できないかもしれないなどと恐れることはありません。主の富はわたしのものです。主はわたしのものであり、わたしとともにあり、わたしのうちに生きていて下さるからです。キリストがこのように信仰によつてわたしのうちに住んで下さつてから、どれほど幸福になつたことでしょう。書くよりは、直接お話しできればと思います。わたしは以前より楽になつたというわけではありません。ある意味でそれは、願いもしなければ、またそうなるように努力もしません。しかし、わたしはキリストとともに死に、葬られ、そうです、ともによみがえりました。そして今、キリストはわたしのうちに生き、「わたしがいま肉にあつて生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によつて、生きています」のです……。もう筆をおかなければなりません。言いたいことの半分もまだ言つていませんし、言いたいように言つてもいません。もつと時間があればいいのですが。神さまがこの祝福の真理をはつきりとあなたにつかませて下さるように。「だが天に上るであろうか（それは、キリストを引き降ろすことである）」、などと言ひ続けることはしますまい。ことばを替えて言えば、神がご自身とわたしたちを一つのものにして下さり、ご自身のからだの枝として下さつたのに、主が遠く離れてるように考えたりしないようにしようということです。

また、この経験と、これらの真理とが、少数の者のためであるとみなすべきではありません。これはひとりひとりの神の子が持つ生まれながらの特権であり、主を汚すことなしにそれを無視することは、だれもできません。キリストは、罪から人々を救い出すただ一つの力であり、また人々が奉仕するための唯一の力なのであります。

そのすべては、家事に追われている母親もまた同様に、信仰の安息に導かれて知ったように、きわめて単純であり実際のであつた。

「あなたはキリストにあることを、いつも意識しておられますか」と、何年もあとにテラーは聞かれた。

「昨晚、寝ている時にわたしは、ここにいることを意識していませんでした。しかし、それだからと言って、わたしがあなたのお宅にいなかったのでしょうか。キリストのうちにない、という意識は、決して持つべきではありません」と、彼は答えた。

一五 かわくことなく

それからどうなるだろう

わたしは別にそれを尋ねたいとは思わない

涙恐れそして悲しみがあるのはわかっている

その時愛する主は近づいて言われるのだ

「あすのことはわたしが責任を負います」と

これは長い間の試練に耐えることのできる経験であった。満たされなくなってしまうということは、もうなかった。魂が満たされなければならぬ状態にありながら、どうしてもキリストのうちにすでにある満たしをいただけないというようなことはなかった。今までよりさらに深刻で容赦のない試練がやってきたが、その一つ一つに、主ご自身のご臨在から何ものにも妨げられないで流れてくる喜びがあった。ハドソン・テラーは魂の安息の秘訣を見いだしたからである。この経験によって主イエスご自身をもっと理解できるようになったばかりでなく、もっと完全な献身―主への自己放棄―をすることができたのである。すでに見たように、彼はしるしている。

わたしはもう何事も思いません。主は御旨を行ないうるかたであり、主の御旨はわたしの心であることを知っているからです。主がわたしをどこに、どのように置かれるかは問題ではありません。そのことは、わたしよりも主がお考えになるべきことなのです。なぜなら、最も楽なところでも、主はわたしに恵みを下さらなければなりませんし、最も困難な

ところでも主の恵みは十分だからです。わたしが召使にちよつとした安い物を買に行かせようと、非常に高価な物を買に行かせようと、彼にとつてはたいした違いはありません。いずれにしても、彼はわたしに金を求め、買ったものをわたしのところに持つて来ます。もし神がわたしを深刻な困惑の中に置かれたとしても、神は十分にわたしをお導きにならなければなりません。非常に困難な立場では多くの恵みを与え、激しい圧迫の中では非常な強さを与えて下さらなければなりません。主が貧しくあられるので、緊急の事態に対応できないかもしれないと恐れることはありません。主の富は、わたしのものです。主はわたしのものであり、わたしとともにあり、わたしのうちに生きていて下さるからです。

キリストにすべてをささげることが、彼はずっと前から知っていたが、これはそれ以上のものであった。新しい献身、すなわち、もし主が望まれるなら、あれやこれやを放棄するという問題ではなく、自分自身のすべてを余すところなく主にお渡しすることであった。それは主に属する者のためにありうる最善として、大きなことであっても、小さなことであっても、すべてにおいて主の御旨を喜んで受け入れ、感謝をもって忠実にこなうことである。このことによつて、次の夏に襲ってきた試みの涙の谷を、静かに流れでる祝福の泉と変えた神の恵みによる勝利の時とすることができたのである。

危険と興奮とが頂点に達した天津の虐殺事件以前にも、テラー夫妻は主から与えられた格別に深い悲しみを経験していた。子供たちとの別離はしだいに避けがたいことになっていったが、これ以上その時を延ばすことはできなかった。中国には

彼らを教育できる学校はなかったし、そのころは今日のように酷暑の間、避暑をする保養地もなかった。彼らの耐乏生活は、子供たちの健康にも影響を及ぼしていた。両親はすでに、一児を中国の土に埋葬するという悲しい経験をしている。テラーたちの秘書であり、献身的な友人でもあったミス・エミリー・ブラッチリーが、三人のむすことひとりの娘を英国に連れて行って、世話をしようと申し出てくれた。彼らは感謝してこの申し出を受けた。

当時、東洋と西洋は、今よりもはるかに遠く離れていたもので、このことは長い長い別離を意味していた。しかし、幼い旅行者たちが沿岸地方に伴われて行く前に、もつと長い別離に直面しなければならなくなった。いつも両親によりそっていた末の男の子は、わずか五歳になったばかりで、その上いちばん健康を害していた。近づいている別離の悲しみが、この子の持病を悪化させているのを見て、両親は心を痛めていた。揚州から運河を下る舟の上でも、彼らは一晩じゅう子供の枕もとを離れないで見守っていたのだが、翌朝の明けがた、この子は深い眠りに陥り、揚子江の濁った流れの上から、苦しみもせず、恐れもしないで、よりよき国へ去って行ったのである。あらしが吹きすさびはじめる前に、両親は三キロも幅のある川を渡って、その宝であるわが子の遺体を鎮江の墓地に横たえた。それから、他の子供たちと上海に向かった。しばらくして日中に出港するはずのフランスの定期船に一行を連れて行ったが、そのあとでテラーはバーガーにあてて書いている。

目をさましている子供たちを中国で見るのはこれが最後になるでしょう。（彼はまだ船上にいたテラー夫人を連れにも

どつていた）。ふたりの小さい子供については何も心配していません。あの子たちはすでにイエスのみふところに休んでいます。愛する兄弟、今は涙を押えることはできませんが、主が価のない者をこの大きなお働きにあずかせて下さることを感謝しています。この仕事に従事していることに、何も悔いることはありません。これはわたしのわざでもなく、あなたのわざでもなく、主のみわざです。しかもなお、わたしたちのものでもあります。わたしたちがそれにあずかっているからでなく、わたしたちが主のものであり、このわざの主であられるかたと一体であるからです。

これが彼らをささえた現実であつた。彼らが迎えようとしていた一八七〇年の夏ほど、苦しみの多い夏はなかった。その中で彼らは、ことばには表わせないほどの子供を思う気持ちを持ちながらなお、かつてない安息と喜びとを与えられていた。テラーはのちに回顧して、しるしている。

まことに心の優しい母親を、これほどまでにささえられた恵みのすばらしさに驚くばかりである。その秘密は、イエスが心と魂の深いかわきを、いやしておられたことにある。

周囲に狂いたける試みのあらしに耐えながらもその夏のテラー夫人のコンデিশョンは最高であつた。そのころミツシヨンの人々の間には悪疫が流行していた。彼らが子供たちと別れて鎮江に到着する以前に、ジャッド夫人がそこで危篤状態になつていくという知らせがあつた。テラーは別の患者をみなければならなかつたので舟を離れることはできなかったが、

テラー夫人が自分にできることをしようと言い出し、彼もそれに同意した。

鎮江のジャッドは、何昼夜も続いた着病で卒倒するばかりの状態だった。彼はその時、階下の中庭にだれかが到着した音を聞いた。こんなに夜おそく、どこから、だれが来ることができるだろうか。彼は人が来ることを予想もしていなかった。蒸気船が川を通った様子もないし、民船は日没以後は航行しないだろう。それに中庭にはいつて来たのは手押し車の音である。ばねのない車で長い道のりを、しかも婦人がひとりでやって来たのである。やがて彼の前に現われたのは、願いうる最善の人の顔であった。ジャッドは回想して語っている。

その時、テラー夫人は、困難な旅のあとで、苦しくもあり、疲れ果ててもいたのだが、わたしをベッドに行かせて、自分が看病をしようとがんばった。どうしても彼女を休ませることはできなかった。彼女は言うのである。

「あなたはおやすみになってもがまんしなければならぬ理由が十分にあります。どうか寝て下さい。わたしは、あなたがどうなさろうと、あなたの奥さんといっしょにおります」。

こう言った時の彼女の確固とした態度と愛を決して忘れられない。その時の彼女の顔には、主とともにあるゆえの喜びと強さをもつ者に与えられている、主ご自身の柔和な輝きがあった。

病人をささえ通したものは、祈り以外の何物でもなかった。それは、その夏何回も襲ってきた危機の極点で、祈りによつて事

態が救われたのと全く同じであった。ミッシヨンの友にあててテラーは書いている。

いくつかの伝道所で受けた試みについては、以前にも知ってはいましたが、すべてが同時にと言いますか、広範囲にわたる興奮状態が、この地の社会の根底をゆすぶったのです。中国人の魔術師によつて彼らが魔法にかけられていると信じた中国人の驚きと、これらの油断のできない敵が、外国人の手先であると知らされた時の彼らの激しい怒りは、とても表現できないほどです。天津の人々が立ち上がったこと、カトリックの慈善団体の修道女、司祭たち、果てはフランス領事までが虐殺されたことは、もうご存じでしょう。このような情勢下で、人間の力から見れば、内陸部で孤立し、全く無防備であつたわたしの兄弟たちが、彼らの手から守られたのは、なぜだつたのでしょうか。それはすべてにまさるイエスのみ名によつて、心を合わせて絶えず祈っていた祈りに、答えて働かれた神の力あるみ手による以外の何ものでもありません。この同じ力が、イエスにより、その臨在、愛、摂理によつてわたしたちを満たして下さったのです。

こうした経験について書かれたものを読むことは容易である。がしかし、そこにある緊迫した気持ちや少しでも理解できるのは、同じような危機を通して生きてきた人だけであろう。その年の夏の暑さはまた格別で、いつまでも続き、そんなことが住民の不穏な空気をいつそう険悪にしていた。婦女子は沿岸地方への移動を余儀なくされ、中国政府当局は、一時、彼ら婦女子に全面的な国外退去を要求するかわれた。このことについ

て中国と外国の当局者に対して多くの書簡が送られ、最悪の危険状態にあった働き人にも頻繁にくり返して通信がなされた。鎮江のミッシン・ハウスの施設には、できるかぎりの重税がかかけられ、さらに家を手に入れることも異常な興奮状態のためにできないほどであった。揚州暴動に言及して、テラーは六月に書いている。

古い時代にまた逆行してしまったように思われる。違っているところは、わたしたちの心労が以前のように一か所に限定されていないことである。

このころになると、川沿いの伝道地はみな放棄しなければならぬのかのように見られた。テラー夫妻は、揚州よりはまだ中央部にあるというわけで、鎮江に住んでいた。テラーの家では夫は居間の床か廊下に寝て、妻が他の婦人たちとともに休息所を広くするようにしていた。天津虐殺のちに、テラーは筆を続けている。

一つの困難に続いて、すぐに次の困難がやってきます。しかし、これは偶然ではなくて、すべては神が支配しておられるのです。南京での興奮状態は恐ろしいものでした。……この流言がやみはじめるようにと願っております。しかし揚州の事態は険悪です。……どうぞわたしたちのためにせつにお祈り下さい。わたしの心は冷静ですが、わたしの頭は、次から次へと絶えず起こってくる困難のために、ひどく試みられています。

しかし、この時期の試みによつて、この事業が霊的な面で妨げられることはなかった。テラー夫妻は、この霊的な面で得られるものをがしはしなかった。六月の酷暑の中から、テラー夫人はミス・ブラッチリーにあてて書いている。

日曜日の晩と、そのほかにも週に二晩か三晩クラスを開いて、読解力のある中国人クリスチャンに、聖書研究に興味を持たせようと努めています。読めない人々にも、ここでの研究のための学びに興味を持たせたいと願っております。一方また、わたしたちのなすべきことがいくらでもあることをかなりよく知っているミッシンの若い働き人に対して、模範が示されるようにと願っております。回りにいるクリスチャンや未信者に、みずからみことばを読み、理解することをなんとしてでも学ばせようとする理由について、彼らは実際的な説明を得られるかもしれません。

霊的な経験において、テラーが得た喜びは、時が差し迫っているために、妨げられるどころか、かえつていよいよ深くされた。彼の書簡集は、すべてを通して、彼を導いた祝福のすばらしい潮について述べているほどのいろいろの問題の圧力や困難について語ってはいない。このことはミス・デスグラズにあてて書いた手紙からもうかがわれる。それは六月の半ばごろ、揚州事件に関する彼女の手紙に対して慎重な回答をしたためたのちにしるされたものである。

わたしは今、あなたにすばらしいみことばを差し上げましょう。神さまはこのみことばによつてわたしの魂を非常に祝し

て下さったのです。「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい」(ヨハネ七・三七)。かわかない人がどこにいてしょう。精神がかわき心がかわき、魂がかわき、からだがかわかないという人があるでしょうか。どんな種類のかわきを持つているか、あるいは、すべての点でかわいているのか、それは問題ではありません。「わたしのところにきて」かわいたままでいるのでしょうか。否、「わたしのところにきて飲むがよい」と言われるのです。

イエスがわたしの必要を満たして下さることができるというのでしょうか。そうです。主はそれ以上のことをして下さいます。わたしの道がどんなに入り組んでいようと、わたしの奉仕がどんなに困難であろうと、問題ではありません。わたしの悲しみがどんなに大きく、愛する者がどんなに遠く離れていても問題ではありません。いかに無力であろうと、魂のうめきがどんなに深かろうと問題ではありません。イエスはすべてを満たし得、しかも、満たす以上のことをして下さるのです。主はわたしに、ただ安息を約束されるばかりでなく、―それがすべてであるなら、なんとすばらしいことでしょう。「すべて」という一語が、どれほどのことを意味するのでしょうか。主は単に、わたしのかわきをいやすために飲ませて下さると約束されるだけではありません。いいえ、それよりもすばらしい、このことについて「わたしを信じる者(わたしを信頼する者、わたしをわたしのことばどおりに受け取る者)は、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう」。

ありうるのでしょうか。かわく者が元気づけられるばかりではなく―かわききった土に潤いが与えられ、暑さで乾燥し

きつたところが涼しくなるだけでなく―その土地に水分がしみ込んで、泉がわき上がり、そこから川が流れ出る。こんなことがありうるでしょうか。しかしながら、確かにそうなのです。そしてそれは、ただ山に降る大雨のようなもの、つまり、雨が続くかぎり水があふれ、またかわいてしまうというようなものではありません。その腹から水が川となって流れ出る―あの大揚子江のように、あくまでも深く、あくまでも豊かな状態なのです。千ばつの時には、小川はかれるかもしれません。事実かれてしまうこともまれではありません。よくあるように運河は、完全に水をくみ上げてしまうかもしれません。しかし、揚子江にはそういうことはありません。揚子江は、常に変わらなく流れる大河であり、深く、何事も逆らうことを許さぬ流れなのです。

六月に書いた別の手紙で、彼は言っている。

「わたしのところに来て飲むがよい」。来て、急いでひと飲みにしなさい、と言っているではありません。来て、わずかにばかりかわきをいやしなさい、つまり、しばらくの間だけかわきを止めなさい、というのでもありません。これは「飲むがよい」、「飲み続けるがよい」、絶え間なく、習慣的に飲むことをいうのです。かわきの原因は取り去られないかもしれません。一度来ること、一度飲むことは、力をよみがえらせ、慰めを与えるかもしれないませんが、わたしたちはいつも来続け、飲み続けるのです。泉がかれたり、川の流れが尽きたりする心配はありません。

その夏、彼自身の心にとつても、キリストの慰めがどれほど必要であつたことだろう。彼はこのような手紙を書きながら、このことにはあまり気がついていなかった。しかし、彼が新しく、より深く信頼していたおかたは、彼を見放しはしなかった。

六週間ほどたつたころ、鎮江の宣教師の家では、喜びと悲しみとが奇妙に交錯していた。テラー夫妻に幼いむすこが与えられ、彼らは喜びに満たされていた。ところが、まもなく母親がコレラにかかり、ひどく衰弱してしまつた。生まれたばかりの赤んぼうは乳がなくて栄養が不足し、やつと中国人の乳母が見つかつた時には、もう手おくれで幼い生命を救うことができなかった。この子は地上にわずか一週間いただけで天の家に歸つて行つた。そしてまもなく、この子の母親もそのあとを追つて行つたのである。テラーは書いている。

彼女は、肉体的には全く衰弱していましたが、魂の深い平和と、主ご自身の臨在の強い自覚がありました。彼女はまた、主のきよい御旨の中にある喜びに満たされておりました。わたしもその喜びにあずかることを許されていたのです。しかしながら、これらのすべてのことをどのように説明してよいのか、わたしには全くわかりません。

彼女は自分で、葬式の時に歌う賛美歌を選んでゐた。その中でも特に、「おお、聖なる救い主、いまだ見ざるとも」という賛美歌は、彼女の心に留めていたもののようである。

しばしば信仰と望みが試みられても

異なつた環境を求めたりはしないのです
またそれを必要としません
主よあなたによりすぎる魂は
安らかで静かで満ち足りてゐるのです

サタンも墓も恐れはしません
しかしあなたが近くにあつて
救つて下さることを知っています
主よあなたにすぎる時
ヨルダンの波さえ越えて恐れないのです

彼女は弱つていたが、彼らは死期が迫つてゐると思ひ及ばなかつた。ふたりの心を強く結びつけていた愛には、ふたりが別れるという考えを入れる余地はなかつた。それに彼女はまだ三十四歳にすぎなかつた。最後まで苦しみはなかつたが、ただしだいに疲れがつつていつた。死の二日前に、バーガー夫人から、ミス・ブラッチリーと上の子供たちがセント・ヒルへ安着したという知らせの手紙が到着した。(注一)子供たちが歓迎されていること、彼らのしあわせな生活のために準備された一つ一つのことを、詳細な点に至るまで母親は心から喜んだのであつた。彼女はどんなに感謝しても十分に感謝し尽くせないように、ただ主の恵みを賛美するほかは何も願わなかつた。ちょうど必要な時、ちょうど必要なところに、バーガー夫人の手紙が着くということは幾度もあつた。バーガー夫人はその豊かな愛にあふれた心で、幾度もその手紙を受け取る人たちの環境を予期することができたが、この手紙の場合は、特にそれが著しい

ものであった。その手紙でバーガー夫人は、「たいせつな友よ、それでは、さようなら。主は、ご自身の永遠のみ腕であな
たを抱いて下さいます」と述べている。確かに彼女は、そのみ
腕の中に休息しているのである。そこに居合わせたひとりの婦
人が書き残している。

このような光景をわたしは見たことがありませんでした。愛
するテラー夫人が最後の息を引き取ろうとしていた時、
テラー氏はひざまずいて、彼女を主にゆだねました。そし
て、彼女を与えて下さり、十二年と六か月の間、祝された生
活とともに送ることがゆるされた幸いを感謝しました。ま
た、ご自身の臨在のうちに彼女を召されることを感謝して、
厳粛に、新しく自分を主の働きのためにささげたのです。

夏の太陽は、町の上に、丘や川の上に高く上った。生活の忙し
い騒音が、あちらこちらの庭や道から聞こえてきた。その中
で、青空の見える中国風の家屋の二階の一室には、すばらしい
平和の静寂がみなぎっていた。

「かわくことがない」。今もこのみことばが真理であると言え
るだろうか。「いつまでも」とは文字どおりいつまでもを意味
し、「かわく」とは必要のすべてが満たされないことを意味す
るという理解は、神がわたしたちの魂に与えられた啓示の一つ
であろうと、のちになってからしばしばテラーは語ってい
る。まことにわびしい日々には、彼の痛む心には、主の約束が生
き生きとした現実となったのである。八月になってからテー
ラーは母親にあてて書いている。

神があらゆることをされるかたであり、あらゆることが起こ
るのを許され、すべてのことが愛する者のために相働いて益
とされることを知っているのは、心の底からの喜びです。わ
たしの愛する妻が、わたしにとってどんな存在であったか
は、主だけが知っておられます。わたしの目の輝きも、わた
しの心の喜びも、どれほど彼女に依存していたことであ
う。妻の最後の日に―それが生涯の最後になるとは、夢にも
思っていなかったのですが―わたしたちの心は、決して衰え
ることのないお互いの愛の物語に喜び合っておりまして。彼
女が最後にくれたことは、その片方の腕をわたしの首に
回し、頭の上に手を置こうとすることでした。おそらくも
う、そのくちびるではわたしの上に祝福を願う祈りのことば
を言えなかったからでしょう。主は、彼女を取り去ること
をよしとされました。それは彼女のためにほんとうによいこ
とでした。彼女を少しも苦しめずに、ご自身の愛のうちに
取り去られました。一方、今、ひとりで―しかも、ひとりで
はなく―勞し、苦しまなければならぬわたしにとつても、
それに劣らずよいことでした。なぜなら、今までよりもつ
と神がわたしに近くなつて下さったからです。

そして、バーガーにあてても書いている。

わたしが失った者を思う時、悲しみに心は破れるばかりです
が、このような悲しみを彼女に経験させないで、言いがたい
ほどの幸福に導いて下さった主への感謝で、わたしは引き上
げられる思いです。わたしの涙は、悲しみの涙というよりも

むしろ、喜びの涙なのです。しかしわたしは、何ものにもまして、わたしたちの主イエス・キリストのゆえに神ご自身をうれしく思います。また、そのみわざ、その道、その摂理を心から喜んでおります。神は「何が神の御旨であるか、何が善であつて、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知る」（試みによつて知る）ようにさせようとしておられるのです。その御旨はまことに幸いです。わたしの受けうるものです。完全なものです。それは行動の愛です。この慕わしい御旨のうちにわたしたちはまもなくもう一度結ばれて、ふたたび別れることはないでしょう。「父よ、あなたがわたしに賜わった人々が、わたしにいる所に一緒にいるようにして下さい」。

しかし、全くなんの反応もなかったというわけでもなかった。特に、病気で眠れない時などは、心のかわきが襲ってきた。テラーは回想している。

自分のへやに閉じ込められていたものうい時間のなんと寂しかったことか。どれほど、愛する妻や遠く英国にいる子供たちの声をなつかしんだことであろうか。主が「わたしが与える水を飲む者は、いつまでもかわくことがない」というみことばを、わたしに親しく示して下さいた理由を理解したのはこの時であつた。一日に二十回にも及んだであろうか、心のかわきもどつてくるのを感じて、主に向かつて叫んだ。

「主よ、あなたは約束されました。かわくことがないと約束して下さいました」。

昼叫んでも、夜叫んでも、主はいつでもただちに迫つて下さ

り、寂しい心に満足を与えられた。それでわたしはしばしば、孤独な居間でわたしが楽しめたほど、死んだ愛する者が主の臨在を楽しむことができたかどうかと考えさせられるほどであつた。主は、文字どおりこの祈りに答えられたのである。

主イエスよ

ご自身をわたしにとっての現実として下さい

生けるあざやかな現実として下さい

目に見えるようなうわべのことより

信仰のあざやかなビジョンに

臨在を示して下さい

地上のいちばん慕わしい結びつきより

もつと親しくもつと近くにいて下さい

この時期に彼が書いた多くの手紙の中でも、子供たちにあてて書いた手紙ほど貴重なものはない。テラーは子供たちに対して、切実な深い愛を感じていたのである。

おとうさんが愛する子供たちのことを、どれほど考えているか、みんなにはわからないでしょう。目に涙がいつぱいになるまでみんなの写真を見ていることが幾度あるかわかりません。みんながあんまり遠くにいることを考えて、不満を感じたりすることがないようにと恐れます。けれども、わたしを見放されることのない愛する主イエスさまは言われます。

「恐れてはいけない、あなたの心をわたしがいつも満たしてあげます」。わたしは主に感謝し、わたしの心の中に主が生きて下さり、わたしを正しく保つて下さることをうれしく思

います。

愛する子供たちよ。みんなの心を、毎日、イエスさまにおさげして、守っていただくことが、どういうことか知つてくれたら：と思います。以前わたしは、自分の心を正しくしておこうと努力したものです。しかし、それはいつもうまくいにはいきませんでした。それでとうとう自分で努力することをやめて、主がわたしの心を守って正しくして下さるというみことばをお受けしたのです。これがいちばんだと思いませんか。たぶん、みんなも時々、わがままになったり、不親切になったり、すなおでなくなったりしないようにしようと思ふでしょう。それで、ほんとうにいつしうけんめいにやってみるけれどもうまくいかないことがあるでしょう。けれどもイエスさまは、「あなたはそれをわたしにゆだねなければいけません。あなたが自分の小さな心でわたしにたよるなら、その心を守つてあげます」と言われます。そして確かに主は守つて下さるのです。

前にはイエスさまのことを、できるだけ何回も、たくさん考えようとしたものです。それなのにたびたび忘れてしまいました。今は、イエスさまがわたしの心にご自分のことを、いつも思い出させて下さることを信じています。そして確かに、主はそうして下さるのです。これがいちばんいい方法です。愛するブラッチリー先生に、このことをもつと話して下さるようにお願いしなさい。そして、神さまがそれをわからせて下さり、イエスさまにたよるように助けて下さいとお祈りしなさい。

また、ミス・ブラッチリーに対しては、同じ主題に関して、沿岸航路の船のわびしい船室から書いている。

愛する子供たちに、また手紙を書きました。子供たちがこのすばらしいキリストと一つにされることと、内在のキリストのすばらしい真理を早く知つてくれることを切望しています。わたし自身は、それを学ぶのが、あまりにもおそすぎました。こうしたことが、あがないの教理よりも理解が困難であるとは思いません。聖霊の教えが必要なことには変わりがありませんが、聖霊の教えさえあれば十分です。神があなたを助けて、小さな子供たちの前に、キリストとともに生き、彼らにキリストを知らせて下さるように。主が、わたしたちを導き、教えて下さったことは、まことにすばらしい方法によつてでした。以前は、今わたしが楽しんでいる心の安息と平和とが、地上でも可能だということを信じるのに、全く欠けていました。それは、下界で始められた天国ではありませんか。このキリストと一体になることに比べれば、天も地も全く重要ではありません。

同じ旅の途中から、彼はウォーカー夫人に書いている。

イエスがあなたのうちに生きておられると感じて、ほんとうに喜んでいます。主があなたの心を治め、主とともにいようとする苦しい努力によつてではなく、いつもあなたと交わりを求めておられるご自身の愛を示されることは、すばらしいことです。主は、われらの生命、われらの力、われらの救いです。主はわれらの「知恵と義と聖とあがない」であります。

主はわたしたちの奉仕のため、また、実を結ぶための力であり、主のみふところはわたしたちの今も永遠までも変わらない安息の場所であります。

その間にも、外的な困難が軽減されることはなかった。政治的には、テラーが今まで中国で経験したこともないほど激しい危険な状態であった。フランスの領事を含めて二十一人の外国人の生命を奪った天津大虐殺は、まだ解決を見なかった。中国政府は西欧が戦乱に巻き込まれたのを知っていて、反外国の扇動を静めるための手は何も打たなかった。

一八七〇年の事態が、小規模ではあるが現在（一九三二年）の状態と、ある意味であまりにも似ているので、あえて当時の混乱がどのようなふんい気に対処されたかを示しているもう一つの手紙を引用しよう。原理は、今日も当時も変わらないし、一つのミッシェンとしても、今日のわたしたちは、テラーがその年の暮れに、祈りと断食の日を呼びかけたところと同じ立場に立っているからである。

この年はいろいろの意味で驚くべき年でした。おそらく、わたしたちの仲間のひとりひとりが、多少の相違はあるにしても、あらゆる危険と困惑と苦しみとに直面した年でした。しかし、主はこれらのすべてからわたしたちを救い出して下さいました。この年、今までになくキリストの苦しみにあずかった者は、今までになく祝された年であることをあかしして、神に感謝することができるよう。個人的には、わたしの生涯の最も悲しい年でもあり、また最も祝された年でも

ありました。他の人々もある程度まで同じ経験をしたと信じています。わたしたちは神の真実をわきまえ知らなければなりませんでした。危険から救い出される力はもちろん、苦しみの中でささえて下さる主の力、苦難を忍ぶ力をわきまえ知らなければなりませんでした。もつと大きな危険がわたしたちを待ち構え、もつと深刻な悲しみが襲ってくるならば、神に對するもつと強い確信をもつてそれを迎えるように望むべきです。

一つの点で大いに感謝しなければならない理由があります。わたしたちには、中国人のクリスチャンに対して、彼らもわたしたちも同様に危険な立場にいるのであり、将来もこれと同じ立場に立たされうることを示す役割がありました。彼らはまず、外国人は不確実でたよりにならないことを悟り、それから、さまざまの責任を持った地位にいるわたしたちが、静かに喜んで事に当たったという事実から、彼らが「外国勢力」よりも神ご自身をたよるようになったことは疑いありません。もしわたしたちが、この機会を、彼らの前進に役だたせることに少しでも失敗したり、わたしたち自身、危険の中でさえ助けて下さる神の力を信頼しないで、不安を感じるようなことがあれば、忠実な契約の神の前に、へりくだって、このことを初めとしてすべて気がついた失敗を、告白しようではありませんか。主は最善をご存じのかたなのですから。わたしはわたしたちひとりひとりが、それぞれの立場に、主によつてつかわされたしもべであり、そのところで主のわざに従っていることに全く満足していると信じます。主は、戸を開放してわたしたちを導き入れて下さいました。過去に起きたただならない事態においても、主はわたしたちを守って

下さいました。わたしたちが宣教活動に当たるのは、これが安全であり、容易であるからではありません。わたしたちは主が召して下さったので中国に来たのです。人間的な保護や保証のもとで、今の立場に立ったのではなく、わたしたちは主の臨在の約束にたよってこの立場に立っています。楽であつたり、困難であつたり、外面的な安全や危険、認められるとか認められないとかいったことは、わたしたちの仕事には何も影響しません。わたしたちを取り巻く環境がことさらに危険に思われる時、わたしは主にある確信の深みと現実性を示すべき恵みを与えられると信じます。わたしたちは、死からさえものがれようとされなかつたよき羊飼いに従うものです。このことを明らかにする責任を、そのご忠実さによつて果たさせていただく恵みも与えられると信じます。しかし、もしわたしたちが、その時にこのような態度を示そうとするなら、今、必要な恵みを求めなければなりません。敵がやつて来てから初めて、武器を求めたり、訓練を始めたりするのはおそすぎます。

物質的な必要について、テラーは続けて言う。

必要の時に、いずれかの献金者を通して直接与えて下さった主の豊かな助けについても、主が真実であつてご自身をいなむことがおできにならないという幸いな事実についても、申し上げる必要はありません。もし、真に主に信頼し、主に求めるなら、はずかしめられることはありません。もし信頼できないなら、他のいかなる基礎も健全ではないことに早く気づけば気づくほどよいでしょう。ミッシヨンの資金や献金者

は、生けるキリストと代えるためには貧しいものです。

悲しみの日と重荷の夜の連続は、一八七一年初頭に、肉体的な挫折となつて現われた。テラーは、肝臓の調子がひどく悪くなり、夜もよく眠れず、精神的にも苦しく圧迫されていることに気がついた。胸の苦しみ・苦痛ばかりでなくて、呼吸に深刻な支障をもたらしていた―によつて、状態はさらに悪化していた。それに時間がたつても彼の喪失感はやがなくなつた。彼がすでに経験し、すばらしい活力になっていた、あの約束の新鮮な力と美とを見いだしたのは、こうした環境においてであつた。「わたしが与える水を飲むものは、だれでも」、ギリシア語の動詞の現在時制によつて示された継続的な習慣という考えが、新しい意味をもつてこのみことばのうちにあふれ、長く感じられていた必要を満たしたのである。

以下は、後年彼がしばしば口にしたことである。

みことばに変更を加えたりしないようにしましょう。「飲むだものはだれでも」ではなくて、「飲むものはだれでも」なのです。主が語っておられることは、一度ひと飲みするだけではありませんし、何回も飲むのもありません。絶え間ない魂の習性のことです。ヨハネ六章三十五節で語られている完全な意味は、「わたしのところに習慣的に来るものは、決して飢えることがなく、決してかわくことがない」ということです。信仰をもつて主に来る習慣は、満たされない空腹とかわきとに比較すべきではありません。

わたしたちの犯すあやまち、かわきがなお続いているのに飲むことを過去におきざりにしている、という点にあるようで

す。たいせつなことは、飲んでいることです。生命の水を心の奥深くまで飲むようにさせる一つ一つの機会について、感謝をすることです。

注

①揚州事件ののち、まもなく生まれた四番目のむすこだけが、テラー夫妻とともにいた。

②バーガーは書いている。「わたしの生涯を通じて、わたしたちのミッションに関することでも、大きくは世界情勢に関することでも、これほど多事な年はなかった。ローマ市はいまや自由イタリアの首都になったと思われる。フランスはひどく打ちのめされ、教皇の世俗の権力は、もう過去のものとなった。中国は、福音の使者をも含めた外国勢力の駆逐のために立とうとしているようだ。わたしたちは個人的には、最も愛する友であるばかりでなく、中国の無数の魂のために見いだしうる最も献身的な働き人を失うという苦しみをなめた。「静まつて、わたしこそ神であることを知れ」とは、こうした時にふさわしいことばである。このみことばに心を用いることができるように、主の恵みを析る」。

一六 あふれ出る

あなたの強いみ手のうちにわたしは休む

それで見わざは成し遂げられる

全能のおかたのように

不思議に働けるかたがどこにいるだろう

チャイナ・インランド・ミッションの指導者として、ハドソン・テラーには、この時からなお三十年間の活動的な生涯が残されていた。彼がこの責任を果たし終えた日から今日まで、すでに三十年以上が経過した。二世代に当たる六十年の年月は、その実によつて木を知るのに十分な期間であつた。言い替えるならば、神に根ざしていた彼の生涯の信仰と喜びの結果がなんであつたかを明らかにするのに、十分な期間があつたのである。もし今まで見てきた経験が、感情的で非現実的なものであるなら、またもし、霊的なものが同時に実際的でなかつたなら、さらに神が経済的な保証や人間的な保護がなければ、ご自身のわざの必要のために、十分に備えられないおかたであつたなら、時間という試験は幻影を消し去つてしまつたに相違ない。しかし、そのすべての制約にもかかわらず、ハドソン・テラーが主イエス・キリストとの生ける一致と力と祝福の秘訣を見いだしたのなら、その結果は残る。永遠に残るであらう。

神にできないことはない

人にある神の力なるキリストに

できないことはない

キリストにあつて全く新たにされ
造り変えられて

罪の支配から自由にされたわたしに

できないことは何もない

一八七〇年の試みの日々、ハドソン・テラーは、まだ三十代の若きであつた。ミッションの働き人は、わずか三十人であつた。伝道所は三つの省で開かれ、回心者たちは十ないし十二の小さな教会に集まつていた。そのころは、まだ、なんでも小規模に行なわれた時代ではあつたが、すべてがただひとりの人の上にかかつてくると、その重荷は相当なものであつた。彼は中国におけるこのような五年間の年月のために、疲れ果てていた。

一八七一年の終わりになると、本国側でミッションの世話を献身的にしていたバーガー夫妻が、激しい仕事にもはや耐えられなくなつていた。すっかりからだが弱くなった夫妻は、しかたなく外国で冬を過ごさなければならなくなり、セント・ヒルの家を売却し、すべての通信や経理の事務、編集の仕事、宣教師候補者の試験などに加えて、実際の運営面の細かい仕事までも、他の人に譲らなければならなかつた。しばらく英国に残つてバーガー夫妻に代わつて責任をとらなければならなくなつた時、愛による思いやり深い結びつきに変わりはなかつたが、彼はみじめな気持ちを味わつた。

セント・ヒルと、ロンドン北部の郊外の小道、パイヤランド・ロードとは、はなはだしく相違していた。バーガーの図書室と、書斎兼事務所の小さな裏べやとも、また大きな相違があつた。しかし「六番地」と、必要に迫られて購入した続きの

建物との一つ一つは、多くの人々にとって、親しくきよい思い出となった。二十年以上もの間、本国でのミッシェンの仕事は、現在の本部からほど近いこのセンターで行なわれていた。階下のへやを二つ続けて毎週の祈祷会が行なわれ、「七人組」と「百人組」を含む献身的な多くの男女がこの家のドアから出て行った。しかしこれは、テラー自身が、中国での奉仕の指導者と、ミッシェンの運営者を兼ねていた一八七二年よりずっとあとのことである。その年の初めに彼は書いている。

わたしの道は、とても楽とは言えませんが、わたしはこれ以上、イエスにあつて幸福だったことはありません。主が見放されないことを確信しています。しかし、ミッシェンの初めの日から今日まで、これほど神に向かわされたことはありません。神に向かうことは、疑いもなくよかつたことです。困難は、主がご自身を示しうる舞台のようなものです。それなくしては、わたしたちの神がいかに優しく忠実であり、また全能のかたであるか知るよしもあります。バーガー夫妻が働きを続けられなくなつたことは、わたしにとって少なからぬ試みでした。ほんとうに彼らは愛すべき人たちです。わたしの思いからほとんど消え去ることのない先立つた妻が関係している過去とのつながりを、もう一つ断たれたように思われます。しかし、みことばは、「見よ、わたしはすべてのものを新しくする」と断言しております。

ミッシェンに課せられた大事業の推進を熱望していたテラーにとつて、日夜、きまりきつた事務に縛られていることは、相当つらかつたに相違ない。主が御旨を示されなかつた間は、新

しい計画を推し進めようと急ぎはしなかつた。しかし、ふさわしい助力者を求める祈りが答えられそうもなく、もつと重要だと考えたい仕事ができることのできない時、がまんがでなくなつて、失望したりすることも一再ならずあつたであろう。彼は同じような試みの中にいたある人と、学んでいた教訓を分け合おうとして言っている。

神がわたしをこのわざに召し、今のところで、今のような状態に、わたしを置いていて下さることを知るのは、少なからぬ慰めです。わたしは自分でこの地位を求めたものではありません。自分からやめようとも思いません。主はわたしをここに置かれた理由―何をなすべきか、学ぶべきか、苦しむべきか―をご存じです。「信ずる者はあわててゐることはない」。このことは、わたしにとつても、あなたにとつても、簡単に学びうることでありません。正直に言つて、わたしはそれを徹底的に学ぶなら、その十年の期間は少しもむだではありません。…モーセはそれを学ぶのに四十年間も訓練されたようです。あわてて短気になつたり、衝動的になつたりすることがないように、お互いに気をつけましょう。

この制約された生活は、その間の主イエス・キリストとの真の交わりによつて実を結んでいた。その影響が特に青年たちに現われたことは注目に値する。忙しいロンドンで、賢明なひとりの青年が、主に心をゆだね、生涯をささげて中国で奉仕をする機会について知りたいと願つていた。彼は、パイヤランド・

ロードに行つて、祈りのために簡素なへやに集まつている群れに加わつた。のちにこの青年は回想している。

入り口からはいつた所に、「わたしの神は……あなたがたのいつさいの必要を……満たして下さるであろう」という聖句が大きな字で書いて掲げてあつた。わたしはそれまで、壁に掲げた聖句を見なれていなかったもので、それは深くわたしの心に刻み込まれた。十二、三人から二十人ほどの人が出席していた。

テラー氏は、賛美歌を選んで集会を始め、みずからオルガンをひいて歌をリードした。彼の姿は、わたしにはあまり印象的ではなかったが、ほっそりとした静かな声で話した。たいていの青年と同様にわたしも、力と騒音とを結びつけて考えていたのであらう。そして、指導者の素質を肉体的な存在に求めていたのだと思う。しかし、彼が「祈りましょう」と言つて、その集会の祈りを導いていつた時、わたしの考えは変わつていつた。わたしは今まで彼のように祈る人を知らなかった。そこには、単純さ、優しさ、大胆さがあり、わたしを押えて従わせる力があつた。神が彼をご自身との近い交わりの内側に導き入れておられることが明らかであつた。こうした祈りは明らかに密室で長い間続けられた祈りの結果であり、主からしたたるしずくのものであつた。

それから、公開の席で人々が祈るのを何回も聞いたが、テラー氏とス波尔ジョン氏の祈りは傑出してゐる。彼らの祈りを聞いた者で、だれがそれを忘れられるだろうか。ス波尔ジョン氏の祈りを聞いたことは、生涯の大きな経験であつ

た。彼は六千もの大会衆の手を取るようにして聖所に導いて行くのであつた。また、テラー氏が中国のために切願するのを聞くのは、「義人の祈りは大いに力があり、効果のあるものである」ということの意味を知らせてくれるものであつた。その集会は四時から六時まで続いたが、わたしは出席した中でいちばん短い祈祷会のものであつた。

西部イングランドから、教育のある洗練された娘がひとり、ミルドメイ修養会に出席するためにロンドンに来て、パイヤランド・ロードで客となつてゐた。彼女はテラーが大ホールに満ちた二、三千人の聴衆に開会の説教をするのを聞き、彼がキリスト教界の思想的な指導者たちに、どのような影響を与えたかをまのあたりに見た。しかし、何よりも彼女が強い印象を受けたのは、ミッション・ハウスでのテラーの日常生活である。彼は、日々にミッションの重荷を負い、日々に主にある喜びをもつて信仰の試みに直面してゐた。ミス・ソルトーはずつとあとになつて書いてゐる。

周囲の人々に対しては何も言わないで、わたしたちの必要を、ただ主におのみ知らせしようというテラー氏の勧めを思い出します。ある日、ささやかな朝食を済ませてから、昼食のためにほとんど何も残つていなかった時、彼が子供の賛美歌を歌うのを聞いて、非常に感動を覚えました。

主われを愛す　主は強ければ
われ弱くとも　恐れはあらじ
わが主イエス　わが主イエス

わが主イエス われをあいす

それから彼は、わたしたちを呼び集めて、主の変わらぬ愛のゆえに感謝し、わたしたちの必要を告げ、約束に答えていた。だくためにともに祈ったのです。

バーガーの隠退後、テラーは資金の不足によって失望するどころか、いまだかつてないほど前進に向かうはつきりとした姿勢をとっていた。ある日、パイヤランド・ロードで、中国の大地図を前にして彼は、そこにいた二、三人の友人に向かって語っていた。「みなさんには、未伝の省にふたりずつ、十八人をつかわして下さることを、わたしとともに神に願う信仰がありますか」。

ミス・ソルトーはそのグループのひとりであつて、その地図の前で、十八人の伝道者が与えられるまで毎日祈る、と真剣に約束しながら手を置き合つたことを、今でも覚えている。その信仰について疑いはしなかつたが、きたるべきより大きな拡張について想像さえした者があつただろうか。ミス・ソルトー自身がミッシヨンの発展のために重要な役割を果たすようになることについて、あるいは前述の青年「M・M・ボーラー」のしようとする独特な働きについて、少しでも考えた人があつただろうか。このふたりはともに、テラーの生活から無意識にあふれ出るものを通して、この時に、この事業に加わつたのである。

こうして待機している間にも、実りは豊かであつた。中国に帰れるようになったテラーは、背後に、メイヤランド・ロードの家と、子供たちの責任をとってくれるミス・ブラッチリーと、ロンドンに友人たちによる委員会を残して行くことになつ

た。彼が名誉書記たちに引き渡したのは、多額の残金ではなかつた。テラーの手もとにあつたのはすべてで二十一ポンドであつた。しかし、借金はなかつた。テラーがミッシヨンの友人に次のように書いたのも確信をもつてである。

いまや、このわざは成長し、国内でも、国外でも、さらに多くの働き人が必要であります。しかし、依然として行動の原則は変わっておりません。今までと同じように金銭の援助は祈りによつて神に求めるでしょう。主はそれを、ご自身の管として用いるのにふさわしいと見る人々の心に示されます。手もとにお金がある時、それは中国に送られます。ない時には何も送られません。そしてわたしたちは、本国に依存する手形を切つたりはしません。負債を背負うことがないためです。前のように信仰が試みられるべきであるならば、今までもして下さつたように、主はご自身の忠実さを明らかにして下さい。わたしたちの信仰が忠実でなくても、主の忠実さはみことばのように変わらないでしょう。「わたしたちは不真実であつても、彼は常に真実である」。

十五か月の不在ののちに、ミッシヨンの指導者ももう一度中国に着いた時ほど、この確信が必要な時はなかつた。病氣やその他のさまざまな障害によつて、以前からあつた伝道所のうち、数か所は失望すべき状態であつた。小さな教会は、以前のようではなく、伝道所も人が足りなくて閉鎖した所があり、テラーは彼らに必要な助けと励ましを与えるのに、どこから始めてよいか、ほとんどわからないほどだった。未伝の省へ前進する計画の代わりに、彼がなしたえたのは、既存の仕事を確立させ

ることであつた。生涯を通して神が働いて下さった献身的な配偶者を与えられたのは、大きな慰めであり、幸いなことであつた。杭州の婦人の間で非常に愛された指導者であつたミス・ホールディングが、彼の二度目の妻となつた。彼女は彼のかたわらで儀式的な奉仕を始めた。三十三年間も、ミッシヨン全体の交わりの中で、彼女はまことに幸いな存在となつた。彼ら夫妻は別れて暮らすことがよくあつた。雪が深く積もる寒さの中で、彼自身がしなければならぬ旅行を、感謝して彼女に代わつてもらふこともあつた。それは少なからぬ犠牲を意味するものであつたが、彼女は喜んで夫に代わつて旅行に出て行つた。

明日、教会の信者と、求道者を食事に招きます。皆いっしょに集まることを願っています。主がわたしたちを祝福して下さいますように。事態は非常に失望させられるものですが、彼らは絶望してはいません。めんどろを見さえすれば、彼らは神の祝福によつて、まもなく上向きになるでしょう。

「めんどろを見さえすれば、彼らは神の祝福によつて、上向きになるでしょう」とは、テラーの実際の性質をよく特徴づけていることばである。みづから最も困難なところに立ち、聖霊の促す力にたよつて、祈り深く、忍耐をもつて進み、困難を乗り越え、回心者にも宣教師にも新しい熱心を注ぎ込むのであつた。揚子江の沿岸で彼は、夫人と合流し、南京で三か月間過ごし、多くの時間を直接伝道に用いた。そこから彼は書いている。

毎晩、写真と幻燈で多くの人が集められた。：昨晩はゆうに五百人は集まつた。中には長くない者もあつたが、三時間近くもそこにいた人々も多かつた。主が魂のために、わたしたちの滞在を祝して下さるように。：毎日、午後になると婦人たちが会いにきて話を聞いた。

テラーがミス・ブラッチリーにあてた手紙の中で語っているところから、内的なささえについて何かを知りえよう。彼は書いている。

あなたがもし、あの泉から水を飲み続けておられるなら、あなたの生命から何があふれ出るでしょうーイエス、イエス、イエスですー

この意味では、彼が持ち運んだのは、あふれ出るさかずきであつた。

まさに、あふれ出るものが必要であつた。この訪問の目的は達成され、テラーが、少なくとも、一つ一つの伝道所、集会所のほとんどを訪れるまで続けられた。彼はこれで満足せず、いたるところで中国人の指導者を尋ねて回つた。伝道者、文書販売員、教師、婦人伝道師が、ほとんど例外なく彼の助けを得た。テラー夫人がいっしょにいる時は彼の大きな助けとなつた。彼らは時には深更に及ぶまで手紙を書いていることもあつた。医療旅行でも、彼女は実によい協力者となつて彼を助けた。病人のいる所では、彼女が残つて世話をし、彼はさらに別の所へ行くということもできた。当時、医療の知識を持つてい

たことを、彼らはどんなに感謝したことだろう。開港都市以外のどこにも、またミッションにも、彼のほかには医者がいなかったからである。しかし、この事実は言うまでもなく、テラーにとつては少なからず負担が増すことであつた。たとえば、ある伝道所に着いた時、そこには九十八通の手紙が彼を待っていたが、すぐ翌日には、杭州での貴重な働き人であるア・リヤンの乳児のために処方箋を作らなければならなかつた。予期していなかつた長文の手紙を書かなければならない事態が起こつても、予定外の旅行の必要が起こつても、人々の助けとなるならば、その手段の一つ一つに、彼は深い感謝をしていた。「すべての人に仕える」ことは、彼が最も願ひ求めていた特権であつた。九か月ほどたつてから彼は、次のように書きしるすことができた。

主は、わたしたちを大いに恵んで下さる。ここでの仕事は着実に成長を続けている。特に最も重要な現地民による助力がうまくいっている。働き人たちが自身が多く助けを要し、世話を受けたら、教えられたりする必要があるが、その数だけではなくて能率的な働きにおいても、いよいよ成長している。中国の望みは明らかに彼らの肩にかかつている。外国から来た宣教師は、建設中の建物の回りにある足場のようなものだと、わたしは考えている。それがいらなくなる日が早ければ早いほどいい。否むしろそれが他の場所と同じ臨時の目的に用いられるようになる時が、早ければ早いほど喜ばしい。

絶え間ないこれらの働きと切り離すことのできなかつたものは、祈りとビジョンであつた。直接の必要があまりにも大きかつたために、遠隔地の大きな必要の緊迫感を失つてしまひやすかつた。特に、直接の働きの資金さえ十分でない時にはなおさらであつた。しかし、テラーについては、まさにその逆が真実であつた。伝道所の間をあちらこちらと長期の旅行をしながら、親しげな、近づきやすい多くの人々の住む地方を通過して行つたが、彼は遠近にかかわりなく、未伝の地のためにいよいよ心を用いていたのである。彼はロンドンの委員会にあてて書いている。

先週は、太平（タイピン）におりました。ちょうど市場の開いた日であつたので、三、四キロの間、道路には人がいっぱいにあふれていて、ほとんど歩けないくらいでした。これを見て、わたしは非常に心を動かされました。わたしたちは継続的な働きの場所を求めておりましたので、説教はほんのしばらくの間だけしかできませんでした。がしかし、そのあとで町の城壁の所まで退き、ご自身がこの人々にあわれみを与えて下さるように、彼らの心を開いて下さり、わたしたちが彼らの間にはいつて行けるようにと、神に向かつて祈り叫ばないではいられませんでした。わたしたちの側では何もありませんでしたが、四人の求める魂が近づいて来ました。どのようにしてだか知りませんが、ひとりの老人がわたしたちを見つけ出して、舟までついて来ました。わたしは彼を招び入れて、名前を尋ねました。すると彼は、「わたしの名前は陳です」と答えてから、次のように話しはじめました。

「わたしは解決のできない問題で苦しんでいます。というの

は、自分の罪をどうしたらよいのか、ということです。わたしの国の学者たちは、死後の世界などはないと言うのですが、わたしには信じられません。先生、わたしは床について考えます。日中でもひとりすわって考えます。考え、考えするのですが、罪についてどうすればよいか、わからないのです。わたしは七十二歳です。もうあと十年も生きられないでしょう。きようあしたの運命を知らない、というのは、確かにことわざのとおりです。罪についてどうすればよいか、教えていただけないでしょうか」。

「もちろん、お教えできません」とわたしは答えました。そして「わたしたちが遠くからここへ来たのは、実はこの問題に答えるためです。どうぞ、聞いて下さい。あなたが願い、必要としているものがなんであるか、説明いたしましょう」と申しました。

わたしの同労者が帰って来てから、彼はもう一度、十字架のすばらしい物語を聞き、わたしたちがこの町に家を借りたこと、またまもなくキリスト教の文書販売人が来て住むようになることを願っていると聞いて、喜んで帰って行きました。これは、わたしたちにとつて喜ばしいことであり、大きな慰めでもありました。

このような仕事を必要としていた町が、浙江省だけで五十以上もあった。キリストのあかしの全くない町々である。奥地には、何百万もの人たちが待っている。ひとり舟の中でテラーは、その重荷を主にのみゆだねることができた。信仰は強められた。彼の聖書の一冊には、その翌日の一八七四年一月二十七日に、次のように書き込まれているのが見られる。

浙江省の中で、なお働き人のない四つの都府と、四十八の県の働きを開始するために必要な五十人ないし百人の中国人の伝道者と、必要なだけの宣教師を与えて下さるように祈った。さらに未伝の九つの省に進出する働き人たちのためにも祈った。イエスのみ名によって祈り求めたのである。主イエスよ、信じていこうためのお約束を下さったことを感謝します。どうか、あなたのこの偉大なみわざに従うために、体力と知恵と魂に恵みを与えて下さい。

しかし、奇妙なことに、そのあとに続いてやってきたのは、体力が増し加えられることなく、重い病気であった。一週、一週、彼は苦しみのうちに、力なく横たわり、ただ信仰によって天からの幻を持ち続けることができるだけであった。資金は数か月の間欠乏が続いていたので、はいってくるわずかなものを、どう分配すればよいか、わかりかねるほどだった。仕事の拡張のために使用できる資金は、全然手もとにない始末だった。しかし彼は、ロンドンにいる書記たちに対して、「わたしたちは、内陸に向かって働き続けています」と書いている。

「わたしは、まもなく、いくつかの貧しい省が教化されるのを、ほんとうに見たいと思います。日夜これを切望し、祈っています。主がこのわたしよりもみ心をお用いにならないことがありうるでしょうか」。

この時期ほど、前進が困難に思われたことはない。しかし、彼の前に置かれた聖書には、神と取り引きした彼の魂の記録がある。彼の心には、中国の内陸部のために、すでに神の時が来たのも同然だという確信があった。からだは徐々に回復に向かっ

ていた。そのころ彼の手もとに、一通の手紙が英国から運ばれてくる途中であつた。その手紙は二か月以前に、未知の人が、震えるような手つきでしたためたものであつた。

「愛する先生、み名を賛美いたします。二か月以内に、わたしはチャイナ・インランド・ミッションの仕事の前進のために、八百ポンドを送り、あなたの委員会にご自由に使用していただくためにゆだねたく願つております。念のために申し添えますが、これは、未伝の省のためのものです。

あなたの領収証の書式は、きつと美しいと思います。「主はわが旗」、「主は備えたもう」。もし、信じて賛美するなら、万軍の主がそれを尊ばれることを確信しております。

新しい省のために八百ポンド回復期にあつた病人は、自分が正しく読んだのかどうか、全く確信が持てないほどだつた。彼の心に秘められていたことが、その外国からのびんせんによつて、もう一度現わされたような気持ちであつた。彼が自分の聖書に祈りを記録するよりも前に、その手紙は投函されていて、今、それがいちばん必要な時に、すばらしい保証とともに彼の手に届いたのである。神の時は確かに来た。

彼は病室から揚子江沿岸にもどつた。この春、杭州では注目に値する会合が開かれた。ほとんどすべての伝道所で、中国人の間に新しい生命のいぶきが見られるようになった。教会には回心者が加えられつつあり、現地人の指導者たちはいよいよ熱心になり、用いられるようになっていた。大きな働きの場で、大きな必要を感じさせられていた年輩の宣教師たちは励まされ、中国語の学びにより成果をあげていた若い宣教師たちは開拓伝

道の開始を切望していた。伝道所を離れることのできた人たちはみな、テラーとともに祈り、修養会を開くために集まつた。これは、ジャッドと彼が長い間祈つてきたミッションの西部支部のための基地を求めて、揚子江を上つて行く以前のことであつた。テラーは杭州から書いている。

資金が非常に欠乏している時、わたしたちを励まされるとは、主はすばらしいかたではありませんか。

信仰の生涯について深い経験をしたある友人にあてて、彼が書いた手紙からも判断できるように、新しい喜びと希望の原因になつたものは、物質的な豊かさなどではなかつた。

わたしたちの働きが、これほど激しく試みられ、信仰の苦しみを経験したことはありませんでした。愛する友ミス・ブラッチリーの病氣と、わたしに会いたいという彼女の強い願い、愛する子供たちの必要、資金の状態、本国に帰る人々、新しく来る人々、事業の拡張、これらを初めとして、簡単には書き表わせないような多くのことを、みずから負おうとすれば、耐えがたい重荷となつたことでしょう。しかし主は、わたしたちをささえ、また、わたしたちの重荷を負つて下さいます。主プラス銀行預金ではなく、ご自身にあつてわたしたちを大いに喜ばせて下さいます。それでわたしは、思い煩いや心配から解放されて、これまでになかつたほどの自由を与えられております。

何週間か前に、わたしが上海に着いた時、すぐに資金が必要でした。郵便は二度配達されていましたが、送金はありません

んでした。帳簿によると、本国には残金がなく、わたしは主に重荷をゆだねました。翌朝、目がさめると、また心配を始めそうになりましたが、主がみことばを与えて下さいました。「わたしは彼らの苦しみを知っている。わたしは下つて…救い出し」、「わたしは必ずあなたと共にいる」。朝六時前にわたしは主の助けの近いことを確信しました。昼近くになり、寧波から回送されたために非常に遅れて届いたミューラー氏からの手紙を受け取りました。わたしはすでにその朝、この時と変わりないほどの確信を与えられていました。が、そこには三百ポンド余りがいっていました。いまや、わたしの必要は大きく、急を要していましたが、主はまた、今までよりもっと偉大な、もっと近いおかたとして、臨在を示して下さいました。主がおられる以上、また、主がまことに主であられる以上、すべてが善でなければなりません。事実、主は善であり、ずっと善であり続けるでしょう。愛する兄弟よ、生ける神を知る喜び、特異な環境において生ける神にこういう喜びは、いかばかりでしょう。わたしはただ、主の代理人にすぎません。主はご自分の名譽を守られ、その仕え人の必要を整え、わたしたちのすべての必要をご自身の富にしたがつて与えられます。そして、あなたは祈りと信仰のわざと愛の労苦によつて助けて下さるのです。

ほぼ同じころ（一八七四年四月）に書かれたテラー夫人へのたよりの中にも、同じような確信のいぶきがうかがわれる。

「きのう、残金は八十七セントでした。主は支配される。ここにわたしたちの喜びと安息とがあります」。ボーラーに対して

は、残金がわずかだった時彼は、「これだけの金と、神のすべての約束とがあります」と付け加えている。

二十五セントプラス神のすべての約束。彼はクリーサス（訳者注、昔のリディアの富裕な王）ほどの金持ちのような気がして歌うのだった。

世界じゅうのどんなよいもの

どんな偉大なものとも

わたしは恵まれた財産を替えたくない

信仰の守られるかぎり

わたしは罪人の黄金をうらやみはしない

その春開かれた杭州での修養会の賛美歌は「いかにもして主は備えられる」であつた。テラーがミス・ブラッチリーに次のように書いたのは、このことを考えてであつた。

わたしたちが待ちさえすれば、主は備えて下さることを確信しています。わたしたち、つまり、ジャッド氏とわたし自身は、本部を確保できるかどうかを調べに、まもなく武昌（ウーチャン）へ行きます。主が与えて下さる力によつて、

そこから中国西部地方の働きが進められて行くはずで、またことに力のない状態ですが、未伝の地方の必要を考え、またその働きのために資金が備えられていることを考える時、今この努力をなすべきだと強く示されます。一般会計は全くゼロの状態なのですが…来月いっぱい、どのようにして助けられるか、わたしたちには想像もできません。しかし、助けられることを十分に予期しています。主は、わたしたちを見放す

ことができませんし、そうならしないでしよう。

しかし、ちょうどこの時、新しい問題が起こって、この働きの開始が遅れることになった。終わりまで勇敢で忠実であったミス・ブラッチリーの健康は、あまりに多くの責任のために、すっかり衰えてしまった。

パイヤランド・ロードの子供たちの世話をする人が必要となり、本国での仕事もほとんど停止してしまった。彼女は豊かな賜物を持つ献身的な人であったので、いろいろなことがもつともっと彼女の手に集中される傾向があった。ジャッドが武昌に定着するのをただ待ちながら、テラー夫妻は本国に急行した。しかし、まだ中国を離れることができないでいるうちに、彼らが助けようと願っていた愛する友は、すでにすべての重荷を降ろして、み国に帰ったのである。

数週間後、本国に到着し、ミス・ブラッチリーのところがからっぽになっているのを見いだすのは、奇妙でもあり、悲しい思いでもあった。子供は四散し、毎週の祈り会は中断していた。それでもまだ最悪の事態にはなっていなかった。テラーはジャッドと揚子江をさかのぼって行く途中で、転倒してかなりの傷を受けていたが、ロンドンでの忙しい生活が影響して、英国に帰って何日かたつと、背骨の打撲傷がだんだんとひどくなっていた。そのうえしだいに両足が麻痺してきて、完全に寝台に縛りつけられてしまった。生涯の重大な時期であるにもかかわらず、仕事を離れてあの二階のへやに寝ているよりほかになかった。彼はしなければならぬことすべてと、果たされていないすべてを気かけながらも、神にある喜びのうちに寝ていた。

神にある喜び―彼の心にはいろいろのことがあった。彼の願いと希望は、心に迫ってくる人々の必要と同様に、かぎりなく大きくなつてゆく。彼は祈り、神は答えられた。中国では機会が備えられ、本国では霊的な祝福が多くの教会をよみがえらせており、彼は、これが外国伝道に結びつけられるようにと切望していた。人間の目から見れば、とても再起の望みは持てないような彼の状態であった。しかし、こうしたすべての状態の中で最も強く感じられていたのは、「善であつて神に喜ばれ、かつ、全きものである」という神の御旨にある喜びであつた。この苦難の場所から、チャイナ・インランド、ミッションがさらに大きな規模での成長を始めたのである。四本柱のついた小さなベッドは、この時テラーが閉じ込められていた領域であつた。しかし、そのベッドの柱の間には、その時もなお、中国全土の地図が掛けてあつた。彼の回りには、昼も夜もイエスの名によつて近づくことのできるおかたの臨在があつた。ずつとのちになつて、完全に祈りが聞かれ、ミッションの開拓伝道者たちが、内陸の各省全域にわたつて遠く広くキリストを宣教していた時、スコットランド教会の指導者のひとりがテラーに向かつて言つた。

「あなたは神様があなたを不思議に用いられたために、時には誇らしい気持ちになられたことでしょう。現在の人で、あなた以上の名誉にあずかつた人はいないのではないでしょうか」。

「よくわたしはそれとは逆に、神様がお用いになることができに足りるほど、小さく、弱い者を捜され、わたしを見いだされたのだと考えます」。これが彼の真剣な回答であつた。

状態は、年の終わりに近づいても一向に好転しなかった。テラーはますます動けなくなり、彼の上に取り付けられたひもの助けを借りて、ベッドの中で向きを変えるのがやっとだった。最初のうちこそ少しは書くこともできたが、もうペンを持つことができなくなつた。事情によつては、テラー夫人さえ、看病ができないこともあつた。「祈りへの訴え―一億五千万以上の中国人のために―」と題された小論文が、あるキリスト教出版社に持ち込まれたのは、こういう一八七五年の初頭であつた。そこには未伝の九つの省に関する事実とミッシェンの目的とが簡単にしるされていた。それによると、「これらの地方に福音を伝える特別な目的のために、最近四千ポンドがさげられた。中国人のクリスチャンたちは、このわざに参加する備えがある。緊急の必要は、より多くの宣教師であり、道を切り開きながらどんな困難にも喜んで直面しようとする青年である。読者のおひとりとおひとりが、ただちに神に向けて、神が今年、この仕事のために献身する十八人の適当な人をおこして下さるようにと、一分間でもよいからせつに祈つていただきたい」ということが述べてあつた。

その訴えには、ミッシェンの指導者が、どう見ても望みのない不具者であるとは言つていなかった。そこにはまた、ささげられた四千ポンドが、彼自身と妻との資本を聖別してささげたものであることにも言及していなかった。さらに、二、三年前に、与えられるまで十八人の伝道者のために信仰をもつて祈るという約束がなされたことにも触れていない。しかし、このさやかな印刷物を読んだ人たちは、その背後になみなみでないものがあることを感じ取つた。神に深く根ざす者による以外には考えられないような状態で、人々は動かされた。

こうしてまもなくテラーの通信量は非常に多くなつた。そのことに取り組むこと、いやむしろ、神がそれをどのようにに取り扱われたかを見ることは、彼の大きな喜びであつた。彼はこの時のことを次のように書いている。

ミッシェンには有給の働き人はいません。しかし、神は毎日わたしの口述を書き取るように志願者を導いて下さいました。別にそう定めておいたわけでもないのに、もし午前中に来た人が手紙の回答を全部書き終わるまでいられなければ、必ず他の人がやつて来るのです。午後になるとひとりかふたりの人がのぞいたりします。時には、町で勤めている若い友人が、仕事が済んでからやつて来て帳簿をつけてくれたり、書き終わつていなかった手紙を完成させてくれたりしました。これが毎日毎日のことなのです。わたしの生涯で非常に幸いであつた時期の一つは、この床についていなければならなかつた時でした。自分では何もできなくても、主にあつて喜び、忍耐をもつて主を待ち、すべての必要が満たされるのを見たその時です。その時以上に、規則的に、すみやかに手紙の返事を書いたことは、そのあとにもありませんでした。神に求めていた十八人がやつて来はじめてました。初めは手紙の往復があり、それから彼らは、わたしに会いにこのへやにやつて来ました。まもなく、わたしのベッドのかたわらでは中国語の勉強のクラスが開かれました。時が至つて主は、十八人のすべてを送つて下さいました。それからミルドメイにいる親友たちがわたしの回復のために祈りはじめました。主は用いられた手段を祝され、わたしは立ち上がることができました。わたしが病床についた一つの原因は取り除かれまし

た。もしもわたしがじょうぶで、あちらこちらを動き回ることができたら、わたしの緊急の訴えの結果として十八人が中国へ送り出されたのであって、神の働きではないと考える人がいたかもしれません。しかし、わたしは完全に病気で倒れてしまい、祈りの求めを書いてもらうことしかできませんでしたので、これがわたしたちの祈りへの答えであるということとは、あまりにも明白でした。

この時の資金のための祈りに対する答えもまた、すばらしいものであった。ある時、中国へ電報で送られるはずのその月の送金額がはなはだ少額で、毎月の必要経費の平均より二百三十五ポンドほども不足していた。このことは、はつきりとした祈りのうちに主の前に持ち出され、ほどなく恵みによって答えが与えられた。その同じ晩に郵便配達が、記名式の小切手が一枚同封してある手紙を配達してきた。そこには、「お皿の販売から」と書いてあり、小切手の額は二百三十五ポンド七シリング九ペンスであった。ふたたび外出ができるようになった時、テラーはある集会からの帰り道で、彼の話聞いたロシア人の貴族に誘われた。ロンドンまでいっしょに旅をしてからこのボブリンスキー伯は、さいふの中から紙幣を取り出して言った。

「わずかばかりですが、中国でのあなたの働きのためにささげさせて下さい」。

テラーは手渡された紙幣が小額のものではなかったもので、何かのまちがいに相違ないと考えて言った。

「五ポンド下さろうとなさつたのではないでしょうか。このお札をお返しさせて下さい。これは五十ポンド札です」。

伯爵もテラーに劣らず驚いたようである。そして次のように述べた。

「いいえそれをいただくわけにはいきません。わたしが差し上げようと思ったのは、確かに五ポンドなのですが、神はあなたに五十ポンドあげようと思われたのに相違ありません。それを返していただくわけにはまいりません」。

このできごとに深い感銘を受けてテラーが、メイヤランド・ロードに着くと、家中の人々が特別の祈りのために集まっていた。中国行きの送金をするはずだったが、四十九ポンド十一シリング不足していたからである。テラーは、そこにあったテーブルの上にあの五十ポンドの紙幣を置いたのである。父なる神のみ手からお金が与えられる以外直接に与えられるということがありえたであろうか。

しかし、この年月のすべての祈りへの答えをもつてしても、中国国内陸への道が開かれるには、まだまだ遠かった。実際、十八人の開拓者が送り出されてからのち、ひとりの英国士官の殺害をめぐつて、戦争が不可避に思われるような状態に陥った。何か月も交渉が続けられたが、中国政府は満足のゆくような処置を全然取らず、英国大使は北京を引き上げようとしていた。敵対行動の回避は不可能のように思われ、テラーが八人の新しい働き人といっしょに出港するのを、やめさせようとするミッションの友人たちもいた。彼らは言った。

「あなたがたはみんな帰国しなければならぬでしょう」。

「それなのに、さらに奥の省に開拓者を送り出すことは、問題にもなりません」。

何がまちがったのであろうか。働き人と資金はむだに与えられたのであろうか。中国大陸は依然として福音に対する門を閉じたままになるのであろうか。

フランス船の三等船室で、ひざまずいて祈り、神と語っている人がいた。「未伝の地域の一億八千万人の伝道のことを思うと全く耐えられないような気持ちです。彼らの救いのために、わたしに百の生命があつたなら……と思います」。彼は二年前にこう書いている。彼は力の及ぶかぎりのことをした。どんな失望にぶつかつても幻は曇ることがなかった。それなのに今。しかし、神の時はまさにやつて来た。主にあつては遅すぎるということはない。最後の瞬間に、中国外務省に変化が起こつた。太守李鴻章が沿岸地域に急行し、芝罘（チーフー）で帰国寸前の英国特使に追いつき、記念すべき会談が開かれた。会談の結果、両国の間に合意を見、英国人は中国のどこへでも出かける自由が与えられた。テラーは喜びのうちに回想している。

ちようどわたしたちの兄弟が備えられた時、早くなく、おそくなく、長く閉ざされていた門は、彼らに対しても自然に開かれたのです。

一七 あふれ流れて

ああ 泉なるキリスト

深く慕わしい 愛の井戸よ

地上の流れは味わい知りました

もつと深い 上よりの水を飲みたいのです

♪・R・サガン

ミッシヨンの指導者たちは、その後の二年の間に、中国内陸の各省にわたって五万キロにも及ぶ旅をし、行くさきざきではないの愛の福音のあかしをした。この結果としてテラーには、今までで最大の信仰の試みがやってきた。確かにすばらしく、国は解放されていた。何年にもわたる道備えのための苦難を経てきた今、若い宣教師たちが自分たちの家庭を作り、家庭を中心にして働きを続けるために、よい機会を利用したことはきわめて当然であつた。開拓者の数人はすでに婚姻しており、彼らの同労者として、最初の白人の婦人を内陸へ連れて行くことをテラーが認めるのを待つばかりであつた。彼らはおそらく、そのことに含まれたすべての問題を、その指導者のようには見ることができなかったであろう。また、まもなく、こうした遠方の家庭の忙しい母親の仕事を助けるために、他の婦人たちが困難な旅行をしなければならなくなることわからなかつたのであろう。

しかし、テラーは何年も前に、そのすべてに直面していた。そして、婦人の働きを励ます方針を決めた。彼が内陸への最初

の夫妻の出発を認めた時、その反響は彼が予期したように異常なものであつた。中国における宣教活動は新しい段階にはいつていた。新しい犠牲が求められ、信仰と忍耐との新しい要求がなされようとしていた。

事態は徐々に進展していった。テラーが一年ほどの間、当面しなければならなかつたことは、主として開拓者たちのあまりに広範な巡回に向けられていた。このような旅行は、必ずしも容易なものではなかつた。輝かしい励ましになるようなことはもちろん、記録されるべき危険も、また失望もあつた。「外には戦いあり、内には恐れあり」の状態は、昔と変わらなかつた。テラーはミッシヨンの管理上の責任のために杭州にとどまつていたが、導き、また強めるために喜んで彼らを助けた。彼自身の強さの秘密は、知りがたいことではない。テラーは、その働きがゆるすかぎり、小さなオルガンに向かって気分の転換を図り、次々に好きな賛美歌をひいたり歌ったりしたが、いつも行き着くところは、次の賛美歌であつた。

主よわが心は御旨にいいい

たえなるなが愛知りえたり（聖歌二八一）

ミッシヨンの以前からの二つの伝道所に起きた深刻な騒ぎを知らせる何通かの手紙がテラーのもとに配達された時に、十八人の伝道者の中のひとりジョージ・ニコルはテラーとともにいた。彼はテラーがひとりになりたいかもしれないと思つて、そこから退出しようとした。すると驚いたことに、だれかが口笛を吹きはじめたのである。それはテラーが非常に愛していた、あの賛美歌のおりかえしであつた。

主よわが心は御旨にいい
たえなるが愛知り得たり

ニコルはふり返つて叫ばざるを得なかった。「わたしたちの友人たちが、こんな危険な状態にあるのに、どうして口笛など吹けるのですか」。「わたしが思い煩い、心配することをお望みですか」。テラーは静かに答えた。「そうしたからといって、彼らは助けられませんか、わたしも仕事ができなくなってしまうでしょう。ただ主に重荷をゆだねてしまうのです」。

「ただ重荷を主にゆだねてしまう」。これが彼の信仰生活の秘訣であった。午前二時か三時ごろ、杭州の小さな家で目をさましている者は、よくテラーの好きな賛美歌の静かなおりかえしを聞くことができた。彼は、自分には一つの生活しか可能でないことを学んでいた。それはどのような環境にあつても、内的にも外的にも、事の大小にかかわらず、主が困難と取り組まれる一方、彼自身は主にあつていい、喜ぶ祝福の生活である。

テラーはふたたびロンドンに帰っていた。中国北部では六百万の人々が飢餓に直面していた。インランド・ミッション所属の二、三人のほかには宣教師のいないある省では、何千人もの子供が死に、若い女たちは奴隷に売られ、はるか南方の町へ集団的に連れ去られて行った。テラーはこの恐ろしい状態に大きな重荷を感じながら帰国し、救援活動を開始するために全力を尽くしていた。子供たちのための救援金は備えられていたが、被害地帯へ働きに行くことのできる婦人は、どこにいます

あろうか。山西省と沿岸地方の間にある山脈の向こう側へは、白人の婦人が足を踏み入れたことはまだなかった。それにそこへ行くためには危険な道を越え、夜はみじめな宿屋に泊り、ろばやかごに乗つて、二週間も旅を続けなければならないことになる。

テラー夫妻が二か月しかともに故国にいないで、別れるようになったのは、この働きのためであった。小さな古びたノートには、召命がほんとうに神からのものであるかどうか知ろうとしてみ前に待ち望んだ時に、夫人の信仰が強められたことがしるされている。御旨ということがわかると、このことを言い出したテラーが忍ばなければならぬ犠牲のことも、彼女を思いとどまらせる理由にはならなかった。彼女の背後には彼女自身のふたりの子供、年上の四人の子供、さらにひとりの養女、合計七人の子供の家族が残されることになった。彼らはどのように守られるだろう。むずかしい問題のすべてを主にゆだねた。神は祈りに答えられ、必要が起こってくるごとにそれを満たされたばかりでなく、別離のためにも、中国での困難で危険な仕事のすべてについても、豊かに恵みを与えられた。テラーは国に帰る前に書いている。

十字架を愛する人が必要です。あなたもわたしも神がこのような態度の人にして下さるように。わたしたちは、永遠に確実にいつしよにいられるのに、あなたと愛する子供たちのことが、ここで滅んでいく何百万の人たちよりも、気になることを恥ずかしく思います。

自分の妻が最初に出かけて行つてから、テラーにとって他の婦人たちを前線の仕事に参加させることが、以前よりは楽になつた。一年後（一八七九年）に、彼のもとに彼女を迎えて、彼らが中国で再会した時に与えられた報いの一つは、内陸の各省で次々に静かに、婦人の仕事が開かれていったことである。この時期の物語は、どんな小説よりも劇的で、感動的である。極西部へ行つた婦人たちは、揚子江の沿岸で船が難破し、花嫁道具をかわかすために岩の上に広げ、そのまん中で奇妙なクリスマスを過ごしたこともあつた。彼女たちが目的地に着いた時、どんなにおおぜいの人たちがやつて来たことであろうか。「過去二か月間、毎日何百人もの婦人を見ました。わたしたちの家は、まるで博覧会の会場のようなでした」とニコル夫人は重慶から書いている。

六千万もの人々がいる省で、唯一の白人の婦人というわけで、彼女はとても忙しく、客の間で疲労のあまり倒れてしまつたことも一再ではなかつた。彼女が意識を取りもどすと、彼女に強い関心を持ち、彼女を愛している婦人たちが、静かにあおいでいてくれるのだつた。母親のようにして彼女の世話をしてくれるたある婦人は、ニコル夫人に自分のかごをさしむけ、すぐに乗つて来るようにと勧めてくれるのだつた。そして自分のアパートの気持ちよいベッドに夫人を寝かせ、彼女が眠りにつくまで、年下の婦人たちをみんな外へ出して、彼女のそばにすわつて自分であおいでくれるのだつた。それからおいしそうな食事をを用意して、彼女が十分に食べきるまで帰そうとはしなかつた。

最初に出かけて行つた婦人たちが、どこでも驚かされたことは、人々が非常に喜んで彼女たちに会い、熱心によく話を聞

き、好奇心だけではなく心からの理解を示したことだつた。このようにキリストに生き、キリストを公然と宣教した影響は、すぐに現われはじめた。婦人宣教師が登場してから、二年目の終わりまでに、開拓者たちは遠い奥地の各省における小さな教会に、六十人から七十人の回心者が集まつて来ることを喜び合つた。

漢水（ハンチオアン）を三か月ものぼつて、北西部の婦人たちのところへ最初におもむいたエミリー・キング夫人は、また、米国に召される最初の人ともなつた（一八八一年五月）。短い奉仕の期間であつたが、キリストを告白して洗礼を受ける人が十八人以上も出て、彼女を喜ばせた。彼女は、漢中（ハンチュン）市でチブスのために死んだのであるが、夫を残し、幼い子供を母親のいないところに残して行く悲しみを越えて、彼女を行かせた秘訣はここにあつた。すなわち、「悲しみの人」である主は、ご自身の「魂の苦しみ」が、長い間待つていた人々のためであることをご存じであつた。彼女もまた、その真の意味を知つて満足したのである。（訳注）

テラーは、このようなわががなされるために払われる価を、だれよりもよく理解していた。また、だれよりも熱心な祈りによつてこのような働きを見守つていた。多くの試みのさなかから、彼は母親にあてて書いている。

中国のいちばん遠い地方で、主のわがが拡張され、いよいよ強力になつているのを見ることが、どんなにうれしいか、お話もできないほどです。そのためにこそ生きる価値があり、死ぬ価値があります。

このたびの発展は急速で、すばらしかった。しかし、テラーは新しい前進をする時、力と祝福を与えられる時、いつでもそれはそれに相応した苦しみと試みの時期を経験していた。その命は神にあつて導かれ、どこまでも深くされなければならなかった。外面的に見れば、働きが万事好調に進んでいると思われた時があるかもしれない。輝かしい信仰の歩みが踏み出された。祈りに対する輝かしい答えが与えられた。しかしそのためには、背後にあつてその経験にあずかった者だけが知っている、事前の心の備えがあり、のちにも常に負わなければならぬ重荷があつた。これほど深く心を探られ、あれほどの信仰の試みを受け、魂の苦しみを経験している事実の前に、人はただ黙して立つのみである。そのような霊的成功は、神とともにどこまでも行く備えがあり、地道な生涯に即した生活の現実の中で死ぬ備えがあり、兄弟たちの奴隷（すべての人のうちで最小のもの、またすべての人の奴隷）になる備えがあり、兄弟たちの失敗と弱さの責任を分け合つて負うだけでなく、彼らをもっと高い標準に引き上げる創造的な信仰と、愛のうちに、彼らをささえるとりなしの祈りをするといった、さまざまな要素が含まれていてこそ可能なのである。

内陸への最初の婦人伝道者が出発し、前進の動きによつてこの新しい生命が吹き込まれるようになった。しかし、それに先立つて、長期にわたる激しい苦しみの期間があつた。一八七九年にテラーは重い病氣のために、三回も生命の危険にさらされた。翌年には新しい方向への努力が試みられ、非常に祝福されたよい結果をあげたが、ミッシェンは山積する深刻な試みに直

面していた。このころ、テラー夫人は、次のように書いて重要な原則に言及している。

もし、どんな圧力を加えられたとしても、神との交わりを失わないようになってしまえば、その時こそ勝利の生命に生きることが出来ます。それがミッシェンのあらゆる部分に影響を及ぼし、また、わたしたちに影響して返ってくるとはお考えになりませんか。最近の何か月かの間、わたしが考えておりましたことは、わたしたちのすべての仕事の中で最も重要なことは、目に見えないとりなしの場にあるということです。わたしたちは神が与えて下さった同労者のための勝利を、信仰によつて得なければなりません。彼らに見える戦いを戦い、わたしたちは見えない戦いを戦わなければなりません。主のために主のみ名によつてつかわされているのなら、どうしてわたしたちは勝利よりも低いことを求めるのでしょうか。

試みの時はいつも成長と祝福に導かれる。これは確かに霊的な法則である。たとえばテラー夫人がこれ以上英国の家をあげておくことができなくなつて、彼のもとを離れてからのちもそうであつた。テラーは年下の働き人と会議をするために西に向かおうとしていたが、その時彼は書いている。

今、地中海を進んでおり、まもなくネーブルスに着くでしょう……わたしは武昌行きの蒸気船を待っています。どれほどあな

たをなつかしく思っているか、言う必要もないし、言おうと

しても言えません。しかし、ご自身の臨在と愛のうちにあって、わたしたちがどれほど恵まれているかを感じさせられています。神は思わしくない環境の中で（貧しいことと、ミッシンから引退する人たちのことも含めて）、助けて喜ばせて下さいます。このようなすべての困難は、主が御旨と力と愛を示して下さいる舞台にほかなりません。

武昌での集会が始まってから、彼は続けて書いています。

非常に忙しくしています。神様は幸いな交わりの時を与えて下さっています。そして、わたしたちが守ってきた原則が正しいことを確信させて下さいます。

この短い文章を、彼らが直面するようになった危機との関連において見ると、武昌での何日かにわたる交わりに続く重要なできごとの意味がはつきりしてくる。年下の宣教師たちは意識していなかったが、それはまさしく危機であった。テラー自身が感じていた以上に深刻なものであった。何年もの祈りと忍耐と苦しみとのちに、今までにない好機がやってきた。中国の内陸は、彼らの前に開かれていた。極北部、南部、西部のすでに開かれている伝道所は、強化される必要があった。前進しないことは、すでにかちとった位置からの退却を意味するであろう。それは、生ける神を見るよりは、困難を見ることであろう。確かにここ何年かの間、資金は欠乏している。新しい働き人もわずかしか来ていない。今のところこれ以上の拡張は不可能であると言うことは容易だったであろう。しかし、前進をしないことは、この仕事をかたわにし、妨げることにさえなる。

神が与えて下さったことを放棄し、大きな値を支払って開かれた伝道所を、まもなく閉鎖することを意味している。もちろん、これが中国内陸部に宣教する神の方法ではありえない。

それでは、こうした時期に静かに神を待ち望んでいた結果、何を待たであろうか。信仰による前進がはなはだ驚異的なものであったために、しばらくの間、本国の友人たちの理解を得ることは疑わしく思われた。信仰による前進とは、のちにミッシンの働き人全員が署名した、本国の教会への訴えにほかならなかったからである。そこには、三年以内に七十人の新しい働き人が送られるようにと訴えてあった。ミッシンのメンバーは、ようやく百人に達したのにすぎず、資金は長い間窮迫していた。それでも、武昌に集まったグループは、はつきりと求めて祈り、神の導きを確認して待ち望んでいた。それは、その中のひとりが次のように語ったのもうかがわれる。

「七十人の最後のひとりが中国に到着した時、もう一度集まって、心を合わせて賛美できたら、どんなにいいでしょうね。」これほど短い期間に、これほど多くの働き人を、備えることも、受け入れることも、ほとんど不可能であったにもかかわらず、祈りの答えを待つべき期間を三年ということに決めた（一八八二―一八八四年）。

「そのころはわたしたちも広く散ってしまっているでしょう」。実際のな考え方をする別の人は言った。

「なぜ、今、賛美の集まりをしないのですか。なぜ、別れてしまわないうちに七十人のために感謝をしないのでしょうか。」この提案は一同に認められて、集まりが開かれ、祈ろうとして集まったすべての人が、感謝のために心を一つにしたのである。

七十人は与えられた。すばらしい答えは三年以内に与えられた。しかし、信仰は多くの点できびしく試みられた。依然として資金についての試みは深刻であり、この働きをめぐる試練は、さらにそれを上回っていた。しかし、テラーは次のように書くことができたのである。

主への真の信頼の祝福を、いよいよ感じています。主は信仰を試みられますが、ささえて下さいます。わたしたちが不真実であつても、主の真実さは微動もしません。「彼は自分を偽ることができないのである」。

あらゆる方向から特異な試みがやってきたこの年も、主イエスがわたしの心をよく守り、ご自身の愛を豊かにあふれさせて下さいました。わたしたちの奉仕において、別離やそのほかのできごとが何を意味するか、主はご存じです。主は真にすばらしい方法で、すべての損を益にして下さいます。…このように書き続けるのをお許し下さい。わたしは、数字を相手にしたり、送金のことでも忙しくしている間でも、うれしくて、まるで心に抜け穴でもあるような感じです。

七十人の参加を待望する三年間のうちの最初の一年が進むにつれて、この訴えに対して本国には大きな誤解があることが明らかになつた。この時テラーは芝罘（チーフ）にいたが、誤解の余地もないような方法で、確認の印をいただきたいと主に願う必要を感じていた。それは、毎日開いていた祈祷会でのことだつた（二月二日ごろ）。非常に自由にこの祈りがささげられたことに気づいたのは、そこに出席していた人のうちでもごくわずかであつた。

わたしたちの天の父が、その子供を喜ばせることをよしとされるのを、知っていました。それで神がご自身の富裕なしもべを用いて、この特別の目的のために豊かにささげさせ、それによつて、ご自身のためにも、ご自身の家族のためにも、大きな祝福の道を開き、わたしたちを喜ばせ、本国にいる内気な人たちを励まして下さるようにと、愛をもつて主に願いました。

二、三日たつてからテラーは、英国に向けて出帆したので、この結果を聞いたのは、アデンに帰港した時であつた。この特別の祈祷会については、本国には何も知らせてなかつたが、パイヤランド・ロードでは、二月の二日に総額三千ポンドのお金を「わたしに求めよ、わたしはもろもろの国を嗣業としておまえに与え、地のはてまでもおまえの所有として与える」とのみことばとともに受け取り、非常に喜ばされた。そればかりではない。贈り物が送られてきた方法がまた変わつていた。そのささげものには、両親の名とともに、五人の子供たちの名が加えられていた。神が全く文字どおり、祈りに答えられたのを見ること以上に励ましになるものは何もない。

何年かたつて信仰による別の大きな歩みが踏み出された時も同様であつた。神は、七十人の出発を非常に祝して下さり、ミッションは本国においても強められ、新しい影響力を持つこととなつた。この働きの開拓的な性格は、この時期に始められるようになった。ロンドン宣教協会のアレキサンダー・ワイリーは、「彼らは国を開発している。これはわたしたちの願つていることなのだ。他のミッションもよい仕事をしてはいるが、こ

の仕事はしていない」と書いている。この結果、ジョン・マカーシーが中国の東から西へ歩いてキリストの宣教をしながら横断して英国へ到着した時、「W・M・ステイブンソンとヘンリー・ソルト」博士がビルマから初めて中国西部にはいり揚子江に沿って上海へ出た時、テラーが英国で彼らと合流し、新しい七十人の働き人を求めてミッシェンのアピールをした時、クリスチャンたちは深く心を動かされたのである。テラーの義弟であるベンジャミン・ブルームホルの献身的な労苦によって、道は備えられていた。彼は、七年間ロンドンにおいてミッシェンを代表し、パイヤランド・ロードの本部は、彼と夫人にとつて愛と祈りの中心となっていた。ブルームホルは、生来の親しみやすい性格と神の全教会を抱擁する心とによって、ミッシェンのあかしのために多方面に機会を見つけていた。人々は、見たところでは不可能に思われることがどのようにして実現したか、資金を求める訴えもなく、また資金を集めるのでもなく、どのようにしてこの事業が成長を続けたかを、非常な関心をもつて聞こうとしたからである。家じゅうの人が「ハドソン・テラー」のことを口にしていた。ケンブリッジに住むある子供が書いた、かわいい手紙が記録されている。

もしも、まだあなたが死んでいなかったら、わたしは中国の小さな子供たちが、イエスさまを愛するようになるのを助けたいと思います。そのために貯金したお金をあなたに送りたいと思います。

サウザンプトン大聖堂の理事ウィルバーホースは強く訴えている。

わたしの家で、六十人ほどのために聖書を読む時間を作って下さり、ともに交わっていただけではないでしょうか、み名によってどうか願いをお聞き届け下さい。

ラッドストック卿は大陸から書いている。

主にあつて愛せられる兄弟、あなたは英国にいるわたしたちの信仰を強める大きな力となつておいでです。

アンドリュウ・ボーナー博士からは、長老派の「支那の地に重荷を感じる」未知の友からといって百ポンド送られてきた。スボルジョンは、その牧する教会タバナクルへの特徴ある招待状を送ってきたし、マックファースン女史は、ベスノル・グリーンへ招待してきている。バーガーも五百ポンドの小切手とともに次のような手紙を送ってきた。

わたしの心は、今も光栄ある働きから離れてはおりません。七十人の新しい働き人のための祈りに、心から参加させていただきます。しかし、七十人だけにとどまってはなりません。わたしたちがみずからをむなしくし、ただ神の栄光と魂の救いを求めるならば、もっと大きなことを見るのは確かでありましょう。

バーガーの「もっと大きなことを見るのは確かでありましょう」という信仰は正しかった。神が与えられた七十人は、祈りに対するあふれ出る答えであることが明らかになった。最後のグループが出帆する前に、有名な「ケンブリッジ・バンド」が

そのグループのあとに従うことになった。「ケンブリッジ・バンド」が英国を離れるまでにたてた献身的なあかしは、地の果てまでも及ぶ深い霊的な運動となつて、英国の大学を制圧した。

それは確かに霊的な祝福の上げ潮であつた。テラーが時間を見つけて出版した「中国の霊的な必要と要求」の新版は、この働きに深みを加えこのあかしがささえられるのに役だつた。

大学の町でのリバイバルによつて、ケンブリッジ・グループの出版は止められていたが、その前にテラーは、エクセター・ホールでの最後の送歡会をも待たないで、中国へ向かつた。ミッシェンに関係する全活動のために開かれたあの大集会の熱狂と、戦いの厳粛な現実に一日一日、彼を連れもどしてゆく船室でひとりひざまずいて祈る孤独な人との対照ほど著しいものはなかつた。「非常な熱心の大きな波に押されて」―教会宣教協会の編集書記の表現によれば―このわざは主の民の今までにない理解と確信を得ることになった。「ミッシェンに人気が出てきた」とブルームホールは、いささかの心配を交えて書いている。しかし、中国においてはハドソン・テラーが、この経験のもう一つの面に直面しなければならなかつた。彼は支那海から書いている。

まもなく、戦いのさなかにまいります。しかし、わたしたちのまん中に立たれるわたしたちの主、神は、力の神です。わたしは主を信頼し恐れはしません。「主は救われる」、主はいつまでも、何事においても救いを与えられる。

また何か月かのちに、テラーは書いている。

肉体と心とはしばしばくずれてしまします。なるがままに任せましょう。主はくずれなざることはありません。せつに祈つて下さい。いつも、絶えず祈つて下さい。サタンはわたしたちに激しく立ち向かっています…。

多くのものがわたしたちを圧迫しています。あなたがいないことは、大きな試みです。普通のことであろうと、特別のことであろうと、あらゆる戦いがあります。しかし、同時にまた、すばらしく力づけてくれるものもあります。このことばのほかには、真実に近い表現のできることもありません。筆では今の半分さえも書き表わせません。わたしたちのミッシェンに関連のある諸所でなされている力強い働きを、だれも想像できないでしょう。他のミッシェンが大いに用いられていることも疑えません。すばらしい一年を予期しています。

一八八六年は、すばらしい年であつた。この年にすでに言及した祈りが、めざましいまでに答えられ、次の大きな前進が開始されたのである。

テラーは、働きの人が多く住むようになった地域を訪問しながら、内陸での数か月を過ごした。彼は、修養会を開きながら山西省を旅行して行つた。この修養会については、小冊子ではあるが貴重な「祝福の日々」という題の本に述べられている。彼の生涯と静かなあかしの力とによつて神の奥義が若い働きの人の前に明らかにされていった。それはまさに「祝福の日々」そのものであつた。席勝魔（シーシェンモー）牧師のところで、テラーが回心した儒教の教師と初めて会つた時は、特にその

感が深かった。働きの行く末について語り合う彼らふたりの愛と理解とは、見ているだけでも美しいものであった。

ステイブンスンは、その時そこに居合わせたが、あとになつてから当時の模様を回想して述べている。

あの時、わたしたちはみな幻を見ました。あのころは、地上における天国のような毎日でした。困難と思われるものは何もなかったのです。

この旅行の最後の道程は黄河を下ることであつたが、テラーはこの時、五歳の少女の世話をする責任を持つことになつた。これはまことに当然のなりゆきであつた。というのは、宣教師としてこの子の両親は、病弱な幼い命をたすけるために、どうしてもこの子を海浜に連れて行かなければならないと考えていたが、グループに婦人はいなかったで、テラー以外にこの子を預けられる人がいないことを知っていたからである。一か月か、一か月半の間、テラーがこの小さいアンニーの世話をする事になつた時、彼らは非常に安心して喜んだ。テラーは舟の上から書いている。

小さな務めを前よりもずっとうまく果たせるようになりました。彼女はかわいいしぐさでわたしにすぎります。首に回された小さな腕を、もう一度感じうるのはすばらしいことです。

テラーは、この旅行から直接に、ミッシェンの最初の中国委員会の集会に出席した。その年が暮れようとしていたからである。ステイブンスンとマカーシーも含めて、各省の新任の責任者たちが安慶（アンチン）に集まつた。その一週間に、祈り、

断食し、心を整えて目前の重要問題に向かうことができるようにした。テラーは、さらに大きな発展を目ざして、二十年にわたるこの働きの責任者としての経験から得た豊かな知恵をもつて、賢明で効果的な組織を作ることに努力した。この会議の結果、生まれた提案には、彼自身さえも目をみはらざるを得なかつた。それは、新しい発展を願うならば、百人の新しい働き人が、ただちに必要だというのである。厳密な情勢分析を行なつた上で、テラーは、五十か所の中心的な伝道所と、彼らの前に開かれてある中国全土の広さを考え比べて、その発展を願う以上、次の年に百人の新しい働き人を求めるといふのは、確かに少なすぎるほどの人数であると、委員会の人々の意見に同意しないわけにはいかなかった。この時までミッシェンの副代表になつていたステイブンスンは信仰と勇氣に満ちた人であつた。彼は、ミッシェンの全員に対して、事態を説明するメモを送り、テラーの許可を得て、ロンドンに電報を打つた。――「一八八七ネンニヨウスアラタナヒャクニンノタメニイノル」。

一方、本国の人たちにとつても、それはまことにスリルそのものであつた。一年以内に中国のために新しく百人を求める。既存のミッシェンには、このような規模の増援を考えることさえした者はなかつた。その時、チャイナ・インランド・ミッシェンはわずかに百九十人のメンバーがいるだけであるのに、十二か月以内に五十パーセントの増加を祈り求めるというのだから、人々は全く息が詰まる思いであつた。しかし、これもテラーが帰国するまでのことであつて、彼が帰国してもたらし「信じて強く、神に栄光を帰す」という霊的な高揚は、その後まもなく、ミッシェンの友人たちの間にくまなく感じられるよ

うになった。中国では次のような三重の祈りがささげられていた。神がご自身のために百人の働き人を得られるように。宣伝や募金によらないで、さらに必要な五万ドルを与えて下さるよう。事務所で働いている人が少ないという実際問題から、手紙の量を減らすために、まとまった額で資金がささげられるように。本国の人もまた、この祈りに参加したのである。

一八八七年に、どんなことが起こったであろうか。実際には六百人の男女がミッションに志願したが、その中から百二人が選ばれて、訓練されたのちに送り出された。ささげられた資金は、五万ドルではなくて、五万五千ドルであった。これはなんの勧誘もなしにささげられたものであつて、すべての必要を満たすのに十分であつた。それから、何通かの手紙が書かれた。

これだけの巨額の献金のために、どれだけの受取が、書かれなければならなかつたのであろうか。すべては、十一の献金によつて満たされたのであつた。もしそうでなければ、事務処理の負担が極端に重くなつてしまつたであらう。ところが実際には、事務所の仕事が目だつてふえることはなかつた。いちばんよかつたことは、「百人」の話が伝えられた所では、信仰が強められ、新しくさらに熱心に待ち望まなければならなかつたために、人々の心が大いに動かされたことであつた。

予期していなかつた一つの結果は、アメリカの若い実業家が、ロンドンを訪れたことであつた。彼は伝道者であつて、テラーを合衆国に招く重荷を与えられていた。ヘンリー・M・フロストは、この目的のために英国へ旅行することは、神の導きであると確信していたので、テラーがその招待に応じなかつた時の失望は、耐えがたいほどであつた。彼は、それまで見た

り聞いたりしてきたことから、インランド・ミッション、特にハドソン・テラーにひきつけられていたので、使命が果たされずに終わつたことを感じてニューヨークに帰つた時、彼は非常に困惑していた。しかし、この問題についての神のわざは、ちやうど始まつたばかりであつた。テラーは翌一八八八年の夏に、アメリカに渡り、D・T・ムーデーと、ナイヤガラ修養会の指導者たちの心からの歓迎を受けた。その場所と、ノースフィールドでは、祈りに答えられて驚くべき事態が展開されていった。その祈りは主として、あれほどまでの失望を味わいながらも、今は願うことよりも、思うことよりも、はるかにまさつた神のみの手の働きを見て、喜んでいる人のささげた祈りであつた。

三か月のうちにテラーが中国に行つた時にはひとりではなかつた。この偉大な米大陸から、ミッションへの神の尊い贈り物である十四人の青年男女が彼と行をともした。合衆国とカナダから、いろいろの教派の人々が加わつた。全く予期もしないところに与えられた贈り物と祈りとは、それ以後中国へ向けて絶えず流れている流れの発端にすぎなかつた。関心は非常に高まり、北米委員会が組織されなければならなくなつた。このようなすべての賛美すべき結果が表われるようになるために、神が用いられたヘンリー・M・フロストは、彼自身にとつても、家族にとつても、相当に犠牲を要することであつたにもかかわらず、その組織を代表して、指導する責任を引き受けた。このことはテラーが関係した働きの中で、主が導かれた最も実り多い発展の一つであつた。テラーは新しい信仰と勇氣に満たされて仕事を続け、そこから生まれてくるすべての問題に

対処した。いつも超教派であつたチャイナ・インランド・ミッションは、偉大な前進の一步が踏み出されたその時から、さらに国際的な存在となつた。その後、十二年ほどの期間、テラーは公に働くことができたが、それは世界的な奉仕の時代であつた。スカンジナビア訪問によつて、スウェーデンとノールウェーのクリスチャンたちが、彼に対して暖かい態度を示した。ドイツからは、ミッションと協力して働くために献身的なグループが送られてきた。オーストラリアとニュージーランドで、テラーは、愛する古い友人として歓迎された。また、上海の中国委員会は、創立者が想像もしなかつたほどの大きな組織の中心となつていた。

テラーの生涯の最後の幾年かに見られたあふれ出るばかりの霊的な恵みの数々は、実にすばらしいものであつた。以前からも与えられていた同じ祝福の流れではあつたが、ただ今度は、それが地の果てにまでも及ぶものであつた。メルボルンで、テラーを客として迎えた聖公会の牧師が受けた印象は、まことに興味深いものがある。

彼の存在は、接する者にとつて、実に静かな実物教育であつた。彼は、自分の毎日の収入のどんなわずかな部分でも、みな天国から引き出すのだつた。「わたしはあなたがたに平安を与える」。救い主が動かされ、怒られることでなければ、彼もまた、動かされもせず、怒りもしなかつた。どんなことについても、また、どんな状態の中にあつても、イエスの平静さが彼の理想であり、実際に彼が所有していたものであつた。急いだり、あわてたり、神経をとがらせたり、腹をたてたりするようなことは少しもなかつた。彼には理解を全く越

える平和があり、この平和なしには、どうにもならないことを彼は知つていた。

「わたしは書斎におり、あなたは大きな客間にいるようなものです」と、わたしはこらえきれなくなつて、テラー氏に向かつて言つたものである。「あなたは何百万という人たちのために忙しくしておいでになります。わたしは何十人かを相手にしています。あなたの手紙は重要な差し迫つたものであり、わたしの書くものは、そんなにたいしたものではありません。それなのにわたしは心を煩わせて、押しつぶされうになつており、あなたはいつも平然としておられます。いつたい何が原因でこれほど違つているのでしょうか」。すると彼は、静かに答えた。

「マツカートニイさん、あなたのおつしやる平安は、わたしの場合、幸いな特権以上のものです。これは全く必要なものなのです。わたしをささえられるすべての理解を越えた神の平安がなくては、わたしはとてもしるべき仕事をやり遂げることはできないのです」。

これがテラー氏についてわたしの心に最も残つてゐることである。あなたは、急いだり、あわてたり、悩んだりしてはおいにならないだろうか。見上げなさい、栄光のうちにいますおかたを。イエスのみ顔、イエス・キリストのすばらしいみ顔の輝きにあなたを照らしていただきなさい。主は悩んだり、弱つたりしておられるだろうか。主のみ顔には、思い煩いや心労の陰はいささかもない。しかも、問題は、あなたのものであると同様に、主のものなのである。

このこと、つまり「ケズイックの教え」と言われていること

は、わたしにとって新しいことではなかった。このような輝かしい真理を、わたしも知っていたし、人々に向かって説教もしていた。しかし、今まで見ようとも思わなかった

「ズイックの教え」のほんものの具体的な現われがあったのである。わたしはこのことに非常に深い感銘を受けた。六十歳になろうとしているこの人が、非常な重荷を負いながらも、完全に平静であり、心を煩わせることを全く知らない。山のように積まれた手紙―この中には、死の知らせ、基金の欠乏、暴動、その他の深刻なさまざまな問題が書いてないとは言えない。それなのにこの人はすべてを開封して、すべてを同じ平静さをもって読み、静かに返事をしたためている。キリストこそ、彼の平安の理由であり、彼の静けさの力であつた。彼は、キリストのうちに住んで、いろいろな問題について主の臨在と力とにたより、それらの問題の中から主ご自身にたよっていたのだ。

これらのことすべてを、彼は信仰の態度をもつてなした。それはいつも変わらないことであつたと同時に、まことに単純なことでもあつた。

彼には、幸いな自由さと、自然さがあつた。「神のうちに」という聖書の表現のほかに、これを説明するのに適切なことばは見当たらない。いつでも彼は神のうちにあり、神は彼のうちにあつた。それは、ヨハネによる福音書十五章の主の「ある」ことの真の姿であつた。ああ、しかし、その根底には、恋人のような態度があつた。彼は、キリストに対して最も豊かな雅歌の経験をもつていたのである。これは実にすばらしい組み合わせである。そこには、何よりもたいせつな仕事を法廷の裁判官のように厳格に行なうその中で、心には

家庭的な光と愛とを備えている人の強さと優しさの結合があつた。

このようなすべての経験を通りながら、初期の幻と霊的な緊迫感、変わることがなかった。主イエスの最後のご命令に従う責任感は、偉大な委託（参照 マルコ一六・一五）の意味がはつきりするとともに、いよいよ強くなつていった。一八八九年になつて、なおテラーは書いている。

わたしは、わたしたちの主が、「すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」と命令された時、実際に何を意味されたかということ、今まで疑問に思つたことはありません。恥づかしいことですが、告白しなければなりません。他の多くの人と同じように、わたしは長年にわたつて福音を遠隔の地に伝えるために働いてきました。中国の未伝のすべての省と、もつと小さい多くの地域に伝道する計画を、救い主のみことばの意味も知らないで作りしました。

「すべての造られたものに」。中国におけるプロテスタントの教会員の総数は、わずか四万人にすぎない。この数を、二倍にし、三倍にし、さらに賛成者を含めてみても、あるいは、ひとりひとりが、八人の同胞に光を運んで行く使者であると想像しても、わずか百万の人に福音が及ぶだけである。「すべての造られたものに」、このことばは、彼の魂の奥底に焼き付けられた。しかし、教会も、彼自身も、このことを文字どおりに受け入れて行動しようとするところから、いかに遠かつたことであろう。深く示されながら彼は書いている。

この最後の戒めに関して、わたしたちは、主イエス・キリストに対し、どんな態度をとろうとしているのか。彼にあてはめられた「主」という称号を、はつきりと取り去ってしまうべきであろうか。わたしたちは罪の罰に関するかぎり彼を救い主として喜んで認めるが、「代価を払って買いとられた」わたしたち自身に対してあるいは、わたしたちの文句なしの服従を求めうるキリストに対しては、備えられていないという立場をとるべきであろうか。キリストはすべての主であるのか、あるいは全く主ではないのか、について、真理を實際に認めている者は、主の民の間にもまことに少数である。もしわたしたちが、みことばによつてさばかれるのではなく、神のみことばをさばくことができるのであれば、また、もしわたしたちが好むだけ多く、あるいは少なく、神に与えることができるのなら、わたしたちが主であり、主が負債のあるかたで、わたしたちに与えるもののゆえに感謝し、わたしたちが主の願いに沿おうとすることに恵みを感じるべきかただということになる。もし逆に、神が主であるなら、そのように主を扱おう。「主よ、主よ、と呼びながら、なぜわたしの言うことを行わないのか」。

こうして、自分では全く予期しないことではあったが、ハドソン・テラーは生涯を通して最も広い視野をもつて立つことになった。直接指導にあたっていた時代の末期を支配するようになる目的の自覚がそれであった。それは、主が命じられたとおりにする明確で組織的な努力そのものであり、中国全土を通じてすべての男、女、子供に主のあがないの愛のよきおとずれを

伝えることである。チャイナ・インランド・ミッションが、すべてそれを全うできるとは思わなかったが、伝道地を適当に分割すれば、全教会の宣教師の勢力によつて、十分にこの仕事に当たりうると信じていた。

しかし、彼がこれを存命中に見るようにはならなかった。ミッションの積極的な協力によつて、江西（チャンシー）でこの努力が始められ、宣教地全域にわたる前進の計画が進められていた。しかし、神の摂理のみ手によつて、まず深刻な苦難のあらしがやつて来なければならなかった。一九〇〇年の「義和団の乱」の狂乱が国じゅうを荒らし回り、インランド・ミッションは他のどの団体よりもひどくその猛威下にさらされた。テラーは病気で倒れたために、ちょうど英国に到着したばかりであった。テラー夫人は自分でも理解できなかったが、心配して、テラーが以前健康を回復したスイスの静かな所へ行くようにと説得した。

そこへ行った時に不幸はやつてきた。次々に暴動、虐殺、ミッションの各伝道所に収容していた難民が続々とかり出されていくという知らせの電報が配達され、愛する同労者を主の前に祈つてささえた人の心臓は、もはやこれに耐えられず、その鼓動も止まるばかりであった。ある程度までのニュースしか耳にはいらないですむ遠い谷間（ダヴオス）に守られていなかったら、その夏、惨禍に巻き込まれ、神のため、中国のために命を捨てた人たちの中に、ハドソン・テラー自身も加わっていたであろう。しかし、実際には、彼は神にすがって生き抜いたのであった。

事態が最悪に思われた時、テラーは言った。「読むこともできない。祈ることもできない。考えることさえもほとんどできない――しかし、信頼することはできる」。

義和団の危機は過ぎ去り、山西の白髪の一牧師の静かなことが現実となった。彼はほとんど最後の息で語った。

「国は滅びるかもしれない。…キリストの教会は絶対に滅びることはない」。

この確信を持つて、彼も、それから何百人もの中国人クリスチャンも、そのあかしに血判を押したのである。そして、この確信をもつて生き残った忠実な人々のあかしはふたたび開始された。

ハドソン・テラーが、その後継者として任命したD・E・ホーストは、敵が転じて友となるという事情のもとで、非常に賢明な行動をとることができた。中国の当局者は、キリストの命令を文字どおり実行したこと、すなわち、彼らの見方からすれば、それまでのすべての宣教よりも多くを実行したことについて、すぐ謝意を表わしたのであった。

テラーは中国において、もう一度、好機が到来するまで生きていたし、彼の愛と祈りをささげた国へ帰ることもできた。しかし、彼はひとりで帰って行つたのである。長い間の彼の愛する協力者であり、彼らとともにこの世の巡礼の最後の時期を、すばらしい光で輝かせた人は、最後の家のあつたジュネーブ湖畔で休息している。テラーはむすことその嫁―筆者たち―とともに、もう一度中国に向かい、七十三歳の身で、その生涯の最も驚異的な巡回伝道を実行している。・

伝道所から伝道所へと尋ねて行く時、クリスチャンたちが、彼に對してどんなに深い愛と尊敬とを示したことだろう。行くさきざきで、中国の恩人として、内陸の各省に福音をもたすための器として、非常な歓迎を受けた。揚子江をさかのぼつて漢口（ハンコウ）へ行く途中、河南省で何週間かを過ごしたテラーは、さらにもう一度旅に出られるほどに強められた。彼は湖南省へ行けるとは、考えてもいなかった。湖南省は未伝の九つの省のうち、チャイナ・インランド・ミッションの開拓者たちが初めてはいった所として、他の省よりもはるかに困難な所であることが明らかになつていた。アダム・ドーワードは、この省で八年以上の労苦―宿もなく、迫害を受け、暴動からのがれ、最後にはただひとりで死ぬという―の末、今日見られるような結果を願いながら、喜んで命をささげたのである。テラーは、三十年間以上も、祈りのうちにこの省を覚えていた。彼が最後に味わつた大きな喜びが、湖南の回心者たちの親しい歓迎であつたことは、まことにふさわしいことであつた。クリスチャンたちは、この州で最初に永住することになつた省都のフランク・ケラー博士の家に集まり、かねてから聞いていた愛する指導者とともに、日曜の礼拝をするのを待ち望んでいた。早く来た者たちは、土曜日にテラーに会うことができた。その時、その町の宣教師たちも、ケラー博士夫妻が計画した歓迎会に出席した。

しかし、天からの召しがきたのは、その夕方であつた。それはほとんど死とは言えないほどであつた。ただ、永遠の命へ、喜びのうちにすみやかに連れて行かれたのである。

「わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ」。

そのへやは、なんとも言えぬ平安に満ちていた。

訳注

そこには、イザヤ書五十三章十一節のみことばを用いて、主イエスがご自分の魂の苦しみによって、多くの人たちの救いが可能になったように、彼女の苦しみも多くの人々のために、よい結果をもたらしたキリストの苦しみの一部であるとの考えがある。

一八 今も尽きぬ流れ

主はわたしに語られた
主よりわたしに流れくる

輝きわたる川のこと

わたしが主に喜ばれる者となるために
きれいな実を結ぶ木となるために

タースティー・ゲン

ハドソン・テラーが中国の中心部から、なんの苦痛もなく、一瞬にして、愛する主の臨在のうちに移されて、いなくなつた時、多くの人は、息が止まるような思いを味わつた。声にこそ出さなかつたが、今ミッシェンはどうなるであらうか、というのが人々の疑問であつた。ハドソン・テラーは異常と言えるほどの信仰の人であつた。「彼が生きていて、祈っている間はよい、しかし今は……」—こういう思いをいだくのは、ごく自然のことであつた。しかし、父であり、長い間愛されていた指導者は確かに去つて行つたが、彼がすべての確信を置いていた神は、今も生きておられる。この事実、時が経過してゆくにしたがつて明らかにされていった。

この章の冒頭に掲げた詩は、テラーが非常に愛していた詩であり、彼の霊的な秘訣の核心を示すものであつた。彼は述べている。

それはまことに簡単なことです。主の喜びのために、わたしたちが主の民に対してきれいな実を結ぶように、わたしたち

を、命の水の川のほとりに植えられたのではなかつたのでしょうか。

ハドソン・テラーの生涯において、第一に置かれたものは、わざではなく、中国およびミッシェンの必要でもなく、彼自身でもなかつた。彼にとつて第一の存在は神であつた。「主によつて喜びをなせ。主はあなたの心の願いをかなえられる」という約束が、まちがつていないことを彼は知つていた。この約束は、今日のわたしたちにとっては、テラーの時ほど真実ではないというのだろうか。多くの例証があげられるが、その代表的なものとして、ミッシェンの指導者の経験をあげよう。ソルトー女史は書いている。

仕事はいつでもふえてゆきます。もし、わたしの生命としてのキリストを、一刻一刻意識するのになかつたら、とても続きはしなかつたでしょう。主がご自身満ち足りたおかたであるという、光栄ある教訓を教えて下さいますので、緊張感や倒れる恐れなどなしに、毎日前進させられております。

今も流れは続く—拡張され、成長を続けるミッシェンの経験において、これは全くの真実であつた。過去三十年間の発展についての主要な事実、付記に収められているが、それらはまことに驚くべき事実である。しかし、ここでは過去のことから現在に注意を転じて、ハドソン・テラーの霊的な生涯の実際の側面についてのみ言及しよう。神について深い知識を得ていたある人が、「神は勝利を得る命を、わたしたちに与えられない。神はわたしたちが勝利を得る時、命を与えられる」（注

1」と言ったが、彼にはこの考えの正しさがわかつていた。彼にとつて勝利の秘訣は、神との毎日毎日、毎時間毎時間の交わりにある。これはひそかな祈りによつてのみささえられ、待ち望む魂にご自身を示されるみことばによつてささえられることを、彼は知った。

テラーにとつて、変化の多い生活を送りながら、祈りと聖書研究のための時間を作ることは、容易ではなかった。しかし、彼はそれがどんなに重要なことであるかを知っていた。彼といつしよに北部中国を、荷車や手押し車などで、何か月も旅行し、夜は最も貧弱な宿屋に泊まったことを、筆者たちはよく覚えていいる。クーリーと共同の大べやに入れられることもよくあったが、そんな時わたしたちは、へやのすみにカーテンを引いて父を休ませ、自分たちはもう一つのカーテンらしいものでへやを作った。ようやく人々が眠つて静かになると、マツチをする音が聞こえてきて、ローソクのあかりがチラチラするのが見えた。どんなに疲れていた時でも、父はいつも持つていた二冊の小さな聖書に没頭するのであった。午後二時から四時まで、彼が祈りに用いた時間であった。この時間は、神を待ち望むためにじやまがはいらないと、いちばん確信のできる時間であった。筆者たちは、密室の祈りについて、読んだり聞いたりしたすべてのことよりも、このローソクの光によつて多くを教えられた。それは説教ではなく実行であつて、現実を意味した。

宣教師の生涯でいちばん困難なことは、規則的な祈り深い聖書研究を持続することであるとテラーは気づいていた。サタンはあなたが聖書研究に用いるべき時間に、窓のブラインドをいじるようなことであつても、何かをさせてあなたのじやまをす

ることを見つけるであろう。次にあげる権威のあることばに、テラーは心からの同意ができたであろう。

時間を取りなさい。ご自身をあなたに啓示する時間を神に与えなさい。聖霊によつて、あなたとともにいます主の臨在の確信と、あなたのうちに働く主の力を受けるために待ち望んで、主の前に沈黙し、静まる時間を作りなさい。主があなたに何を求め、何を約束されるかを知るために、主の臨在のうちにあるようにみことばを読む時間を取りなさい。みことばによつてあなたのうちに、聖なるふんい気、聖なる天来の光を作り出していただくように。その中であなたの魂は、毎日の奉仕のために新たに強められるでしょう。(注2)

ハドソン・テラーの生涯が、神の恵みによる喜びと力に満たされているのは、彼がこのことを実行したためであつた。七十歳を越えた彼は、手に聖書をもつて、ローザンヌの居間を横切つて来て、立ち止まり、子供に言つた。「わたしは、今、四十年間に、四十回目の聖書の通読を終わつたところだ」。テラーは聖書を読んだだけでなく、聖書に生きたのである。

ハドソン・テラーは、キリストに従うためには、どんな犠牲も顧みなかった。彼は中国における働きのさなかで、「十字架を愛する人々が必要です」としている。もし、彼が今日、わたしたちに語りうるなら、それはあらゆる野心の最高峰への招きであつたのではなからうか。「すなわち、キリスト(わたしたちもこよなく愛するかた)とその復活の力とを知り、その苦難にあづかつて」。彼が次のように言う時の静かな声の調子を、もう一度聞きえないであろうか。

世の人々の生命のために、わたしたち自身をささげることが
ぜひ必要です。楽な、自己否定のない生涯は、決して力の生
涯になりません。実を結ぶこととは、十字架を負うことを含
みます。楽な生き方をするクリスチャンのためには、楽なキ
リスト、例外的なクリスチャンのためには、労苦するキリス
トというように、ふたりのキリストが存在されるのではあり
ません。キリストは唯一のかたです。あなたは彼のうちにあ
ることを喜び、多くの実を結ぶ人でしょうか。

注

①Oswald Chambers, *My Utmost For His Highest* 四十七ページ
を見よ。

②Rev. Andrew Murray, *The Secret Of Adoration* 序言から。

付 記

ハドソン・テラーが、昇天する五年前の一九〇〇年に、ミッシェンの指導を他の者にゆだねた時、チャイナ・インランド・ミッシェンには、七百五十人の宣教師がいた。今日（一九三二年）、その数は千二百八十五人に達している。テラーが指導し、祈りによつてささえていたころのミッシェンの収入は、ただ神に求めるだけであつたが、四百万ドルに達していた。一九〇〇年以降の収入合計は、二千万ドルにもなる。これもまた、神のみに求めて与えられたものである。今までも負債はなかつたし、今も負債はない。ミッシェンと関係のある七百人ほどの中国人の働きの人がいるが、これはテラーの祈りに対する豊かな答えである。初めからその時までの回心者で、受洗したものの数は、一万三千人である。今日、三千ないし四千の中国人の働きの人が、CINと関係を持ち、一九〇〇年以降の受洗者だけでも十万人に及んでいる。「主よ、われらにではなく、われらにはなく、……ただみ名にのみ栄光を帰してください」。

テラーは、その働きに対して特殊な関係にあつた。彼は、指導者であつたばかりでなく、その創立者であつた。彼と同じ立場では彼のあとを継げる者はいなかつた。しかし、神が彼のあとに起こされた指導者は、彼に劣らず独自の賜物を与えられていた。一九〇〇年以後、非常に重くなつた責任を負いながら、D・E・ホーストが、ただ祈りの生活にささえられていたが、そのこと自体ミッシェンの祝福であつた。彼の指導した時期は、

あらしと困難の歲月であつた。しかし、その中からこの働きは、いよいよ強化されていった。

どうにもならない試みの時や、外見上の後退の時期があつたことは事実である。中国に革命が起こつて、一夜で共和国と変わった時、地域によつては、恐怖政治が支配し、ミッシェンからも再度の殉教者が出た。昔、帝国の首都であつた西安市では、ベックマン夫人と、宣教師の家族の六人の子供が、暴徒に殺害された。それに抗議しようとしたベイトンも殺された。安全な地を求めて、伝道地を離れなければならなかつた宣教師も少なくなかつた。とどまつた人たちは、恐怖におののく周囲の人たち、特に宣教師の家に避難してきた婦人たちを守ることができた。この時期は、福音を宣教するだけでなく、それに生き残るために貴重な機会となつた。内陸の人々が宣教師たちに友好的な気持ちをもっていることは、きわめて明白であつた。

宣教師たちも、中国人のクリスチャンたちも、日増しにつつてゆく大きな危険に直面しなければならなかつた。学生たちの組織的な示威はもちろん、不法行為や残虐な強奪などが広がつていった。しかし、流血や騒動がさらに悪化しないうちに、事態が大きく変化したことは、全く驚異的なことであつた。今までたよりにしていたすべてを失い、事態の好転を熱願していた中国は、孤立無援の状態で、盗賊の間に倒れてしまった。共産主義や過激派の死にもの狂いのやり方は、各地で目に余るほどだつた。もともとの悪をいよいよ助長して、状態はさらに悪化し、近隣諸国の侵略は、事態をもつとひどい深刻なものとしていた。

中国のことわざに、「倒れた兄弟を踏み台にしてもうける他人」とか、「完成には百年でも足りない。破壊には一日でも長すぎる」というのがある。

これらのただ中であつて、神の守りのみ手は、この働きの上にあり、チャイナ・インランド・ミッションの前進はとどまるどころを知らなかった。この働きが組織的であるというよりも、伝道的であつたことが、人々が友好的な態度をとり、慰めの福音に喜んで耳を傾けた理由である。キリスト教文書の販売のためにも、キリストの救いの力に対する人々のあかしのためにも、今日ほどの好機はない。「主の救いの縫いめのない衣のいやし」(注1)こそ中国が必要としているいやしである。絶望的な状態の中から、生命と希望を願つて、主を求めている傷ついた心の持ち主が、どんなに多いことであろう。

今は、宣教活動の縮少を考える時ではない。それは環境を見るのではなく、神を見る者、「見上げる者」ならだれでもはつきりと知っている。このゆえにこそ、チャイナ・インランド・ミッションは最近、待ち望むという方針から、テラーが最後にいだいていた最大の幻に従つて、輝かしい前進の方針に導かれたのである。「すべての造られたものに福音を伝えよ」という主のご命令の明確な意味について、新しく教えられたことを、テラーは書いている。

主のご命令を実現するために、このわざは、いかなる犠牲をもいとわない、献身、つまり十字架につけられることがなくては、果たせないであろう。もしその献身があるなら、わざは全うされると、心から信じている。あの小論「すべての造られたものに」を書いて出版する時は、わたしの生涯で、最

もはつきりと導きを自覚した時である。

生きた種は、地に落ちて死ぬ。しかし、豊かに実を結ぶ。五年前の一九二七年、ひどい苦難の時期に、二回目の苦しみの洗礼が訪れてきた。その時は、テラーが報いを受けるために地上を去つてから、すでに久しい歳月がたつていた。西欧諸国の政府が、中国に起こった新しい激しい排外運動の暴動に驚いて、それぞれの国民に内陸から退去するようにと命じた時、ミッションに所属している六百人以上の人々が引き上げなければならなかった。ミッションの現北米代表であるロバート・E・グローバー博士(注2)は書いている。

これは、中国の軍隊と学生を刺激して暴動を起こさせ、特にそれを宣教師やその他の外国人に向けさせたモスクワからの扇動によるものであつた。中国全土の大多数の宣教師たちは、伝道所を離れ、愛する回心者たちや何年もかかつて築いた働きを離れて、沿岸地方に向かわなければならなかった。このように、ほとんど気づかないうちに、C.I.M.の数百の宣教師たちは、中国内陸部の閉ざされた戸をあとして去らなければならなかった。

定員をはるかに超過して群がる難民を養うことは、ミッションの財政に大きな負担となつた。上海だけでも十四軒の家を借り、それがある程度、整備しなければならなかったし、旅費も切迫した財源から支出しなければならなかった。財政が切迫していた理由は、本国のミッションを助けている多くの人々が、そのしばらくの時、この働きが行き詰まっていると考えて、他

のほうに献金を回していたからである。チャイナ・インランド・ミッションが、生ける神よりも献金者にたよっていたならば、このことの結果は実際よりもはるかに深刻なものとなったであろう。しかし、テラーが人にもよく言い、自分も自覚していたように、「神はあらゆる事態に応じうるかたである」。

一九二七年の財政危機において、CIMに与えられた神の恵みは、ミッションの歴史において、最も驚くべき祈りの答えとなった。

以下に述べるのが、その事実である。その年のミッションの収入は、何千ドルどころか、何万ドルもの減収であった。必要経費が非常に多くなったのに、経済的な援助を求める宣伝もせず、絶対に借金をしない原則を守り続けて、十一万四千ドル以上の減収という事態に、どのようにして対処できたであろうか。

確かに神は「あらゆる緊急事態に応じうるかたである」。その年、主は予期しない方法で働いて下さった。本国から中国へ送金した資金は、銀貨と交換しなければならなかったが、その交換率の変動は常激しかった。ところがこの年の相場は不思議にも安定しており、しかもミッションの資金にとつては非常に有利な状態になった。本国から送られてきた金の価値はますます上がり、その年の暮れまでの送金は、十一万四千ドル少なかったが、交換率のおかげでミッションは十一万五千ドルの利益を得た。このように必要のすべてが満たされ、特別の試みがあったこの年も、感謝にあふれる年となった。グローバー博士は、門戸が閉じられたことについても、続けて述べている。

それは実際悲しい時であった。人間的に見れば、確かに事態

は暗黒であった。宣教の戸は、二度と開かれなかったのであるか。この疑問の解答はいろいろあった。懐疑的な答え、世的には賢明に聞こえる答え、悲観的な答えなどもあった。しかし、CIMの人々も含めて、宣教師はそこにいた。油注がれた彼らの目は、非常に違った角度からこの事態を見ていた。

この打撃がサタンから直接に來たものであり、ミッションの働きの壊滅を目ざしていることは、明らかであった。しかし、神のしもべたちがサタンの手によって打ち破られるということを教えているみことばがあるだろうか。もちろん否である。サタンが迫害によつてキリストの働きを滅ぼすことに成功した例があつたろうか。全くない。偉大な宣教師であつたパウロは、自分の上にふりかかってきた迫害を、むしろ福音の前進に役だつとあかしし、敵に驚かされないようにと同労者に勧めている。新約聖書の宣教の記録で、敵の反対や迫害が、神によつて宣教事業の前進の手段に、くり返しくり返し用いられた事実ほど、強い印象を受けることはない。今日、敵の一つ一つのおどかしも、前進の機会と変えられ、働きはさらに広げられ、そこからより以上の結果が生み出されるべきである。

CIMが直面していた逆境においても、導きの方向はまさにこれであつた。中国における宣教活動は、これで終わりであるうか。キリストの偉大なる委任が変わらない以上、また、中国の何百万の人々への福音宣教の働きが完了したというには、あまりにも遠い今日、どうして中国での宣教活動が終つたということがありうるだろうか。どんな価を払つても働きは続けられなければならない。それでミッションは、も

う一度門が開放され、将来の計画に明確な導きが与えられるようにと熱心に祈った。

このころ、人々は深く心を探られていた。グローバー博士は祈りについてあかしすると同時に、このことについてもあかしをしている。神が偉大な前進のための幻と自覚を与えられたのは、この試みのただ中においてであつた。CIMの宣教地全域を、詳細に調査した結果、ミッシェンの指導者たちは導かれて神に訴えたのである。激しい伝道的な前進のために、百人ではなく二百人を求めたのである。この訴えが届いた時、ミッシェンに属している本国の人々は、この上もなく喜び、強い感動を受けた。それは多くの祈りの結果であり、神から出たことであると認められた。そしてただちに、働きの全域にわたつて新しい生命が感じられるようになった。新しい宣教師たちを求めていた予定の二年間（一九二九―三一）はすぐに過ぎ去り、信仰はさまざまな面で試みられ、特に中国においては敵の攻撃は激しかったが、そこには励みとなり、祝福となるようなすばらしい物語がつづられていったのである。一九三一年には二百人（その中、九十一人は北米から）の中の最後の集団が、中国へ向けて出発できたばかりでなく、中国で彼らを受け入れる資金も、実にすばらしく備えられた。上海にあつたミッシェンの本部は長い間、この活動には不十分になっていたが、この年ミッシェンは一円も払わないで神の備えて下さった適当な家屋に替えられた。多くの祈りに答えられて、古い家を原価の六十五倍の値段で売却する機会に恵まれた。それは、今は主とともにあるミッシェンの働き人の贈り物である。彼は、成長を続ける働きのために、四十年を経て、ちょうどどうしても必要に迫られた

時に新しい本部を備えることができた。（注三）この建物は、昨年秋、一か月の短期間に、百人ものCIMの優秀な働き人を中国に迎えるのにまにあつた。

このすばらしい備えには、ミッシェンの最も賢明な指導者が考へうるよりも、はるかに多くのことが含まれていた。今年（一九三二年）の初め、日本軍が突然上海を攻撃して来た時、CIMの本部が前にあつた地区と、その周辺が、戦火の中心となつたからである。神の導きのみ手は、ちょうどよい時期に、安全な国際居留地に五キロほど寄つた所に、ミッシェンの本部を移して下さつた。突然に襲つてきた激しい苦難の中で、神以外のだけにこの不思議な導きができただであらうか。

確かに神は、今もご自身の働きの必要に責任を持つていて下さる。CIMが、創立以来の古い原則を厳守していることはたいして不思議ではない。信仰と従順をもつてミッシェンを始めた創立者は、今は神とともにある。今年は彼の誕生百年に当たる。この時を祝い、主に感謝していることも、またきわめて当然であらう。今日、千二百八十五人の宣教師のうちに、創立者の確信を喜んで再確認できない者や、再確認しない者がひとりもないことは、感謝すべきことである。

生ける神は、今も生きておられる。生けるみことばは、生きたことばであり、わたしたちはそれにたよることができる。かつて神が語られたこと、また聖霊によつて書かせられたのみことばにも、すがりつくことができる。

ただ主の愛をのみためしてみなさい
主の真理を確信する者が

どんなに祝福されているかということを経験がそれを決めてくれるでしょう

主の聖徒たちは主を恐れなさい
その時ほかに恐れるものは何もないのです
ただ主に仕えることを喜びなさい
あなたの不足は神が補われます

注

①裂け目もなく全体が一つであることの表徴的な表現。

②医学博士ロバート・ホール・グローバー牧師は、四十二年間の献身的で効果的な指導のちに神学博士ヘンリー・W・フロスト牧師が辞職した責任を、一九二九年末から引き継いでいる。フロスト博士がミッシェンのために名誉本国代表として貴重な働きを続けておられることは、関心を持つ者のすべてが感謝するところである。

③ミッシェンの働きを引退した米人の寄付で非常に必要であつた中国人の働き人と客とのために、りっぱな家が与えられた。

神のために、大きなことをする可能性も、必要も、過去のもので、今はもうないというのは、正しくない。力の恵みの可能性に関して、過去の歴史にしか頼めない教会は、墮落した教会である。∴この時代に最大の益をもたらさうるのは、教師たちと教会を祈りに引きもどす人である。

E.M.バウンズ著「祈りによる力」より

あとがき

ハドソン・テラーによつて始められたチャイナ・インランド・ミッション (China Inland Mission) は、一九五一年以来、中国での働きを続けることができなくなり、現在、オーヴァーシーズ・ミッションナリー・フェローシップという名まえで、日本をはじめ、東南アジアの各地でその働きを続けております。日本での名まえは、国際福音宣教団です。

しかし、働きの原則は、名まえが変わっても少しも変わつてはいません。この団体は、宣教のために必要な資金を、決して人に求めず、すべてのものの所有者である神に求めます。そして、聖書を神のみことばであると信じる超教派の団体として活動を続けております。

ハドソン・テラーが召されてすでに六十年たちました。人々は物質的なものにたよつて、神がすべての供給者であることを忘れていきます。しかし、主に信じ従う者にとつて、神は今でも生きて働いておられるかたです。本書は、それを証明するものです。聖霊に用いられる祈りの人が多く起こされることは、この国にとつても緊急な必要事ではないでしょうか。

最後に、この本のために労して下さった諸兄姉に心から感謝を申し上げます。

一九六四年五月

国際福音宣教団

年譜

一八三二年五月二一日 ジェームズ・ハドソン・テラーは、英国ヨークシア州バーンズリーに生まれる

一八四九年六月 回心。生涯の奉仕への召命

一八五〇年五月 ハルにて、ロバート・ハーディ博士の助手となつて、医学の研究を始める

一八五〇―一八六四年 長髪賊の乱

一八五三年九月一九日 中国伝道協会の代理人として中国へ出帆

一八五四年三月一日 ハドソン・テラーの上海上陸

一八五四―一八五五年 四回にわたる伝道旅行

一八五五年一〇―十一月 「内陸」での最初の家、崇明島で六か月過ごす

一八五五―一八五六年 ウィリアム・C・バーンズ牧師と七か月過ごす

一八五六年一〇月 寧波に定住

一八五七年六月 中国伝道協会を辞任

一八五八年一月二十日 マリヤ・ダイヤーと結婚

一八五九年九月 寧波でパーカー博士の病院の責任を引き受ける

一八六〇年夏 第一回の休暇で英国へ帰る

一八六〇―一八六五年 陰での数年間

一八六五年六月二五日 ブリストンでの全き献身、二十四人の同労者を求めて祈る

一八六六年五月二六日 チャイナ・インランド・ミッションの第一グループ ラマミュール号で出帆、四か月の旅

一八六六年一二月 ラマミュール・グループ杭州に安着
 一八六七年八月二三日 幼いグレーシーの死
 一八六九年九月四日 新たな生活の初め、「神はわたしを新しくして下さった」
 一八七〇年六月二一日 天津大虐殺
 一八七〇年六月二三日 ハドソン・テラー夫人（旧姓ダイヤー）死去
 一八七二年三月 ゼ・バーガー引退
 一八七二年八月六日 チャイナ・インランド・ミッションのロンドン委員会設立
 一八七二年一〇月九日 テーラー夫人（旧姓フォールディング）とともに中国へ帰る
 一八七四年一月二七日 未伝の九省への開拓伝道者を求める祈りの記録
 一八七四年六月 ジャッドとともに武昌にミッションの西部地域支部を開設
 一八七四年七月二六日 エミリー・ブラッチリー死去
 一八七四一八七五年冬 干潮の極点、テラーはからだが麻痺し、英国で病床につく
 一八七五年一月 未伝の九省への十八人の開拓者を求めて祈るためのアピール
 一八七六年九月一三日 芝罘（チーフ）会議調印
 一八七六一八七八年 中国内陸全域にわたる広範な伝道旅行
 一八七八年秋 ハドソン・テラー夫人、婦人宣教師の先頭に立って奥地へ前進
 一八七九年秋 ジョージ・ニコル夫人とG・W・クラーク夫人、

中国西部で婦人の働きのために道を備える
 一八八一年五月 ジョージ・キング夫人、漢中で死去
 一八八一年一月 七十人を求めてアピール（武昌）
 一八八五年二月五日 ケンブリッジ隊の出發
 一八八六年一月一三二六日 中国委員会の第一回會議、百人を求めるアピール（安慶）
 一八八七年一二月 ヘンリー・ゼ・フロスト訪英、テラーを米国に招く
 一八八八年夏 テーラー、初めて北米を訪問
 一八八九年一〇月 生涯の高嶺に立つ、「すべての造られたものに」
 一八八九年一二月 スエーデン、ノールウェー、デンマークを初めて訪問
 一八九〇年八月 オーストリアを初めて訪問
 一八九〇年五月 義和団の乱勃発
 一八九〇年八月 D・H・ホースト、総代表代理に任命
 一九〇二年一月 テーラー代表を辞し、ホースト後任となる
 一九〇四年七月三〇日 ハドソン・テラー夫人スイスにて死去
 一九〇五年二月 テーラー最後の中国行き
 一九〇五年六月三日 湖南（フーナン）省にて召天

テーラーの生涯とその秘訣

800円

昭和39年5月25日 発行

昭和51年3月15日 7刷

著 者 ハワード・テーラー

訳 者 舟喜信

発行者 いのちのことば社

印刷所 いのちのことば社印刷部

発行所 いのちのことば社

160 東京都新宿区信濃町6

S-38 (c) いのちのことば社 1964

著作権切れ